
闇に朱色がよく似合う

太郎鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇に朱色がよく似合う

【Nコード】

N9802A

【作者名】

太郎鉄

【あらすじ】

吸血鬼が人間の血液無しで生きていけなかったのは、爺さんの代までの話だ。俺達は生物として大分進化を遂げていた。もともと、血の味は相変わらず甘美ではある。いくら俺のように無欲な吸血鬼でも、時々、耐え難い渴望に苛まされるんだ。俺はその度、アズサの名を思い出すー。

一、通り魔（前書き）

前から書きたかったものを、書きます。この作品に、現状自分のやりたい事を、全部ぶちこもつと思っています。楽しんで頂けたら、幸いですー！。

一、通り魔

爺さんの代から考えると、生物として、俺達は大分進化を遂げた。顔が《蒼白い》事を覗けば、見た目はほとんど人間と変わらないのだから。しかし、血の味は相変わらず甘美だ。吸わずとも生命を継続する事は出来るのだが、俺のように無欲な吸血鬼でさえ、時々激しい渴望に苛まれる。血にむしろぶりつきたくなる。俺はその度、アズサの名を思い出す――。

「きちやった」

これから事を始めようとした矢先、アズサは恥ずかしそうにトイレへ向かった。太ももの内側に、僅かに血液が付着しているのが見える。トイレのノブに手を掛けると、思い直したように、全裸のアズサがナプキンと生理用の下着が入ったバッグを、慌てて取りに戻ってきた。

「ごめん……。久しぶりだったのに」

「いいさ。お前のせいじゃない」

俺はアズサの頭を撫でながら、リップスティックで水気を帯びたプリンのような唇に、俺の乾いたそれを、そっと重ねた。

「俺の方こそ、すまないな。行くよ」

途方もない渴望を抑え、俺はアズサを抱き締めた後、散らばった服を集めて着衣した。名残惜しそうなアズサの大きな瞳に、愛おし

さを感じつつ、部屋を出る。隣りの部屋から悲鳴が聞こえた。同胞の気配――。たまらなく不愉快な気分が俺の中に溢れる。

見殺しにするか、助けるか――。くだらない。隣りの部屋にアズサを残してきているのだ。血に狂った同胞の所業を見過ごすわけにはいかない。

悲鳴の根元――402号室の扉の前へ。

俺は俺自身の魔性を解放する。人である体の部位が、人の硬度を遥かに上回っていく。イマジネーション。指先は――細い針に変える。針を鍵穴の中へ。鍵の形状を確認。針を鍵に変え、扉を開けながら、指に戻す。室内へと侵入する。スピーカーから有線のバラードが流れていた。甘美な血の匂い。強烈な渴望。激しい目眩。

同胞は半裸で、下半身にはジーンズを履いていた。金髪が蒼白い肌をさらに際立たせている。襲われているのは恐らく女子高生と思われる少女だ。乱れた制服、白のワイシャツを朱が浸食している。首筋を切られているらしい。かなり雑な食い方をする同胞だった。

同胞はベッドに少女を押し倒し、首筋に貪りついていた。虚ろな少女の目からは、生の光が失われつつある。

俺に気付いた同胞が不愉快そうに首を後ろに回した。

「なんだ、お仲間じゃねえかよ」

口の周りを、少女の朱でだらしなく染めた同胞は、さも忌々しそうに、血が混じった唾を吐き捨てる。

「ハイエナかてめえ。こいつはわけてやらねえぞ。久々の処女だからな」

「処女の血は美味いらしいな」

「ああ？おめえ、飲んだ事ないのか？」

なるべく刺激しないように、俺はゆっくりとベッドに近付いていく。幸い、同胞は食事に夢中で俺の魔性が解放されている事に気付いていないようだ。

「ああ。一度飲んでみたかったんだ」

少女は辛うじて息をしている。せつかくだから死んでくれるな――
願いを胸に抱く。

「マジかよ？仕方ねえな。ひと舐めだけならさせてやってもいいぜ」

俺は全ての意識を右腕に集中し、ブレードのイメージを頭に描いた。切るでは弱い。斬るに移行する。

同胞は立ち上がり、冷蔵庫から缶ビールを取り出した。俺は覆い被さるように少女を抱き、自ら唇を噛み切る。俺の血が少女の傷口に滴り落ちた。首筋の細胞が治癒に目覚め、目に見えるスピードで皮を再生していく。応急処置は完了した。だが、輸血の必要性が消えるわけではない。一撃で決める。

栓を開ける音がした。続いて炭酸が解放の産声をあげる。

俺は振り返り、少女を離れる。

「どうだ。うめえだろ」

言いながら同胞はビールを口に運んだ。俺はその瞬間に、先ほどのイメージを爆発させる。硬質化した腕が、湾曲したブレードに変貌し、同胞の喉を目掛けて伸びていく。同胞に魔性を解放する時間はない。気付くのと、首が胴から離れるのがほとんど同時であった筈だ。

缶ビールと共に、同胞の頭が絨毯に落ちた。

胴が頭を拾おうとする。動作が緩慢に過ぎた。思考の伝達が緊急事態によって致命的な遅れを生んでいた。

俺は胴の四肢を八分割した後で、ブレードを手刀まで戻し、硬直した指を解した。

「てめえ……」

同胞の頭は、地べたから俺に憎悪の視線を送り続けていた。

「何のつもりだ。仲間じゃねえのかよ」

「あいにく、俺は俺の血統を呪っているんでね」

「糞が、油断したぜ、解放してりゃ、こんな……」

同胞は最後の抵抗のつもりか、あるいは自分の惨状をより立体的な角度から確認しようとしたのか、眼球を顔から這いずりだした。

二つの眼球が、ミミズのようにうねりながら絨毯を移動していく。

「ちくしょう、これじゃ、再生できねえ」

頭がそう眩くと、眼球は二つの穴に再び収まる。

「思い出したぜ。てめえ、通り魔だな。あちこちで同胞殺し回ってるらしいじゃねえか、ああ？人間に媚びやがって、何だって、食事の邪魔しやがった？」

「お前がこのホテルを選ばなかったら、無視していたさ。選択を悔やむんだな」

そろそろ少女を病院に運ぶ時間だ。有線の曲がポップスに変わっている。

「生まれ変わったら、股間以外も硬くしておけ」

「まで、俺はもう動け……」

刹那に脚をハンマーに変えた。僅かな集中のせいで不細工なものしか出来なかったが、頭を潰すにはこれで充分事足りる。

ベッドの傍らのテーブルに置かれた白い電話の外線ボタンを押して、110番に掛けたあと、少女を抱き上げて部屋を出た。

アズサを呼ぼうか迷ったが、ただでさえ少女の首筋や衣服からの甘い誘いに己を律するのが精一杯の俺に、生理中のアズサが加わっては、耐えきれそうもない。諦める事にした。同胞の気配はもう感じられない。アズサに危険が及ぶ事はないだろう。

俺は廊下の奥、非常階段の扉を蹴破り、手すりに足を掛け、少女を抱えたまま、夜に跳んだ。

ビルとビルの間を、あらゆる建造物の頂上を足場にしながら、闇を跳躍する。

眼下には、ネオンに照らし出された街が見える。街灯をさらにイルミネーションが明るくしている。街路樹にも、派手な装飾――。

もうすぐ、クリスマスか――。

俺はアズサにどのようなプレゼントを渡そうか思案を巡らせながら、病院の前に着地した。

二、差別

「先日、渋谷区内のラブホテルで男性の吸血鬼が殺害された事件の続報です。

男性の身元は、遺留品から太田区に住む片山ロクシ（121）である事が判明しました。また、片山の牙からは、同じく同日、何者かによって同渋谷区内の病院に運び込まれた少女のものと同一の血液が付着しており、警察当局は関連を調査しています。少女の意識は、依然回復していませんが、命に別状はないもようです」

新人のアナウンサーが、隣に座る恰幅のいい初老のコメンテーターに視線を移した。

「柳沢さんは、この事件についてどう思われますか？」

「まあ、また吸血鬼の不祥事でしょうな。恐らく、少女を襲っている最中に、仲間割れでもしたのでしょう。少女を助け出したのは恐らく善意の第三者ではないでしょうか。とにかく、このような事件は今年に入ってから増え続けていますからね。吸血鬼保護法を見直さなければならぬでしょう。彼ら、少しばかり調子に乗りすぎて…」

俺はテレビの電源を切った。爺さんがもし同じ番組を見ていたら、柳沢は今日中に殺されるだろう。奴は保守派層の吸血鬼にかなり前から疎まれている。

俺はソファアーベッドから体を起こし、シャワーを浴びて仕事に向かった。

「おいソウクちゃんよお。また、吸血鬼が人間襲つたらしいじゃん」

同僚の矢部が、嫌みたらしく話しかけてくる。俺の苦手な人間だ。

「お前も、その内襲うんじゃないの？マジ勘弁しろよな。社長の温情で雇ってもらってんの忘れるなよ？」

俺は矢部の言葉を無視して、ベルトコンベアーから運ばれてくる部品を黙々とダンボールに詰めていた。

「お前、聞いてんの？何とか言えよ。おい、こら」

隣の矢部が俺を小突く。ガキの戯言に付き合つのは慣れているが、今日は虫の居所が悪かった。

「少し黙っててくれ。仕事中だ」

「何だと？」

矢部は作業着のポケットに手を入れて、バタフライナイフを取り出した。

「知ってるよな？生意気な吸血鬼に対する暴力は、法律で認められてんだぜ？」

「ああ。手続きをキチンと踏めばな」

「バカかてめえ。ここじゃ工場長の俺がルールなんだよ」

構わずベルトコンベアーの動きを追って、次の部品を拾おうとした時に、俺の手の甲にナイフが突き刺さった。

痛みはない。あるのは苛つきと衝動だけだ。血が、ゆっくりと傷口から溢れ出す。

「な？言葉使いに気をつけろよ」

矢部はナイフを抜こうとする。抜けなかった。急速に傷口が塞がり始め、刃を締め付けている。

俺は矢部を見つめた。矢部は両手を使い、渾身の力を込めて、なおも自身が突き立てた刃を抜こうとしている。

完全に傷口が塞がると、ナイフは折れ、切っ先は俺の体内で溶けた。力を込め続けていた矢部は、その反動で尻餅をつく。

工場内の作業員が一斉に俺達に視線を注いだ。

矢部はしばらく唾然としていたが、やがて立ち上がり、舌打ちをした後、手を止めている作業員達に罵声を飛ばして、俺に舌打ちした。

アズサの生理が終わると、俺達は再会した。有楽町のマリオンで映画を鑑賞し、銀座でアズサの買い物に付き合う。

「ねえ、今日はちゃんとしようね」

白いコートに身を包んだアズサは、上目遣いで俺を誘う。数寄屋

橋の交差点。背後の交番から、警官の視線を感じていた。

「ちょっと」

俺とアズサは振り返る。

「君、吸血鬼だね？」

交番から警官が手招きしていた。

俺とアズサはそちらに向かう。

「お嬢さん、彼とはどういう関係なの？」

「付き合ってます」

警官は怪訝そうに俺をジロジロ眺め始めた。

「でも、彼吸血鬼でしょ？肌の色、蒼白いもんね？それに牙も見える」

「だから何です？」

アズサは警官を睨んでいた。よくある事だが、これにアズサが慣れる事はない。

「関心しないなあ。失礼だけど、その、男女の関係はあるの？」

「ありますよ。いけないんですか」

毅然とした物言いに、俺の方が照れくさくなる。

「いや、子供出来たら、違法だよ？降ろさなきゃなんない」

「避妊しっかりしてますから」

「アズサ、もういい」

アズサと警官の間に立つてから、俺は警官に頭を下げる。

「すみません。法律を破るような事はしないので、この辺にして頂けませんか」

「だがねえ」

「お願いします」

警官が押し黙り、しばしの沈黙が訪れる。

「まあ、人間に迷惑かけなきゃいいんだがね、それでもやっぱり恋愛はいただけないなあ」

痛み。俺の体のどこかに芽生える。

「どちらにせよ、君達にゴールはないんだから、早い内にけじめつけなよ」

「行こう、ソウク。気分悪い」

俺はアズサに腕を引っ張られ、その場を後にした。横断歩道を渡

る前に、アズサは再び交番に振り返り、目をキツく瞑って舌を出していた。

夜になり、俺とアズサは交わっていた。アズサは官能的に俺の体の隅々を愛撫する。普段なら、アズサのマンションに赴く事はない俺が拒否する。住人に見られたら、アズサはここを追い出されてしまうからだ。

今日のアズサは強引だった。恐らく、警官の言葉に苛ついていたのだろう。

私達の邪魔なんて、誰にもさせないんだからー。

今日における俺の拒否は、このアズサの言葉に拒否されていた。

アズサは仰向けの俺に跨り、激しく腰を動かしていた。俺は揺れるアズサの乳房に手を触れる。母の顔を知らない俺達吸血鬼は、本能的に女性の乳房に安らぎを覚えると、確か爺さんが言っていた。

俺達は果てると、ベッドの上で抱き締め合う。

「ソウクはさ、本当に血を吸わなくていいの？」

胸の上に頭だけ乗せて、アズサはそう呟いた。

「何故、そんな事を聞く？」

「だって、血って美味しいんでしょ？私、ソウクになら、ちょっとくらい吸われたっていい」

「お前も知ってるだろう。吸血鬼にとって、血は麻薬と変わらない。一度吸ったら、もう、吸わずにはいられなくなる。依存してしまふんだ。そうなったら、俺もいつか、人間を襲う吸血鬼になっ
てしまふかもしれない」

「だったら、私の血だけ吸えばいいじゃん。生理中だって、私ソ
ウクに会いたいもん」

「簡単に干からびちまうよ。アズサみたいに華奢な女の子はな」

アズサは顔を膨らませた後、起き上がって冷蔵庫の扉を開けた。
赤ワインを取り出し、キッチンの食器棚に置いてある二つのグラス
に注ぎ、それを手に取って、こちらへ戻ってくる。

「それじゃ、血の代わりに」

俺はアズサからワインを受け取る。

「これで我慢だね」

互いのグラスを弾かせてから、俺は一息にワインを飲み干した。
心地よい苦味が、口の中に広がった。

三、ドラキュラ伯爵の使い

爺さんから、数年振りに電話があつた。

「ソウクか」

「ああ。どうしたんだ爺さん。国際電話は高いぜ」

「お前の噂、こちらまで届いているぞ」

洗濯物が、風に揺らされているのが見える。雨が降りそうだ。

「それで？」

「お前がどんな理由で同胞を殺しているのか知らんが、これ以上は庇いきれん。伯爵が怒っておられる」

「説教なら勘弁してくれ」

夜の闇の彼方、星が無限に輝いていた。

「説教ではない。忠告だ。はつきり言っておこう。次に同胞を殺す事があつたなら、お前の命は保証出来ん」

「悪いが、俺にも守りたい者がいるんでね。そいつを脅かす可能性が少しでもあるなら、誰であろうと俺は殺すぜ」

「人間に惚れたか。血族の恥め。人間など、犯すか殺す以外に使い道はないわ。日本などという国にいるから、そのようにくだらん

迷いを抱くのだ。即刻帰って来るがいい」

星空の間に、赤い光が見えた。

「爺さん」

「何だ？」

「強引に連れ戻す気なら、初めからそう言ってくれ」

俺は受話器を思い切り叩きつけた。魔性の解放を始める――間に合え。

ガラスが割れる音。洗濯物が燃え上がった。続いて室内に熱風が舞う。あらゆる家具が、ポルターガイストの如く揺れ始める。

次いで、赤い閃光が俺の左腕に貫通する。腕が千切れ、フローリングの床に落ちた。

魔性の解放が終わる。洗濯物が、熱風に煽られ、室内に侵入した。ベッドに火種が移り、炎が立つ。

左腕を回収する暇はない。

相手は飛び道具を使う。俺はベランダに出て、赤い光を見据えた。

恐らくは本国の吸血鬼。空を浮遊しつつ、攻撃を行うという多様化した行動パターンを持つ吸血鬼に、俺は日本で出会った事がない。

瞬きの間に、奴は近付いてくる。

銀髪。翼に変えられた背骨が、両肩を突き破って、上下に羽ばたいていた。黒のタキシードを着た痩せ身の吸血鬼が、俺の眼前を浮遊している。

背後から熱。すでに部屋全体が燃え上がっている。

「爺さんの使いか」

「正確には、伯爵の使いです。あなたに脅しをかけておくよう、命令されて来ました」

本国から飛んできて魔性が切れなくなると、俺が太刀打ち出来る相手ではない。

「ドラキュラのか。脅しのわりには、随分手荒な真似してくれるじゃないか」

銀髪の吸血鬼は、クスリと笑い、手の平を俺の顔に向け始める。

「アルカード・クスカと申します。小田桐ソウク。以後、お見知りおきを」

クスカの手の平が、炎に包まれていく。やがて、それは奴の体を俺の視界から遮る程に巨大になっていった。隣室から悲鳴。

「待て！狙うなら俺だけにしろ！」

炎の中から、冷笑が聞こえた。

「人間を庇うとは、やはり、あなたは危険ですね。少々お灸を据えて置きましょう」

炎がアパート全体を包み込んでいく。叫び声が刹那に俺の耳をつんざいた。

俺は極限にまで魔性を解放し、体全体でドームのイメージを描き、爆発させた。瞬間、俺の体は砕け散り、即座に肉片が繋ぎ合わさって、増殖し、ベランダからアパート全体に広がっていく。炎が全てを覆い尽くす前に、俺は円形のドームとなってアパートを守った。

これ程に巨大な魔性を具現するのは、俺の力では一分が限界だ。まずい。次の攻撃に備える事が出来ない。

熱が俺の体を焦がしていく。集中力が、加速度的に削がれていった。

「今後、同胞殺しはお止めください。伯爵は、近い内にこの国に進出する予定です。戦力を減らさないで欲しい」

意識が薄れていく。ドラキュラが来る？悪い冗談だ。休戦協定が破られるというのか？

「しかし、この国における吸血鬼の扱われ方は頂けませんね。まるで奴隷だ。あなたのように、王族の血に連なる者が、革命を起こすべきでしょう。それなのに、あなたは甘んじて奴隷である事を受け入れている」

クスカの声が、徐々に小さくなっていった。

「理解出来ません。とにかく、これに懲りたら、同胞殺しはお止めなさい。祖父のブラド様も嘆き悲しんでおられます。あなたにその気があるのなら、我々はその罪を許し、再び友として、同胞として迎える事でしょう。考えておいて下さい」

糞食らえだー！。

言葉にしたかったが、ドームと化した俺に声帯はなかった。やがて、俺の意識はぶつりと音をたてて、闇に溶けていった。

四、友来たる

社長室で、俺は出された茶を啜っていた。社長室、とはいっても、小さな町工場の一部屋を、そのまま改造しただけの質素な部屋だ。

特に装飾もなく、あるのはそこかしこが破れた黒いソファーと、茶褐色の執務机。窓からは、この町の看板となっている森林公園が見渡せる。

「ソウちゃん、矢部と揉めたんだって？」

社長は執務机の上に座って、冬だというのに汗だくの顔を、首にかけたタオルで丁寧に拭っていた。作業着がはちきれそうな程肥えているが、これで意外と女性にもてるらしい。

「いつもの事ですから」

「あんまし、気を悪くしないでな。あいつも根は悪い奴じゃねえんだがよ、ほら、やっぱり吸血鬼に関してはちよつと歪んだ印象持ってるから」

汗を拭いながらも、社長の言葉には俺に対する謝罪の念が感じられた。

「解ってます。気にしてませんから」

矢部は今から三年前、二十八の時に、吸血鬼に妻を殺されている。

「人間てえのは、厄介だよなあ」

ようやく、汗を拭き終わった社長は、何故かわざわざそのタオルの匂いを嗅いで、しかめ面をする。

「とことん何かを好きになる事もありやあよ、とことん誰かを憎む事もある。極端な事が出来る生き物なんだよな。んでもってよ、なんつつか拡散的だ。例えば、アメリカ人の一人を凄く好きになったらよ、アメリカって国全部好きになっちまう。逆に憎み始めたら、アメリカ全体を憎み始める。ああ、こりや人間つつより日本人の特性か？」

俺は何となく、社長が言いたい事が解ったような気がしたが、特に何も答えず、黙って茶を啜っていた。

「矢部もよ。」

そういう極端に不器用な人間の一人なだけよ。そりやオイラも、矢部の上さん殺した吸血鬼は許せねえがな。でもそりやソウちゃんじやねえ。ソウちゃんは真面目に働いてくれるし、何よりアズサの命の恩人だ。ソウちゃんにあたるのは、間違ってる。そんな事、きつとあいつも解ってると思うんだがなあ」

両膝に手を置いて、うなだれながら社長は深くため息をつく。

「解ってても、誰かにあたんなきやどうしようもねえ時があんだわ。人間にはなあ。矢部にはオイラからも注意しとくから、許してやってくれな？」

社長が、俺に頭を下げる。

「大丈夫ですから、社長がそんな事気にしないでください。そも

そも、吸血鬼の俺を雇ってくれている社長には、それだけで、どれだけ働いても返しきれない恩があるんですから」

「よせやい。アズサの事思えば、んな恩、針の穴よりちっちえもんさ」

社長は照れくさそうに頭を掻いた。

「そういや、ソウちゃんの部屋火事にあっただけで、大丈夫なのかい？」

アズサが口を滑らしたらしい。まったく、余計な事を。

「ああ、小火ですみましたから」

「ならよかった。そんじゃ、午後もよろしく頼むなあ」

俺は頭を下げて、社長室を後にした。

仕事が終わると、俺はアズサのマンションに戻る。他は無事だったが、俺の部屋は全焼していた。

アズサを頼るのは忍びないし、元々俺が転がり込むのを拒んでいたので本末転倒だが、住む家がないのはさすがに厳しかった。背に腹は替えられない。

幸い、アズサの部屋は最上階の十階だった。俺は人目につかないよう、最大限の注意を払い、裏口の前から、屋上へ跳ぶ。

マンションは、周囲を緑に囲まれた小高い丘の上に建っている。彼方には街も見渡せ、ここから見える夜景には、無感動な俺でさえ、何か心を揺さぶられるものがあった。

屋上は立ち入り禁止なので、当然入口には鍵が掛かっている。俺はラブホテルの扉を開けた時と同じ方法で、マンション内に侵入し、そのままアズサの部屋まで走る。

合鍵を使い、部屋に入ると、シャワーの音が聞こえた。

「おかえりー」

バスルームに反響した声が俺の耳に届いて、ようやく俺は安堵する。

「ただいま」

誰かにただいまと言う事が、これほど心地良いものだという事を、百五十年も生きてきたにも関わらず、俺は最近知ったのだった。

アズサはバスタオルを羽織って、俺の元へ走ってくる。抱き寄せた。

「うん、いい感じ。やっぱり、誰かが帰ってくる家っていいね」

シャンプーの香り。血には及ばないが、やはりある種の甘美さがある。

「出来れば、しばらくこのままでいたいが、お前に風邪引かせる訳にもいかないからな。それに、玄関はじゃれる場所じゃない」

「ソウクって、無駄にキザだね。別に嫌いじゃないけど」

悪戯っぽく微笑んで、アズサは玄関から左手の洗面所に向かった。ドライヤーの音が聞こえてくる。

俺はリビングのベッドに腰を掛け、アズサの支度を待っていた。

.....！

同胞の気配がする。近い。距離にして五百メートル前後。

バルコニーから外を眺めた。この気配は、ヤマシのものだ。

どういつつもりだ？明らかにわざと気配を俺に送っている。しかも、奴は動かない。

洗面所から、パジャマ姿のアズサが出てきた。

「アズサ」

「なに？」

「悪いんだが、ビールを買ってきてくれないか？」

「冷蔵庫に入ってるよ？」

「黒生が飲みたいんだ」

アズサは目を細めて、口を尖らしていく。

「もう、ワガママなんだから」

クローゼットからダッフルコートを取り出し、パジャマの上に羽織るアズサ。風邪を引かない事を祈る。

「行ってくるから、ちょっと待っててね!」

不機嫌そうな声と共に、扉の閉まる音がした。

俺は再び、バルコニーに身を乗り出す。ヤマシが近付いてきた。奴は、彼方の街の灯りを背に、闇を跳んで、瞬きの間にバルコニーの手すりに着地する。

「よう」

ヤマシ――黒の短髪。彫りの深い顔。上は黒のパーカー。下は茶色のハーフパンツ。

「寒そうな格好してるじゃないか、ヤマシ」

「どうも長ズボンってヤツが苦手だな。時間、大丈夫か？」

「アズサは使いに行かせた。十分は帰ってこない」

ヤマシは頷く。

「話があるぜ。解ってると思うが、ドラキュラの話だ」

いつになく深刻な表情のヤマシ。この男には元々蒼白さが似合わ

ない。

クスカの言っていた事も気になる。ドラキュラの話なら、追い返す訳にもいかなかった。

「聞こう。だがその前に」

「何だよ」

「靴を脱いで中に入れ。そこは目立ち過ぎるし、寒すぎる。俺はお前みたいに、体育会系じゃないんでね」

ヤマシは愉快そうに笑うと、手すりに手を掛け、そのまま滑るようにリビングに降り立った。靴を脱ぐのは、後回しにしたようだ。

五、通達

ヤマシは、俺の信頼に足る唯一の吸血鬼だ。こいつも、人の血を断って生きている。

「ドラキュラ伯爵の来日は聞いてるよな？」

勝手に冷蔵庫を漁りながらヤマシは言う。缶ビールを取り出し、蓋を開けて飲み始めた。口の回りについた泡を舐めると、床に座つてあぐらをかく。

俺は苦笑する。マイペースなところは相変わらずだ。

「お前のところにも届いたんだろ？通達」

「通達？」

ヤマシはパーカーのポケットから、ハガキと思われる黒い長方形を取り出し、俺に投げつけた。人差し指と中指に挟むようにして受け取る。

黒に赤字。本国の文字で、そこにはこのように綴られていた。

《同胞よ。虐げられし時は終わった。今こそ立ち上がり、積年の屈辱を晴らす時。我は参る。諸君らの解放と、復讐の為に。聖夜に、あるいは呪われし夜に、神の家に集え――ID・ブラド・ツェペシ》

鳥肌が立った。クリスマスに、ドラキュラは本当に再び戦争を始めようとしているやがる。

「なんだ、お前にや届いてなかったのかよ」

蒼白い顔を、さらに蒼白にしている俺を見て、悟ったらしい。

「ああ。使いから断片的には聞いていたが…」

「使いだ？ドラキュラの使いが来てんのか」

「俺の同胞殺しを止める為にな。この戦争の戦力を減らしたくないらしい。軽く、脅しをかけられた」

「誰が来たんだ？」

「アルカード・クスカ」

口に含んでいたビールを思わずヤマシは吹き出した。

「アルカード？ドラキュラ直属の親衛隊の性じゃねえか。それでお前の部屋、火事になったってわけか？よく無事だったな」

俺は頷く。どうやら、ヤマシは先に俺のアパートに足を運んでいたらしい。ここから大した距離じゃないが。

「んで？どうするお前」

ヤマシが残りのビールを豪快に飲み干す。

「どうするとは？」

「クリスマスだよ。行くか行かねーか」

「答えは知っているだろう？」

空になった缶を、ヤマシは宙に放る。次の瞬間、缶は乾いた音をたてて破裂した。

「腕を上げたな」

「人間に対する脅し用にな。苦勞したんだぜ。爆竹はイメージが大変だからな。ちよつと気合い入れると人間の頭なんざすぐ吹き飛んじまう。それに触媒が唾だからな、狙いがむじい。でも慣れると楽でいいぜ。魔性も僅かな解放ですむ」

なるほど。瞬間的な魔性の解放でここまでの破壊力が出せるのは確かに便利かもしれない。

「人の部屋で唾を吐くな」

「おお、悪い悪い。やっぱりお前は行かねーか。まあ、今日はそれだけ聞きにきたんだ」

「行くのか、ヤマシは」

「馬鹿言っな。今更ジジイ世代が創る世界になんざ興味はねえ。だが、この国の状況じゃ、かなりの数の吸血鬼が集まるだろうな。保護法とかいうふざけた法律のせいで、どいつもこいつもストレス溜まりまくってるだろ」

その通りだった。実際に戦争が始まるとしたら、この国に籍を持

つ殆どの吸血鬼がそれに参加するだろう。そうなったら、今度こそ人間側の勝利は危うい。何せ休戦協定が結ばれている。このタイミングで破られるなど、夢にも思わないはずだ。気が付く前に日本人が皆殺しにされているという可能性も多いにある。

「どちらが勝つにせよ、俺達みたいなみそつかすには、より住みづらい国が出来上がるだろうぜ」

ヤマシが舌打ちした。

まったく、その通りだ。それに、このタイミングでドラキュラが動き出すというのも何か臭い。まるで日本侵攻に《強行せざるを得ない》事態でも起こったようだ。保護法によって俺達を含む吸血鬼は確かに人間に虐げられてはいるが、そんな理由でドラキュラがわざわざこの国に赴くとは考えられなかった。

奴は自分以外の吸血鬼に、ひとかけらの情も持っていないのだから。

「本国の保守派がここまで大それた事を考えてたなんてよ。やれやれだぜ」

ヤマシのため息。

「ドラキュラの意志か、それとも爺さん達の総意か。どちらにせよ、クリスマスまであと一月だ。身の振り方は考えていた方がいいな」

身の振り方。嫌な言葉だ。俺はアズサとの生活を手放す気など、どこにもない。

「ま、幸いにしてこの通達は強制じゃなくて有志だからな。手を貸そうと貸さなかつと、文句は言われねえだろ。下手に邪魔しない限りはな」

ヤマシの視線が鋭くなる。友人としての、ささやかなアドバイスという事か。命が大事なら、この件には手を出すな――。

「わざわざ、済まなかつたな」

「いいつて事よ。俺とお前の仲じゃねえか。ま、俺達は仲良く傍観者を気取るうぜ」

鍵を差し込む音が聞こえた。アズサが帰ってきたようだ。

「ああ、ここ彼女のマンションだったな。それじゃ俺はおいとまするぜ」

ヤマシは立ち上がり、バルコニーに向かった。

「でもよ、考えといた方がいい。所詮、人間と吸血鬼なんて、恋仲になれるもんじゃねえんだ。お前や俺が、血を断つてゐるなら尚更な」

バルコニーに手をかけたところで、振り返らずにヤマシが言う。

「解つてゐるさ」

「どうかな」

手すりに足をかけ、再びヤマシは夜に消えていった。アズサのただいまという声を聞きながら、俺はこの戦争を何としても阻止しよう、一人思案を巡らせた。

六、襲撃

嫌なニュースで溢れていた。このところ、吸血鬼による殺人事件が局地的に頻発している。恐らく、例の通達で、戦争の勝利を見越した奴らが、大量に先走っているのだろう。

ヤマシと話してから三日。報道されているだけでも、都内で四十件。全国を合わせると百を超える。

しかも、一軒は俺の職場の近く。森林公園で起こっているのだ。なるべくなら、めめ事は避けたいが、もし俺の生活圏内をこれ以上荒らすというのなら……。

殺すしかあるまい。例えば、ドラキュラの敵意を完全に買ったとしても。

俺の働く町工場は、七時にはほぼ全業務を終了する。土曜日は日課として、職員総出で呑みにいく事になっていた。もちろん俺も例外ではなく。

次の土曜は、駅前の安い居酒屋を適当に貸し切って、三十人程でドンチャン騒ぎをする事になった。社長は何を考えたのか、店選びを俺と矢部に任せただ。

金曜の夜。俺と矢部は二人で森林公園を歩いていた。工場から駅前へのルートとしては、確かにここを突っ切るのが一番早いのだが、念のため、俺は迂回を提案した。しかし、矢部は俺と長い時間行動を共にするのがどうしても我慢出来ないらしく、渋々、矢部に従う

事になった。

森林公園に人気は無かった。鬱蒼と周囲に茂る草木が、時折風に揺られてガサリガサリと音をたてているだけだ。

矢部は足早に俺の前を歩いている。並んで歩く事すら拒まれているらしい。嫌われたものだ。

三步に一度のペースで、矢部から舌打ちが聞こえる。

「冗談じゃねえや。社長も何を考えてんだか知らねえけどよ」

唐突に矢部が歩みを止めて言い放った。間隔の長い街灯の下で、振り返って俺を睨む。

私服の矢部を見るのは初めてだった。体格のいい矢部は、赤のトレーナーに、デニムのジーンズを履いている。

「大体、居酒屋なんざいつも適当に決めてんじゃねえか。今日に限って、何だつて俺がわざわざ探しにいかなきゃならねえんだよ？ よりによってお前と」

唾が俺の頬目掛けて飛んでくる。かわした。

「ああ、気に食わねえ、一発殴らせろ。そうしねえと駄目だ。苛々して死ぬ」

矢部は有無を言わず、俺の胸倉を掴んできた。

「やれよ。それで気が済むんならな」

殴られる。痛みはない。

「てめえ、偉そうな口聞くんじゃないやねえよ、吸血鬼風情が！殴って下さいお願いします、だろぅが！」

両腕で揺さぶられた。矢部の目――憎悪に溢れている。

「マゾじゃないんだ。特に殴られたくもないのに、懇願なんぞ出ないね」

再び殴られる。痛みはない。

「本当に生意気だなお前。クビにしてやろうか？吸血鬼なんぞ、本来は強制労働所行きなんだぜ？少しは口の聞き方学んだらどうだ？」

吸血鬼保護法。日本国に籍を置く吸血鬼は、労働所によって、その身柄を管理され、保護される《権利》がある。権利を放棄した吸血鬼においては、その人権を一切認めない事とする。

「あんたら人間曰わく、労働所で働く事は権利であって義務じゃないらしい。もっとも、休みが月一で、一日十五時間労働、そのくせ月給五万なんて条件じゃ、俺達吸血鬼のほとんどがその権利を放棄するのは、当然と言えるんじゃないか」

「戦争に負けたのはてめえらなんだから、安月給重労働で我慢しろや。法律犯してまで人間様と一緒に働こうなんぞ、筋違いもいいところなんだよ！」

もう一発殴られる。痛みはないし、腹も立たない。

「大体、てめえら血なんざ吸わないでも生きられんだろ？なのに、なのに、なんのになんで愛子を殺しやがった！？」

愛子とは、かつての矢部の妻の名だ。俺は矢部に対する答えを持たない。だから、黙って殴られる事にしてやる。

「ああ！？答える小田桐！」

もう一発――俺は矢部を突き飛ばす。

俺と矢部の間を、真空の刃が過ぎ去っていく。街灯が真つ二つに折れ、矢部に向かって倒れていった。

俺は魔性を解放しながら、矢部を抱えて、茂みの中に突っ込んだ。矢部は突然の事態に目を点にしている。俺は矢部の口を手で強引に押さえた。

「息をするな。見つかる」

迂闊だった。矢部の言葉に少なからず動揺していたという事か。これほどに近寄られるまで、魔性を解放した同胞の気配に気が付かないとは。

「死にたくなければ、いいと言うまでここを動くな。呼吸は最小にとどめろ」

俺は茂みを飛び出した。すでに俺も魔性の解放を終えている。上空から再び真空の刃。跳び上がり、四方を見渡す。いた。森林

公園で最も樹齢を重ねた太い杉の木の天辺。背は低い。青いジャージを着ている。顔に見覚えはないが、恐らくは先日、ここで血を啜った吸血鬼。

俺は下降しながら、着地までの間、両腕にムチのイメージを描いた。

俺が着地すると、奴もまた、俺の前方に降り立ってくる。

間近で見ると、この同胞は猿のような顔をしていた。

「あれ、人間は？」

「いない。今日は諦めて帰れ。これ以上続けるといふなら、俺が相手をする事になる」

「なに、あんた吸血鬼の癖に人間の味方するわけ？ああ、例の通り魔って、あんたか」

通り魔。不本意な俗称だ。まるで俺が見境なく同胞を襲っているような誤解を生む。

「近くにいるね。息遣いが聞こえる」

「帰る気はない、か」

「当然。一昨日から吸ってないんだ。せつかく伯爵が来てくださるっていうのに、この期を逃すのは勿体無い」

一昨日ーならば、間もなく血によって増幅された魔性が途切れ

る頃だろう。長期戦にならずに済みそうだ。

「邪魔だねあんた。殺すわ」

猿（仮称）が、息を大きく吸いこんだ。吐く。奴の口から先程の真空の刃が放たれる。

口に吸い込んだ空気を魔性によって真空の刃に変えるー空気を使うという着想までいいが、その後の想像力が貧困だ。空気が真空の刃に変わったところで、何の意外性もありはしない。

読みやすいのだ。

俺は先程のイメージを爆発させる。両腕が細くなり、しなやかさが生まれる。伸縮自在のムチが誕生した。眼前の真空の刃に絡みつき、威力を削ぎ落として、空気に帰す。

猿は意外そうな顔をしていた。

「刃に《切る》以外のイメージも込めておけ。《切る》は直線の力には強いが、ムチのような曲線とは相性が悪い」

戦い方をあまり知らない吸血鬼で助かった。本国の連中を相手にしたら、こうはいかない。

屈辱の表情で、再び猿は刃を放つ。俺は同じように左のムチで刃をさばき、右のムチを奴の首に絡みつかせた。

猿は俺のムチを振り解こうと、両手に渾身の力を込めて握りしめている。さすがに魔性を解放しているだけあって、いくら締めても

奴の首が飛ぶ事は無かった。固いのだ。

今後、本国の連中と戦う事を考え、鍛錬の意味も踏まえて、俺は新境地に挑戦する事にした。

左のムチだけを腕に戻し、ハンマーのイメージを描く。血の力無しで、一度に二種類の魔性の具現化。血の力無しで厳しいのは明白だが、やってみる価値はある。

頭が熱い。脳内の魔性炉がオーバーヒートしているのが判る。何とか集中し、具現を試みた。

直後に右腕から力が抜ける。ムチが、腕に戻ってしまった。代わりに左腕が巨大なハンマーに変貌する。

叫び声――背後。矢部のものだ。舌打ち。茂みから矢部が飛び出した。眼前の光景に耐えられなくなったと言っても言うのか。

ムチから逃れた猿が、矢部に向かって刃を放った。イメージが間に合わない。即座に重りとなるハンマーを腕に戻し、俺は矢部の元まで跳躍して、体で矢部を庇った。

腹が裂かれる。血が噴き出したが、体が千切れる事はなかった。

「俺の後ろから、今度は絶対に動くな」

背後で尻餅をついている矢部に命令した。腰を抜かしているらしいので、その心配も無さそうだが。

やはり、一度に二種類の具現化は実践で試すには無謀すぎたよう

だ。

猿が刃を三発連続で放ちながら、こちらに疾走してくる。矢部がいるとなると、次で勝負を決めなければなるまい。

ヤマシに感謝する。奴の訪問は、ドラキュラの襲来を俺に伝えるだけでなく、いいアイディアも提供してくれた。

唾に爆竹ではなく、ボムのイメージを描く。一発目の刃、腹に命中。傷がさらに抉れた。二発目も同じく。三発目で体が千切れる。再び矢部の悲鳴。上半身が地面に向かって、滑るように堕ちていく――。

猿が笑顔を見せた。俺の上半身が地に堕ちる前に、脳みそを、正確には脳内にある心臓に等しい魔性炉を破壊しようと、息を吸いながら目前まで迫ってきた。

猿が殆ど零距离射程で刃を放とうとする瞬間、俺は猿の顔面目掛けて唾を吐く。

猿の頭が爆発するのと、俺の上半身が地に堕ちるのは、ほぼ同時だった。

七、逃亡の先

千切れた下半身を、上半身と繋ぎ合わせる作業を、矢部は啞然と見つめていた。

下半身を上半身の下に倒すと、二つの半身の傷口の断面から、細胞の繊維が伸縮し、絡み合うように修復を始める。

完全に修復が終わると、俺は立ち上がり、腰を抜かしている矢部を見下ろした。

「立てるか？」

「あ、ああ。立てるに決まってる」

ふらつきながらも、何とか一度は両足で立ち上がる事に成功した矢部だったが、すぐによろけて、再び地面に腰を打った。

「くそ」

見かねて俺は手を差し出したが、矢部はそれを振り払う。

「吸血鬼の手なんざ借りられるかよ」

「…勝手にしろ」

矢部が何とか自力で立ち上がれるまでの三十分、俺は今後の事を考えながら、猿の死体进行处理して過ごした。

次の日、結局俺は宴会をキャンセルして、アズサのマンションに帰った。

「ねえソウク。話してなに？」

交わった後、ベッドの上でアズサが俺に尋ねてくる。

「しばらく、ここを離れようと思う」

すぐさま、アズサは俺の上に跨り、疑惑の眼差しをぶつけてきた。

「どういう事？浮気？」

俺はアズサに、この国にもたらされている危機について説明すべきに迷っていた。下手に不安を煽る事が、得策になるとは言えない。

「俺に浮気する甲斐性があると思うか？」

「思わない、けど」

「里帰りだ。爺さんに呼ばれてる」

嘘を上手くつくコツは、真実を絶妙にブレンドする事だと、遙かな昔、親父に教わった事がある。

「お爺さんって、やっぱり」

「吸血鬼だ。今年で丁度千百歳の誕生日を迎える。爺さんの代の吸血鬼は、伝統として百年毎に誕生日を祝う。俺もその祝賀会に呼

ばれてる」

俺がそう言うと、アズサは眉間に皺をよせてなおも疑惑の眼差しを続けていたが、やがてため息をつき、隣りに寝転がった。

「解った。誕生日じゃ仕方ないもんね。それで、いつ戻ってくるの？」

「遅くとも、クリスマスまでには」

事態をいい方向に導かなければならない。

「うん、ならよし！クリスマス一緒に過ごせなかつたら、さすがに言い訳聞いてあげられないもん」

許してあげる、と付け加えると、俺の耳に、アズサが舌を這わせた。ゾクリと、俺の体が震える。不快ではない。

「そのかわり、今日は朝まで付き合つてよね」

耳元で囁かれたその言葉は、俺の股間にまで反響していたー。

俺が再び、アズサとの結合に集中しようとしていた時の事だった。ゾクリと、俺の体が震えた。極めて不快な振動だ。同胞の気配ーアルカード・クスカ。

馬鹿な。猿の死体は完全に処理した。いくらなんでも、昨日の今日でバレる筈はない。

クスカの気配は、屋上ー。

舌打ち。

「なに？」

開脚したアズサが、そのまま上体を起こす。どうする？

「すまないアズサ。急用が出来た。お前も今日は、社長の所へ行ってくれ」

「だって、ここ私の家だよ？」

「解ってくれ。ここは危険なんだ」

俺の目つきが険しくなっている事に気がついてか、アズサはベッドを降りて、クローゼットの扉を開けた。

「何があるのかわからないけど、気をつけて」

俺は頷くより先に、ズボンだけ履いて、シャツを片手に外へ出た。

屋上のさらに上空に、銀髪の吸血鬼ーアルカード・クスカが浮遊している。

俺はクスカを見上げ、魔性の解放を始めた。

「あなたという人は、本当に解らない」

クスカが屋上に降り立つ。その時、今宵が満月である事に気がついた。

「勇敢なのか、愚かなのか」

「何の事だ」

「惚けるのはお止めなさい。はっきり言って、私はとてつもなく不快なのです。こうもあっけなく、忠告を無視された事がね」

周囲の温度が上がっている。十一月の終わりの外で、裸が心地よいほどに。

クスカの体全体が、とりわけ肩を突き破って翼に具現されている背骨が、文字通り怒りの炎で燃え上がってゆく。

「許しませんよ。あなたは」

炎の塊となったクスカの呪詛が夜に響く。

どうするー？

何をイメージすればいい？何で、こいつの炎を防ぐ？

クスカの炎が火柱となつて、空に伸びていった。無理だ。これほど強力な魔性の力に、対抗できるイメージなど湧きはしない。

「残念ですが、死んでください」

アズサーー！

「目を閉じろ！」

聞き覚えのある声――とっさに俺は目を瞑る。閃光――瞼を通して、眼前が激しい光にさらされているのが解った。

誰かが俺の肩を担いで、そのままマンションを飛び降りた。

着地と共に目を開ける。ヤマシだった。

「よう」

「助かった。だが、何をしたんだ？」

「唾を閃光弾に変えた。ただでさえ、本国の連中は光に弱いから、いきなりあれを食らっちゃたまらないだろう。数分は稼げるはずだ。さっさと走るぞ」

礼を言う暇もなく、既に前を走り始めているヤマシの背を、俺は追った。

俺達はマンションから数十キロほど離れた河川敷の、ガード下に身を潜めている。

「礼を言うぞヤマシ。さっきは本気でやばかった」

「同胞殺しなんてつまんねえ事続けるからだ。どうするよ、お前？ドラキュラ怒り狂ってるぜ、きつと」

「行くしか、ないだろうな」

「本国へか？」

「ああ」

「何をしに？」

「ドラキュラを狩りにさ」

本気かよ！と、ヤマシが大声を上げそうになったので、慌てて俺はヤマシの口を塞いだ。

「大声を出すな。見つかる」

クスカの気配はここからまだまだ遠いが、本国の吸血鬼がその気になれば、数十キロ離れた場所の鼠の足音さえ正確に聞き分ける事が出来る。

「だけどな、お前、そんな事して何の意味があるんだよ」

「戦争が始まったら、アズサと生活する事も、アズサの身の安全を守る事も困難になる。それに、どのみち命を狙われてるんだ。奴を殺さない限り、もはや俺に安息はない」

「土下座していくのかと思っただけ。勝機がどこにあるってんだ」

「向こうにも、ツテがない訳じゃない。上手くやるさ」

「一ヶ月以内にか？側近にも歯が立たない癖しやがって」

ヤマシの言葉は、俺に非情な現実を突き付ける。その通りだ。現状では、一月以内にドラキュラを殺せる可能性は零に等しい。

「大人しく逃げ続けた方が無難だぜ」

逃げ続けるーいつまで？いつになったら奴らの追撃を振り切れる？

「忠告は有り難いが、俺に他の選択肢はない」

「馬鹿が。お前、死んだぜ？」

「アズサを助けた時から、俺の半分はもう死んでる。死ぬ事に恐れなどありはしない。ただ…」

アズサが気がかりだ。アズサの秘密をもし他の吸血鬼が嗅ぎつけたらー。

アズサは確実に殺される。最高に残酷な方法で。

「ヤマシ」

「何だよ」

「明日、俺はこの国を発つ。すまないが、俺が戻るまでの間、アズサを守ってやってくれないか？」

沈黙。ヤマシは両手で頭を支え、コンクリートの斜面に寝転がる。

「お前が戻ってくる保証は？」

ありはしない。

「ない」

「冗談じゃねえ」

ヤマシが目を瞑った。当然の反応だろう。

「解った。クリスマスまでに必ず戻る」

目を開けるヤマシ。

「一日たりともまけてやらねえからな。必ず生きて帰ってこいよ」

「ああ。感謝する」

「明日発つてもよ。どこから行くんだ？側近がお前を探してるぜ？」

「微小に魔性を解放をしながら、海を泳ぐ。三十時間もあれば辿り着くだろう」

ヤマシは起き上がり、声を殺して笑い出した。

「お前って、頭いいのか悪いのか、本当は一体どっちなんだよ？」

川に反射している満月の姿を眺めながら、両方だ、と、俺は答えた。

中幕 1 矢部広明は、小田桐ソウクを探す

矢部広明が、小田桐ソウクの無断欠勤に気がついたのは、月曜日の朝であった。普段なら誰よりも早く出勤している彼の姿が、工場内に見当たらない。

稼働を停止したベルトコンベアーに両手をついて、矢部は金曜日の出来事を思い出す。

吸血鬼に襲われた――。小田桐に助けられた――。

あろう事か、腰を抜かしてしまった事実を、何とか忘れようと頭を振ったが、無駄であった。脳裏に焼き付いた悔恨の記憶を、彼は当分消し去る事が出来ないだろう。

そもそも、矢部にとって吸血鬼とは、愛妻を殺した憎悪の対象であつて、畏怖の対象ではなかった。敗戦国の屑共――。それだけが、矢部にとっての吸血鬼に対する印象だったのである。

しかし、いざ殺されそうになって、吸血鬼の恐ろしさを実感した。あれは、化け物の所業だった。あんなものと戦争して、よくも人間が勝利したものだ――。

殺人事件など、犯人が人間であれ吸血鬼であれ、ブラウン管を通してしまつたら、危機感は何に等しい。愛妻が殺された時にさえ、現実を認識するのに長い時間を要したのだから。そこに恐れは存在しない。取るに足らない糞虫が、人間様相手に調子に乗りやがって――。憤りがあるだけだ。

そう。今まで矢部は、まさか自分が吸血鬼に殺されるはずなどない、と、そのように思ってた生きてきたのだ。妻を殺されたのにも関わらず、彼はそういう可能性を考えた事がなかったのである。

小田桐が腕を、自分の身の丈ほどもあるハンマーに変えた瞬間、矢部は耐え難い恐怖に陥っていた。

あれは、一撃で俺を殺す事が出来る――。

そう思った瞬間に、今まで小田桐にしてきた仕打ちを思い出し、それが報復の原因になると恐れ、矢部は絶叫し、逃げ出した。さらに次の瞬間、その小田桐に命を救われる事になるとも知らずに。思えば、これが最大の後悔だった。

小田桐は、自分の危険を省みず、矢部の前に立って、その命を救った。

詰まるところ、それは小田桐が身を呈して人間性を携えている事を証明してしまった事に他ならない。

矢部は本来、義理や人情といったものに固い人間なのだ。そんなものを見せられてしまったら、吸血鬼にもそんな奴がいるという事を証明されてしまったら――。

自分にはもう、吸血鬼という種族を憎む資格が無くなってしまっ。まして、それがあれほど辛く当たってきた小田桐ならば――。

逆に、自分の器の小ささを否応なしに実感させられてしまう事になる。

小田桐が入社した際に、矢部は社長からこのように聞かされていた。

『ソウちゃんは吸血鬼だが、俺の《恋人》を、身を呈して救ってくれたんだ。吸血鬼を雇うのは違法だがよ、俺は法律よりもそういうのを大事にしてえ。みんな、解ってくれるよな？』

その時は、社長は騙されているのだと思った。小田桐ソウクという吸血鬼が、何か自分の都合の為に、人助けという行為に及んだのだと。

現実には、どうやら違った《らしい》。小田桐という男は、確かに人を救うという意志を持っていた。

『吸血鬼の手なんか、借りられるかよ』

何より、自分を助けた者に、そんな言葉を投げかけてしまった事が、悔やまれてならない。だから、矢部は熟考の末、謝罪をしようと、こんなにも早朝の時間から出社したのだった。しかし、小田桐はいなかった。

金曜日の事件と、何か関係があるのだろうか？

その日、社長はご機嫌だった。長らく会っていなかった恋人が、当分社長のアパートで暮らす事になったのだという。

小田桐から連絡がなかったか尋ねてみると、社長はあっさりと否定した。

『ソウちゃんだって、たまには体調を崩す事もあるだよ。気にする事あんめえ』

退勤すると、矢部は小田桐のアパートを尋ねてみた。工場からは電車で二駅の距離だった。住宅街の片隅に、更地に挟まれた小田桐のアパートを見つける。ここの二階に住んでいるはずだ。

小田桐はいなかった。いないどころか、小田桐の部屋は、全焼していたのだ。

馬鹿な。それでは、小田桐はどこから通勤していたというのだ？

いや、それ以前に…。

小田桐はどこに消えたのだ？

隣室の人間に尋ねてみようと思ったが、取りあえずやめておくことにした。明日、本人に直線聞けば済む事だ。

自宅のある駅に着くと、矢部は真っ直ぐ帰ろうとはせず、書店に立ち寄った。小田桐に対する謝罪の意味も兼ねて、探求心が発生したのである。思えば、自分は吸血鬼に対して無知に過ぎた。妻を殺された時から、憎しみだけで吸血鬼を敵視してきていた――。

もともと、それは仕方のない事でもある。矢部が真に憎むべきである、妻を殺した吸血鬼は、再三の警察の捜査によっても、その足取りや痕跡を全く掴む事が出来なかったのだ。犯人が判らない以上、矢部が吸血鬼全体を憎んでしまうのも、ある種当たり前の事だった。

今日を持って、その考えは棄てよう。少なくとも、小田桐に当た

るのだけはよそうー！。

そう誓って、本棚から一冊の本を手を取った。

著者の名は、柳沢秀明。吸血鬼問題に詳しい専門家として、しばしばその姿をテレビ番組で見かけた事がある。

タイトルにはこうあった。

《人類と吸血鬼の共存―保護法の改正を目指して―》

矢部はその本を数ページめくって眺めた後、レジに向かって歩きだしていた。

中幕 2 吸血鬼と、保護法の矛盾について

特に、飾り気のない部屋であった。妻が死んでからというもの、矢部には装飾意欲というものがなくなってしまったのだ。

帰宅すると、布団を敷くのも億劫だったので、矢部はフローリングの床に寝そべり、先程購入した吸血鬼に関する本のページを開く。

普段は読書などまったくしない彼にとって、ストーリーのない書物を読むという事は、労働に等しい苦痛があった。よって、目次から、特に興味を惹かれる項目だけをピックアップして読み進める事にする。

以下は、矢部が読んだ記述を、彼の解釈でまとめたものである。

《二章――吸血鬼の歴史。》

吸血鬼がこの世界に、正確にいつ頃から発生したのかは定かでない。しかし、彼等の王とされている最も長寿の吸血鬼、ドラキュラ・ブラド・ツェペシの発表によると、ツェペシ誕生以前に、他の吸血鬼が存在していた事はないという。

ツェペシは現在、2212歳。証言通り、彼が原初の吸血鬼であるとするれば、吸血鬼の発生は紀元前という事になる。残念ながら、彼がどのようにしてこの世界に誕生したのかまでは、依然謎のままである。》

《三章――吸血鬼の生態。》

周知の事実ではあるが、彼等の生命力は人間のそれを遙かに上回っている。ツエペシの年齢を考えれば判るように、第一に寿命が極端に長い。老衰というものがあるのかすら疑問である。我が国に籍を置く若い吸血鬼のほとんどですら、百年以上の時を生きているのだ。

第二に、彼等は自然治癒力が非常に高い。仮に四肢を切り離れた所で、簡単に再生する事が出来るのだ。これは彼等の言うところの、脳内に存在する魔性炉という物質（あるいは、細胞）の作用によるものらしい。

魔性炉とは、彼等の心臓と言って差し支えない物質であり、これを破壊されると、いくら吸血鬼といえども、その生命活動を停止する。

魔性炉。彼等の存在の脅威は、この魔性炉に集約されていると言っても過言ではない。彼等は、「魔性（炉）を解放する」という行為により、物理法則を無視した現象を発生させる事が出来るのだ。想像力（創造力と言った方が的確かもしれない）を魔性炉に注入する事により、その想像を（限定された条件の下ではあるが）具現する能力を持っている。

例えば、あなたが吸血鬼であつたとしよう。

あなたは今、台所で大根を切りたいと思っている。しかし、包丁がない。そんな時、あなたは自分の手が包丁であると想像する。すると、あなたの手は包丁へと形を変えるのだ。このような事は、当然ながら人類には夢物語である。しかし吸血鬼には、我々がそのような場合、包丁を購入するといった常識と同じレベルで可能なのだ。

魔性炉については、各界の科学者達が様々な論文を発表している

が、どれも推測の域を出ていない。

さて、ここまでで吸血鬼がいかに強靱な生命体であるかはご理解頂けたと思うが、そんな彼等にも、生物として致命的な弱点がいくつかある。これについては、吸血鬼の種類（世代）によって大きく変わるので、まずは共通する項目から記そう。

それは、生殖能力の低さである。

長寿につけて、死に至る条件が極少の彼等は、そもそも種族である必要がなかったのだ。肉体が衰えないのであるから、種の存続に必要である世代交代という現象の必要性が、本質的に存在していなかった。それが起因してか、彼等の子孫には、女性がいらない。ツエペシの代から、彼等は人間の女性をその生殖のはけ口に行っているのだ。また、受精の確率も極端に低い。実に人間同士の性交の百分の一以下の確率である。然るべく、人類の総人口と比較すると、吸血鬼の総数は十万分の一にまで減少する。

しかし、いざ妊娠すれば、胎児は凄まじいスピードで成長し、一ヶ月で成人男子の身長に届いてしまうのだ。当然、母体がこの負荷に耐えられる筈もなく、二週間を待たずに死ぬ事になる。彼等は、母の死体の腹を喰い破って生まれてくるのだ。

それでも尚、吸血鬼は子孫を欲する。それが、あの忌まわしい戦争の原因となった事は、もはや言うまでもないだろう。

ツエペシを吸血鬼第一世代とすると、現在日本に在住している若い吸血鬼は第四世代という事になる。ここまでの記述で判る通り、ツエペシ以外の吸血鬼は、皆我々人間との混血だ。

第一〜第二世代までの吸血鬼の弱点としては、人間の血液を定期

的に摂取しないと生存の持続が不可能である事があげられる。定期的とはいっても、百年に一度、10〜20リットル程度の摂取で問題ないらしいが。だが、全世代共通で人の血液は麻薬のようなものでもあり、日夜、彼等は血液に対する渴望に苛まされている。

また、この世代は紫外線にも弱い。日の光に触れた瞬間、皮膚が癌化してしまうのだ。これによって死に至る事はないが、魔性炉による再生も追いつかない程腐敗が早い為に、日中の活動が不可能である。

第三、第四世代からは、上記の制約が消えた。

これは、人間の血がより濃く彼等の体内に混ざった事が起因している。

よってこの世代に目立った弱点はないが、強いてあげるならば、吸血の際に無防備になる事であろう。

血を吸っている瞬間において、彼等は魔性炉を機能させる事が出来なくなり、注意力も散漫になってしまう。これは、血液が生存に必要ななくなった事により、この世代に残る血の意味合いが、麻薬としてのみになってしまったからだと考えられるだろう。だから、この世代の吸血鬼は、大体においてターゲットを行動不能にまで痛めつけるか、あるいは殺してから血を啜る。

しかし、吸血を終えた後は、人の麻薬中毒者と同じく、魔性炉が活性化し、能力が格段に向上する。もし血を吸っている吸血鬼を見かけたら、即座に立ち去り、警察に通報する事をお勧めする。それも、できる限り早急に。

長々と吸血鬼について語ってきたが、この章において私が提唱したい事実は唯一つ。吸血鬼が、人間にとっていかに危険な存在であるかという事のみである。》

ここまで読むと、矢部は煙草を吸って一息ついた。

その後、矢部はさらにページをめくる。これ以降の章は、人間と吸血鬼の戦争の後、吸血鬼がいかにして日本や他の国に住む事になったのかという事が書かれていたのだが、それは矢部も、学生時代の歴史の授業で幾度となく聞かされていた為、今更読むのは、やや退屈に感じられた。

要するに、この筆者が一貫して伝えたい事は、これほど危険な吸血鬼を、何故政府は日本に住まわせておくのかという事なのである。そこからさらに、保護法の矛盾をすっぱ抜くのだ。

意外な事に、筆者は保護法の改正を、吸血鬼にとって有利なものに変えようとしている。これはつまり、保護法における吸血鬼の権利が、まるで《自ら放棄させようとしている》かのように作られているから、という事だった。

確かに、それは頷ける。矢部自身、この法律を盾に小田桐ソウクを虐め抜いてきたのだ。単に吸血鬼の憎悪を人間に向ける為の法律など、どうして作る必要があるだろう？

そんなものを作るくらいなら、一切の居住権を剥奪するか、それが出来ないのならはこの国を吸血鬼にとっても住みやすいものに変えるしかない――それが筆者、柳沢の案だった。

いくら敗戦国とはいえ、あの戦争で日本とその加盟国がワラキアに勝利できたのは、運の作用によるものが《大きい》。矢部が生きていた時代の事ではないにしろ、そんな事は吸血鬼に殺されそうに

なれば誰でも解る。悪戯に吸血鬼を刺激するというのは、人間にとってもプラスにならないのではないか。矢部もまたそのように思う。

思えば、そういう住み辛さが、僅かな数といえども、吸血鬼が今なお人間を襲うという事態を生み出している気がする。無論、妻を殺した吸血鬼を弁護するわけではないが、この国の法律に責任が全くないとは言えない。

少なくとも、元々追い出していればこんな事にはならなかったのだ。人間は吸血鬼が血をいかに渴望しているかを知っていたはずなのに、何故それをしないで、こんなおかしい法律を作ったのだ？

（何故俺はそんな《当たり前の事》に気付かずに行ったんだ？）

これでは戦争に勝利した意味がないではないか。

差別に対して、積極的に抗おうとした吸血鬼は少なかった。いくら強靱とはいえ、圧倒的に人間の方が数が多い。日本に限定すれば尚更だ。数の報復を恐れていたのだろう。隠れて人の血を啜るのが精一杯だ。

ふと、矢部は懸念を覚える。ここのところ飛躍的に増加した吸血鬼による殺人事件だ。これは、何かの予兆ではないのだろうか？人間にとって、絶望的な何かの…。

明日、小田桐ソウクに、謝罪ついでに、それについて尋ねてみよう。矢部は思う。

しかし、明日も明後日も、小田桐ソウクが工場に出勤する事はなかったー。

八、ワラキア上陸

陸地が見えてきた。ここまでの海路に、同胞の気配はなかった。クスカを上手くまけたのは俺にとつて好都合だが、これほど簡単に辿り着けるとも思えなかった。何か、作威的なものを感じる。警戒は怠らない方がいいだろう。

海岸に上陸すると、眼前には森が見える。俺は一度砂浜に伏せて、周囲から同胞の気配を探った。やはり、何も感じない。妙だ。ここは本国、ワラキアなのにも関わらず、五キロ四方まで何処にも吸血鬼がいないなどという事が有り得るのだろうか。

森に侵入し、西を目指す。記憶によれば、三キロ程進んだところに小さな廃村があるはずだ。以前、爺さんから、俺のツテがそこに住んでいる事を聞いていた。鬱蒼と茂る木々の間をジグザグに走る万が一遠方から監視がある場合に、俺の動向を攪乱させる為だった。

一時間程で森が終わり、開けた荒野にでる。彼方に見える山々の端から、巨大な円盤となった太陽が、不気味に鈍く光っていた。

廃村は荒野の中心にひっそりと存在している。ここからは五百メートル程度の距離だが、何せ開けすぎていた。相変わらず同胞の気配は感じられないが、今までより一層注意しなければならないだろう。

走る、伏せる、走るを繰り返し、ようやく廃村にたどり着いた。

誰も住んでいない家屋が立ち並んでいる。正確には、家屋と言うより小屋の方が近い。全てが木造の小屋は、至る所が朽ち果ててお

り、屋根のないものや、全体が穴だらけのものがほとんどだ。

その中で一番大きく、マシな小屋を見つける。欠損した屋根を藁で補っていたりと、確かな生活感が伺えた。ツテーヘンスンはここに住んでいるはずだ。

木戸を叩く。

「どちら様じゃい」

「ヘンスン、久しぶりだな。ソウクだ」

勢いよく、木戸が開かれた。飛び出しかけている眼球や歯が懐かしい。頭皮からは脳みそが垣間見え、脳みそのシワにウジが湧いていた。悪臭が漂う。殆ど骸骨に近かったが、老吸血鬼、ヘンスンは確かに生きていた。

「おお。ソウク坊ちゃん。わたしや、夢でも見てるんじゃないかね？」

「夢だと、俺も救われるんだが、残念ながら現実だ」

「まあ、まあ。とにかく中に入りなされ。日差しがキツイんじゃないよ」

小屋の中は酷かった。床は腐り、地面が露出している。台所らしい場所にある鍋や皿はどす黒く汚れており、何匹もの蠅がその周りを旋回していた。

「適当に座りなされ」

座るべき床が見当たらないので、俺は愛想よく断った。

「構わないでくれ。立っていた方が落ち着くんだ」

「そうかい。わたしや座るが、構わんね？」

頷くと、ヘンスンはゆっくり地面に腰を下ろし、あぐらをかいた。

「それで坊ちゃん。なんでまた、戻ってきた？あんたは、東洋の島国にわたしが確かに送ったはずじゃよ。里帰りかえ？」

「生憎、俺は日本の生まれだからな。里帰りとはいえない」

「そういえばそうじゃったな。で、何の用じゃ？」

地面に置かれた蝋燭に、火をつけながらヘンスンは言った。

「単刀直入に聞こう。あんた、ドラキュラが再び日本に戦争を仕掛けようとしている事は知ってるか」

僅かな間があった。ヘンスンは蝋燭に灯した火を虚ろな眼差しで眺めながら、やがてゆっくりと口を開く。

「知っておるよ」

「止めたい。力を貸してくれ」

ヘンスンの視線は、蝋燭から離れない。

「無茶いいなさんな。こんな老いばれに何が出来ると言った？」

「直接、とは言わない。あんたのその豊富な知識を俺に貸して欲しいんだ」

「坊ちゃんは、何を知りたいというんだね？」

「次の戦争の理由と、ドラキュラを殺す方法」

ヘンスンの眼差しが、ようやく俺に移った。

「前者は、推測くらいなら出来るだろうね。しかし、後者は解らんよ。伯爵の城で数百年執事を務めていたが、そんなものはこれっぽっちも思いつかなかった。あの方を殺す方法なんぞ、宇宙開闢に匹敵する謎さ」

ヘンスンはかつて、ドラキュラの城の執事を兼ねて、奴の直径の子孫である幼い吸血鬼の教育係をやっていた。爺さんの手によって一度ワラキアに連れ戻された俺も、やはりヘンスンから様々な事を教わってきた。

「坊ちゃん。悪い事は言わない。伯爵の意志に逆らわない方が、あんたの為になるよ」

「ヘンスンも、奴の意志に逆らったじゃないか。それでもこうやって生きている。大丈夫さ」

俺は俺自身の為に気休めを述べた。

「どうして、戦争を止めようとする？」

「向こうに大切な者が出来てね。守りたいんだ」

「人間を愛したか。坊ちゃんはやはり、父上の息子だな」

眼差しから、憐れみに近いものが伺える。確かに、俺は親父に似ているのかもしれない。しかし、ドラキュラに殺されるという運命までが同じになるとは限らない。

「坊ちゃん」

ヘンスンは重い腰を上げて、俺に歩み寄った。

「わたしや、もう長くない。頭をみりや解るだろう？最後に血を吸ったのは、百五十年前の話だ」

ヘンスンもまた、血液を絶っていた。爺さんと同世代であるヘンスンは、血液無しでは生きていけない。

「わたしやね、あんたを東洋に逃がした時に、殺される覚悟を決めていたんだ。しかし、伯爵はわたしを殺さんかった。城からの追放だけで済んだのは、あの方に温情があつたという事を証明している」

「温情、ね」

「つまり、わたしはあの方に恩義があるんじゃないよ。坊ちゃんに手を貸すという事は、その恩を裏切るといふ行為に繋がる」

突き出た眼球がギロリと光った。どうやら、俺の要請ははねのけられようとしているらしい。無理もない。かつて、俺のワガママによって、ヘンスンは一度ドラキュラを裏切ったのだ。

「だがね、坊ちゃんの父上にも、わたしがどれだけ返しても返しきれない恩義が、確かにあるんじゃないよ」

親父がヘンスンにした事など、俺の知る由もなかった。

「秤に掛けちまったら、そりゃ坊ちゃんの父上に傾いちゃうわな」

俺の肩に、ヘンスンが手を置いた。流れが、いい方向に向かっていく証拠だった。

「残り少ないこの命、ハクア様の息子の、あんたに預けても、わたしやいいと思うとるよ」

「ヘンスン、それじゃ……」

「でもな、どう考え抜いても、伯爵と正面きって争うのは不可能じゃ。そこで、あの方の温情に賭けてみる事を提案するよ」

ヘンスンの言っている事の意味が、俺にはよく解らなかった。

「あんたの爺様の誕生日を祝したパーティーが、今夜、ドラキュラ城で開かれる。あの祝賀会は神聖なもんだ。わたしもその時だけは、城に入る事を許される」

祝賀会……アズサについた嘘に混ぜた真実の一つ。

「吸血鬼ならば誰でも参加出来るそのパーティーでは、原則もめ事は禁止なんじゃよ。ドラキュラ伯爵に、『安全に謁見出来る』百年に一度の機会じゃ」

「謁見してどうする？不意打ちで奴を殺すっていうのか？」

「説得じゃよ。あの方の温情に賭けてみるしかあるまい。坊ちゃん、どうしても戦争を止めたいと言うのならな」

ドラキュラ相手に説得？笑えない冗談だ。ただでさえ、同胞殺しで俺は命を狙われているというのに。

「それしか、方法がないのか？」

「議論なら、わたしもある程度は力を貸せるじやろう。少なくとも、命を狙うよりは、遥かに現実的じゃ」

俺は黙った。いくらヘンスンの言う事でも、今の俺の立場を考えれば、それがいかに無謀であるかは明白だ。

「それにな、次の戦争の理由が、わたしの推測通りなら、坊ちゃんの出方次第では、あるいは、意外と上手くいくかもしれないんじゃないやよ」

「どういう事だ？」

「話そう。ただ、聞いたら後悔するかもしれんぞ」

後悔――それをするには遅すぎる。今更、怖いものなど俺にはない。唯一、アズサの死を除いては。

「言ってくれ」

頼りない笑顔で、ヘンスンは語り始めた。蠅の羽音が、俺をひたすら不快にさせた。

九、ドラキュラ城へ

肌寒さの原因が月にあるとは思えないが、これほど近くに見える満月は、俺にどこか、死のイメージを連想させた。

俺はヘンスンを背負って、荒野から見えた山々の一つを登っている。かなり急な斜面だった。一歩踏み出す事に、乾燥した山肌が足に挟られ、砂や石ころが夜の闇に落下していく。この山には、生命の営みというものが、全く感じられなかった。木はおろか、草すら一つも生えていないのだ。

「大丈夫かい、坊ちゃん」

背中から声が聞こえた。

「大丈夫だ。何の負担にもなっていない」

「こいつを越えれば、城は目前じゃ」

俺達はドラキュラ城に向かっていった。

次の戦争の理由――ヘンスンの推測。

歴史上、過去の戦争において、ワラキアは日本に敗北した事になっている。ところが、事実はそうでない。俺も既に知っていた事だが、二国間には休戦協定が敷かれただけなのだ。しかも、《ドラキュラの提案によって》。

当時の戦争において、ドラキュラの目的は子孫の繁栄だった。無

論、奴が子育てに焦がれていた訳じゃない。ドラキュラは、吸血鬼が支配する世界を創りたかっただけだ。奴の支配欲がどんな理由で発生したのかは知った事じゃないが、それにはいくつかの条件が必要だった。

先に挙げた子孫の繁栄は絶対条件だ。吸血鬼の人口は人間のそれと比べても、圧倒的に少ない。さらに、爺さんの代までの吸血鬼は日中に活動出来ないという致命的な弱点がある。親父の代からそれが克服された事を知るやいなや、奴らはさらに次世代の吸血鬼を求めた。

当時、ドラキュラの軍勢は日中に行動出来る吸血鬼に限定されており、数千程度の数しかなかった。だから、小さいながら、それなりの軍事力を誇った当時の日本を最初のターゲットにしたのだ。

一夜にして、ドラキュラの軍勢は人口の五分の一程度の女をさらに、男を虐殺した。さらわれた女達は、ワラキアにおいて昼夜を問わず犯され続けた。俺と同年代の《俺を除く》吸血鬼は、皆、その犠牲者達の腹から生まれてきた者達だ。

日本軍も抵抗を試みた。これが後に吸血鬼戦争と呼ばれる戦いの発端だった。

日本軍は数、吸血鬼は質で戦う。あらゆる兵器は魔性の力に抗えなかったが、それでも、数にものを言わせ、また加盟諸国の力を借り、戦況は若干吸血鬼に偏ってはいたものの、ほぼ互角と言っただけだった。

『そこから坊ちゃんの父上が人間側について、戦況が人間に傾きかけたのは知っているな？』

『ああ』

『事態を憂いだ伯爵は、政府の中枢に密約を持ちかけた。それが、休戦協定じゃ』

休戦協定――日本人も吸血鬼も、その存在を知っている者は少ない。俺も親父がいなかったら、吸血鬼側の完全敗北を信じきっていただろう。

『伯爵は、限られた者にしか真実を語っていない。全てを知っておるのは、わたしとハクア様、それからブラド様くらいのもんじゃ』

『つまり？』

『伯爵は、ブラフをかけたんじゃない。本来、押されていたのは吸血鬼の方だったのじゃが、ワラキアにあとどれほどの吸血鬼がいるのか、当時の科学力で知る術が、人間にはなかった。人外の者との争いに疲れ切っていた政府に、伯爵の提案は、まさに蜜のようなものじゃったろうな』

ドラキュラの提案（人間側）――日本国への侵攻を一時中止する。さらに、形の上では敗北を認めてやってもいい。代わりに、日本に吸血鬼の居住権を与える。もちろん、日本に住む事になる吸血鬼に対しては、どのような扱い方をしても関知しない。

ドラキュラの提案（吸血鬼側）――ハクア（俺の親父だ）の裏切りによって、我が吸血鬼軍は壊滅的な打撃を受けた。敗戦の代償として、新しき我が子らは、日本国においてきやつら人間の下僕とならなくてはならない。しばし、時間をくれ。我は力を蓄え、必ず諸

君らを解放に導く。

『これが、現在の保護法の経緯か』

『そうじゃ。休戦の後に、ハクア様は単身、伯爵に挑み、残念ながら…』

親父はドラキュラを除けば最強の吸血鬼だった。その親父ですら、ドラキュラを殺すには至らなかった。

『何故、ドラキュラはそんな回りくどい事を？』

『それが次の戦争の理由に繋がるんじゃないかな。教訓じゃよ』

『教訓？』

『ハクア様が、人間側に付いた理由は、坊ちゃんも知つての通り、母上を愛してしまったからじゃ。吸血鬼に愛が芽生えるなどという事は、伯爵の想像を遥かに超えた事態じゃった。二度とこのような事が起こらぬよう、伯爵は新旧の吸血鬼達に、徹底した人間への憎悪を植え付ける事にしたんじゃないよ』

とんでもない話だった。日本における吸血鬼に対する差別は、ドラキュラの描いた絵図の上で仕組まれていたというのか。

『ハクア様の死の後、ブラド様が坊ちゃんを一時ワラキアに連れ戻したのも、息子である坊ちゃんに同じような感情を抱かせない為じゃった。しかし…』

日本に帰りがっている俺の願いを、ヘンスンが叶えてくれた。

そして今、俺は親父と同じ道の上を歩いている。

『伯爵が今の時期に戦争を再び勃発させようとしているのは、時間が十分に満ち足りたというのもそうじゃが、それ以上に坊ちゃん。あんたの存在を危惧しているからじゃよ』

アズサと出会い、俺は俺の生活圏を脅かす同胞を殺し始めた。かつてドラキュラに牙を向けた親父と同様に。

ドラキュラは俺が親父になる事を恐れている。そうなる前に、俺を殺し、日本を手中に治め、世界侵攻の足掛かりとするー！。

『本質的にハクア様と同じ魔性炉を持つ坊ちゃんは、伯爵の唯一の懸念材料と言えるじゃろって』

誤解されていた。俺の魔性炉に、もはや親父と同じだけの力は残っていない。残っていれば、クス力などに遅れをとるはずがないのだ。

俺の魔性炉の半分は、あの時、俺の中から消えてしまっていた。

『じゃからな、次の戦争を止める為の説得とは、坊ちゃんが、伯爵に忠誠を誓い、ワラキアに永住するという意志を、真摯に伝える事なんじゃよ』

それは止めるというよりも、先延ばしにする為の説得だった。確かに、アズサや周りの連中が生きている間を凌げれば、俺には何の問題もない。

後は、俺の覚悟次第だ。

頂上にたどり着いたところで、一度ヘンスンを降ろした。

眼下に、ドラキュラの城が見える。中世の貴族が住んでいるような建築様式。馬鹿でかく、しかも光輝いていた。その南側には湖があり、さらに湖の周りに二本の、石造りの塔がそびえ立っている。

「随分豪勢だな。祝賀会つてのは、いつもあんな派手に行うのか？」

「百年に一度じゃからな。吸血の儀式を、坊ちゃんは見ただ事じゃなかったけかな」

「ああ」

「坊ちゃんからしたら胸糞の悪くなる光景だろうが、耐えるんじやぞ？いいか、人間全てを守ろうなんて夢物語じゃ。坊ちゃんは自分が愛した女の事のみを考えろ」

「解ってるさ」

俺は二度とアズサに会えないかもしれない。しかし、アズサの命は文句を言いながらもヤマシが守ってくれるだろう。

戦争を止められるなら、アズサの命が守れるならば、それで構わない。例えドラキュラに屈しようとも。

「一気に降りる。しっかり掴まってくれ」

俺はヘンスンを再び背負い、疾走しながら下山した。ドラキュラ

城の光がみるみるうちに近付いてくる。

皮肉な事に、その光は、月光より温かった。

十、ドラキュラ現るー耐え難い屈辱

城門の左右に趣味の悪い銅像が二体。どちらも、裸の女が、股間から杭で貫かれ、口から先端を出している。まるで、もずのはやにえだった。

その像の前に、見張りの吸血鬼が一人ずつ立っている。どちらもタキシード。

「お名前は？」

左の見張りが愛想良く尋ねてきた。

「小田桐ソウクと、アレン・ヘンスンだ」

今更隠す必要もない。しかし、見張りは意外な反応を見せた。

「お待ちしておりました。どうぞお入りください」

巨大な青銅の扉がゆっくりと開く。賑やかな声が外に響いた。

俺はヘンスンに耳打ちする。

「歓迎される覚えは無かったんだがな」

「うむ。どうやら少々注意が必要じゃな」

見張りの吸血鬼は、頭を下げたまま、それ以上俺達に視線を向ける事はなかった。

ホールでは盛大なパーティーが開かれていた。天井に吊された四つのシャンデリアが、白い大理石の床をさらに輝かせていた。中央には階段があり、入り口から二階の踊場までは、赤い絨毯が敷かれている。踊場の壁には、相変わらずドラキュラの肖像画が掛けられていた。

ホールの至る所にクロスが敷かれたテーブルが設置され、その上にはワインやつまみが乗せられており、正装した吸血鬼達に囲まれていた。

俺とヘンスンは、入り口からホール全体を見渡した。爺さんも、ドラキュラもまだ姿を見せていない。どうやら、開演時間には間に合ったようだ。

「これほどの数の吸血鬼が揃うのを見たのは久しぶりだ」

「東洋じゃまず見られん光景じゃろ。坊ちゃんも、早めに慣れんとな」

妙だった。ただっ広いホールに数百に届く数の吸血鬼がいるのに、誰も俺達に注意を払わない。まるで、俺達がここにいるのが当たり前であるとも言つように。

「どうすればいい？」

「始まりを待とう。それまで、適当に酒でもつまんだらどうじゃ」

俺は首を振った。こんなところで飲む酒が美味い筈がない。

途方に暮れ始めた時、全ての照明が消え、踊場にのみ、どこからかスポットライトが当たった。光の中心に、銀髪の吸血鬼――アルカード・クスカが現れる。

「この度は、我等が伯爵の最初の子、ブラドを名乗る事を許された唯一の吸血鬼、ブラド・プラトー様の吸血の儀式に足をお運び頂き、誠に有り難うございました」

クスカは深々と頭を下げると、ゆっくりと階段を降り始める。

「まず最初に、ブラド様から、皆様にご挨拶があります」

階段の中心でクスカが歩みを止めた時、スポットライトの中に、今度は爺さんが現れた。

爺さん――皺だらけの顔に、朱い眼。白髪。黒のローブを羽織っていた。七十年振りだと言うのに、まるで変わっていない。

「今宵、伯爵様から頂いたこの命は、千と百年の時を刻むに至った。この記念すべき夜に、次の百年に向ける吸血を行える事を、同胞である諸君らに、そして誰よりも愛すべき伯爵様に、感謝の意を表明する」

歓声と拍手。ホール全体に響いていた。

悪寒――爺さんが俺達を見据えているのが判った。

「焦るな。間もなく伯爵がお出でになる」

ヘンスンが言った。しかし、焦らずにはいられない。嫌な雰囲気がある。肌が、何か良くない事の前兆を感じとっているのだ。

「それでは、伯爵様から、偉大なる御言葉を頂きたいと思います」

クスカと爺さんが、肖像画の方に向いてひざまずいた。奴が来る。

歓声がピタリと消え、静寂が訪れた。スポットライトー今度はドラキュラの肖像に当てられる。

スライドー肖像画が上部へと登った。ふざけた演出だ。奴には似つかわしくない。

心臓すら凍てつかせる程の冷気が、俺を襲う。満月の無情な光よりも、それはさらに冷たかった。

魔性を解放させずとも、このプレッシャー。奴のチカラは、全く衰えていない。

ゆっくりと、開いた穴の奥から、ドラキュラが姿を見せ始めた。

肩まで伸びた黒髪。頬が痩けていた。爺さんよりさらに朱い眼。人間で言えば五十代前後の外見だ。黒のマントで、その身を包んでいる。

「我等が偉大なる原初の父、ドラキュラ・ブラド・ツエペシ様に、盛大な拍手を！」

クスカの号令で、再び場内が湧き、ドラキュラが爺さんの前まで

歩くと、ホールに明かりが戻った。

「いつだ？俺はいつ、奴に伝えに行けばいい？」

「儀式の直前に準備がある。伯爵様の言葉を聞いた後じゃ」

焦燥に駆られた。奴のプレッシャーに押しつぶされる前に、話を付けなければならないのだ。長い時間耐えられるとは思えない。

「愛すべき、我が最初の子、プラトーよ。汝の長寿を祝福する」

ひざまずいていた爺さんが、床に付くほどに頭を垂れる。

「次の百年も、我が手となり足となり、全ての同胞の未来を、共に築き上げてくれる事を切望している」

「御意に」

「汝は赦された。百年の活力を、その身に注ぎ込むがよい」

ドラキュラが両腕を天に掲げた。広がってなびいたマントは、俺に奈落の穴を連想させる。

両腕を下ろすと、ドラキュラの視線は会場に向けられた。

「同胞よ。今宵はよくぞ集まってくれた。贅^{にえ}の準備が整うまで、宴を楽しんでいてくれ」

踊場の左右から二人の吸血鬼が椅子を運んできた。中央に設置された椅子にドラキュラが、その斜め後ろに設置された椅子に爺さん

が座る。

「今じゃ！」

俺とヘンスンは共に階段を駆け上った。ホールの吸血鬼達の視線がようやく俺達に集まる。中段から降りようとするクスカにすれ違った。奴は何故か冷笑を浮かべていた。

踊場へ。ドラキュラ、爺さんとの距離は三メートル。

「ソウク。やはり来たか」

やはり来たかー！。どういう事だ？しかし、今は気にしている時ではない。

「あんたに用はない。ドラキュラに話があるんだ」

「無礼者！伯爵様に何たる口の聞き方をするか！」

立ち上がる爺さんを、ドラキュラが首だけで制する。

「よい。我もこの男には話があるのだ。座れプラトー」

軽く頭を下げて、爺さんが腰を降ろした。

「お久しぶりでございます。伯爵様」

隣でヘンスンが言う。

「我が二十三番目の子、ヘンスンではないか。何をしに来たのだ

？」

「ソウク坊ちゃんの意志を、共に伯爵様にお伝えしたく、無礼を承知で参上致しました」

「ほう。して、意志とは？」

ドラキュラが俺に視線を移す――潰されるな。

「次の戦争を止めて欲しい」

沈黙――俺の鼓動を除いて。

「理由は？そなたは東洋で次々と同胞を殺しているようだが、それと関係があるのか」

「ああ。俺は俺の大切な者を守りたいだけだ。あんたが願いを聞いてくれるなら、二度と同胞に手は出さない」

言った。もう、後戻りは出来ない。

「忠告を無視したそなたの言葉を、我に信じろと言っのか」

眼光――潰されるな。

「永遠には言わない。しばらく戦争を待ってもらえれば、ワラキアに永住してもいい」

ドラキュラが頭上を仰いだ。何かを考えている。

「足りんな」

「何が、足りない？」

「言葉だけでは足りない。行動によって、我に対する敬意を示せ」
敬意――そんなものがあるはずもない。

「そなたの祖父のように、まずは我にひざまずくのだ」

俺はヘンスンに顔を向けた。頷いている。ヘンスンはすでに、膝を折り始めていた。

俺も続いた。アズサの命が守れるのなら、大した事ではなかった。

ドラキュラが立ち上がった。俺の方に歩いてくる。

「頭を下げる」

下げた――思い切り踏まれた。

「聞いておこう。そなたの提案は、我がそなたを恐れているとでも思わない限り閃くものではないな」

体重をかけられる。床に顔がめり込みそうだ。

「なるほど。ハクアの息子であるならば、我が恐れるに値すると思っただか」

「伯爵様！」

ヘンスンが遮る。

「坊ちゃんに、この提案を持ち掛けたのはわたしですじゃ。どうか、坊ちゃんには…」

肉が潰れる音―頭を上げようとした。上げられなかった。

「そんな事は解っている。そなたは黙っている」

うめき声が聞こえた。ヘンスンはまだ殺されてない。

「まあよいか。確かに、そなたがあゝの国にいと邪魔なのは事実である。そなたの誓いが本物であると言うならば、延期を考えないもない」

足が離れていく。頭を上げてヘンスンを見た。背中に穴が開いていた。再生が遅い。長い事血を吸っていないのだから無理もなかった。

「我の名を呼べ」

「ドラキュラ…」

顎を蹴られた。

「そなたは、主に敬称を付ける事も知らんのか」

「ドラキュラ…、ブラド・ツェペシ様…」

屈辱――耐えられない事はない。

「我に忠誠を誓うか」

「…はい」

眼前にドラキュラの革靴の裏が差し出された。

「舐めろ」

俺は躊躇した。瞬間、ヘンスンの両脚が見えない力によって切断される。叫び声。

「舐めろ」

耐え難い屈辱――耐えろ。

俺は舌を出した。

嘲笑が、ホールから聞こえてくる。黙らせたい。

黙らせるだけの力はない。俺には屈するしか方法がないのだ。

舐めた。屈辱の味がした。

ドラキュラが俺を見下ろしている。蔑みしか感じられない。やはり、この男に温情など有り得ない。

「《汝》を赦そう。しかし、最後に証明してもらわねばならない」

「何を…」

再び、顎を蹴られた。嘲笑が大きくなる。

「何を、ですか」

「汝が、吸血鬼としての誇りを取り戻せたかどうかをな」

ドラキュラは爺さんに振り返った。

「贄の血を、孫に分けてやってもよいか」

「伯爵様の意志に、私が意義を申し立てる事など、永久にございません」

俺に、人間の血を吸えというのか。

「それは…」

「出来ないと申すか？それでは、戦争の延期は白紙だな」

アズサの為なら、俺は全てを厭わない。しかし、親父と交わした約束もある。それに、血に魅入られてしまったら、アズサを愛した俺という人格すら、消えてなくなってしまうのではないか。

「どうするのだ」

どうするー血に魅入られるな。意志の力を信じる。

意志の力を信じた。迷いの時間が俺にはない。

「わかりました」

「坊ちゃん、それは、いかん、ハクア様の、約束…」

ヘンスンの叫び。胴が二分割されていた。

「ヘンスン！」

ドラキュラに顎を掴まれ、奴の顔面に引き寄せられた。信じられないほど邪悪な笑顔をしている。

「我は汝を再び愛そう」

離された。大理石に腰を打った。

「贅をここへ！これより吸血の儀式を始める」

扉が開く音が聞こえる。ホールの入口に振り返った。

恐らく、俺はこの時、後にも先にも、二度と出来ない表情をした。蒼白い顔が、さらに蒼白になり、目が見開いて、喉が痙攣する。

扉の向こうに、十字架に磔られた全裸のアズサと、それを抱えるヤマシの姿があったのだー！。

十一、勝機零の戦い

アズサを磔けた十字架を抱え、ヤマシが階段を登ってくる。

俺は何かを言おうと思った。何かを叫ぼうと思った。しかし、何を言うべきかも、何を叫ぶべきなのかも解らなかった。

十字架は、踊場の中心に立てかけられる。壁がなくとも、それはしっかりと立ったのだ。

アズサを見る。眠っているらしい。外傷はなかった。

「ヤマシ…」

ドラキュラにひざまずいたヤマシに声をかける。ヤマシが振り返る事はなかった。

「ご苦労だった」

「ありがとうございます」

何が…何が起こっているんだ？

「贄を裂く役目は、アルカード・ヤマシ。汝に一任する」

《アルカード》…？ヤマシが…、アルカード？

いや、そんな事より、贄を裂く…？

アズサを、裂く？

眼前の光景に硬直していた俺の筋肉が、ようやくほぐれ始めた。
助けねばならない。

「ヤマシ！」

俺は立ち上がり、アズサに走り寄りながら、ヤマシの名を叫んだ。
腹に見えない衝撃。そのまま吹き飛ばされ、階段を転げ落ちた。
階段の上にヤマシ。俺が見たこともない冷たい眼をしていた。

「よう。元気そうで安心したぜ」

「どういう事だ？」

「こついう事だよ。俺は伯爵様の親衛隊長だったのさ」

絶句。言葉が喉の奥で潰れた。ヤマシの隣に、爺さんが見えた。

「伯爵様が、ハクアの息のかかったお前を、日本国において、監視も付けずに放っておくと思ったか？」

――！

迂闊だった。あれほどに早いタイミングで、猿を殺したのが俺だ
という事実が伝わったのも、そういう事だったのか。

「お前には呆れたぜ。せつかく、《友人》として忠告してやったのよ」

「初めから、その為だったのか？俺に近づいたのも、俺を助けたのも」

ヤマシは、俺の信頼に足る数少ない吸血鬼だった――信頼は終わった。友情も終わった。

「当たり前だよ。血を断ってるって言うただけで、お前、馬鹿みたいにあっさり信じてくれたからな」

ドラキュラの親衛隊長――血を断っている訳がない。

「アズサを、何故アズサをさらった！」

「お前がああの公園で吸血鬼を殺した事を伯爵様へ報告した時にな、賜ったんだよ。お前が愛した女つてのを、ワラキアまでさらって来いってな」

唇が震えた。ドラキュラ達に対する怒りと、俺自身の浅はかさに対する怒りが弾けていた。

「伯爵様に感謝しろよ。本当なら、お前はああの時点で殺される予定だったんだ。だが、もう一度ワラキアで仕えるチャンスを与えた。お前の潜在能力を見込んでよ。お前がこっちに来やすいように、クスカに下手な芝居までさせてな」

階段の下。吸血鬼達の中で、相変わらずクスカが冷笑を浮かべている。

「お前ら、みんな騙されてるんだぞ？ドラキュラと、爺さんに！」
叫びー耳を貸す吸血鬼はいない。

「何わけのわかんない事言っただ？そんな事より、さつさこの女の血を啜れ。それで伯爵様はお前を認めてくれるんだからよ」

「ヤマシ！社長は、社長はどうした？」

「ああ、お前が《横恋慕》したあのデブ？なんかよ、抵抗したからデコピンしといたぜ。死んだかどうかまではわかんねえな」

ヤマシの高笑いー呪いが膨れ上がる。

「貴様…」

「とにかく、今からガッツリお前の女の腹裂いてやつから。おいしく食べろよ」

ヤマシがきびすを返した。俺は魔性の解放を始めながら再び階段を駆け上る。

「愚かな。神聖な儀式を汚すでないわ！」

爺さんが言った。無視した。

ヤマシの背後。解放が終わった。俺は全身に唯一つの、単純なイメージを込める。

アズサを救えー！

槍に変貌した両腕で、ヤマシを貫いた。ヤマシは顔だけで振り向き、唾を吐いた。

変貌した左の槍にそれがかかると、次の瞬間破裂した。厭わない。まだ刺さっている右の槍で、さらにヤマシを挟む。

体が燃えた。上方にクスカが飛んでいた。厭わない。燃えながら、俺は尚もヤマシを挟み続ける。

「アズサに、手を、出すな…！」

爺さんが俺の顔を覗き込む。

「お前は、本当にソウクか？この程度の魔性しか操れないのなら、そもそも脅威を感じる必要すらなかったかもしれない」

手のひらを、燃え盛る俺の胸に爺さんが当てた。凶々しいまでの朱い眼が、俺に侮蔑の視線を投げかけている。

衝撃ー！上空に吹き飛ばされ、シャンデリアの一つにぶつかった。俺は一階のホールに落下し、共に落ちてきたシャンデリアの下敷きとなった。

周囲を吸血鬼達が囲む。炎は今の衝撃で消しとんでいた。

踊場ー！十字架の前で、ヤマシが手をナイフに変えている。

「やめろヤマシ！…やめてくれ！」

吸血鬼達の嘲りが聞こえた。何でもいい。アズサを救うイメージをよこせー俺自身に懇願した。

ドラキュラが俺の元へ跳躍してくる。周囲の吸血鬼達が、皆、ひれ伏していった。

「よく見ておくがいい。汝が血を啜る人間の断末魔を」

「頼む！何でもする！何でもするから、あいつにだけは、アズサにだけは手を出さないでくれ」

肉の焦げた臭いが鼻孔をつく。焦げているのは俺自身だ。

「汝は答えを知っているはずだ」

魔性を全快させる。その余波で背中の中のシャンデリアが消滅した。

ドラキュラを殺すー最初の目的。達成出来ないと解っていた目的。それを果たす為に、俺は立ち上がる。

「それが、全力か？」

イメージーアズサを救え。すなわち、ドラキュラとその配下を皆殺せ。

左腕が再生した。もう一度槍に変貌させ、立ちふさがるドラキュラの顔面に突き刺すー刺さらない。

槍の先端は、ドラキュラの皮膚で止まっていた。

「想像力不足か、あるいは」

「またも見えない力が槍を折った。桁が違いすぎる。」

朱い眼を細めて、俺の頭部をドラキュラが睨んだ。

「…魔性炉が小さい。どこへやった？」

気付かれた。

ドラキュラを相手にするのは無理だ。俺は跳び上がり、踊場に着地する。

ヤマシは今にも、アズサの腹を裂こうとしていた。させるわけにはいかない。

クスカと爺さんが俺を囲む。

「忠誠を誓ったばかりだというのに、お前は本当に出来の悪い孫だな」

「自分の置かれている状況を考えてみてください。ヤマシ様、ブラド様、伯爵様、私、それに階下にいる数百の吸血鬼達。どう足掻いても、あなたに勝機はありませんよ」

そんな事は解りきっている。解りきっていても、やらねばならない時がある。

俺はヤマシに再び襲いかかった。狙うは頭、脳内の魔性炉。

右の槍――かわされた。左の槍――折られていた。

「無理だって。クスカ、こいつ邪魔」

「はい」

後ろからクスカに羽交い締めにされる。背中にも槍のイメージを描く。背中から無数の槍が伸びるはずが、伸びない。クスカの体は、俺の槍より堅かった。止めてしまう。

「現実を見なさい。そして受け入れるんです」

受け入れられない。俺は駄々をこねる子供のように、ジタバタと体を揺らした。

「さ、やるぜ」

アズサの名を叫んだ。アズサの目が開く事はなかった。

ナイフに変えた手を、ヤマシがゆっくりと掲げていく。

祈る――何に、何を？

「待て」

ドラキュラの声。ヤマシの動きが止まった。

「聞きたい事が出来た。しばし、吸血の儀式を中心する」

ざわめき。

「伯爵様、いいんですか？」

困惑気味にヤマシが言った。ドラキュラは一瞬でアズサの前に姿を現す。

「プラトー。汝が最後に血を啜ったのはいつだ？」

「三年程前になります」

「では、今宵の吸血を中止しても問題はないな？」

「はい」

特に爺さんは不服そうな様子を見せない。吸血の儀式は、あくまで形式的なものに過ぎないという事らしい。

「小田桐ソウク」

呼び掛けには答えなかった。全ての憎悪を視線に込めて、ドラキュラに放つだけだ。

「残りの魔性炉を何処へやった？」

「知りたきゃ、アズサを解放するんだな」

「言葉遣いが、戻ってしまったようだな。いいだろう。汝には少々調教が必要なようだ。今度こそ、忠実な吸血鬼に育てあげてくれる。この女には、汝の調教に一役買ってもらおう事にしよう」

ドラキュラの調教――考えただけで鳥肌が立つ。

「すぐに、何の見返りもなく、我に真相を語りたくなるはずだ。クスカ、この男と女を、産卵の塔に閉じ込めておけ」

「仰せのままに」

全身に衝撃が走り、急速に俺の意識は薄れていった。気を失う刹那、ドラキュラが血色の悪い唇を吊り上げているが見えた――。

十二、幽閉の始まり、あるいは煉獄の始まり

眼が覚めると、急激な渴望に襲われた。

血が吸いたいー。

甘美なる血の匂いが、俺の欲望を促進させる。

視界は薄暗く、闇しか捉える事が出来ない。だが、渴望が俺に教えてくれる。血液が、すぐ近くにあるー。

俺は体を動かそうとするー動かない。四肢が、鉄と思われる枷によってその自由を奪われていた。背中にひんやりとした感触。石の壁だろうか。

魔性を解放し、枷を外そうとしたが、上手くいかなかった。この枷には、どうやら俺の魔性を無力化する力があるらしい。

そうこうしている間にも、俺の渴望はより大きくなっていく。一刻も早く、ここを離れなければ、気が狂ってしまいそうだ。

徐々に目が慣れてきた。闇しかなかった視界に、ぼんやりと景色が浮かび上がってくる。

高い所に切つてある、小さなあかりとりの窓を除けば、極めて閉塞的な空間だった。床、壁共に石で構成され、他にめばしいものは見当たらない。左に、これも石の扉らしいものが見受けられたが、こちらには覗き穴すらついていなかった。虜囚としての待遇は最悪だ。

さらに最悪なのは、血の匂いの大元が、対面の壁に、俺と同じようにして繋がれている、全裸のアズサのものだった事だ。

アズサは体中に、何かに引っかかれたような、細かいすり傷を負っていた。まだ新しい傷のようだ。それら一つ一つから流れた血液は、未だ凝固する事なく、新鮮で魅惑的な香りを放っている。

「アズサ……」

俺が問い掛けると、僅かに息遣いが聞こえてきた。

「ソウク……？」

視界の悪さで距離感がいまいち掴めなかったが、アズサのか細い声がしっかりと聞こえてくるとなると、予想以上に、この部屋の面積は小さいようだ。

「無事か？」

「うん。でも、痛いし、寒い」

無理もない。ただでさえワラキアは、昼間と夜で寒暖の差が激しい国なのだ。

「私、どうなっちゃうの？なんで、こんな事になっちゃったの？」

「すまない……」

俺に答えるべき言葉は存在しなかった。全ては、俺の浅はかさが

招いたものだ。

「ヤマシって人が、谷口さんのマンションに来て、谷口さんが、私を庇って、それで…」

谷口とは、社長の名字だった。

「すまない」

謝罪は具体的にすべきだった。あるいは、気の利いた言葉でもかけて、少しでもアズサを安心させてやるべきだった。しかし、血に対する渴望が、俺の思考能力を徐々に奪っていく。

「ねえ、私死ぬのかなあ？」

「死なない。俺が助けてみせる」

「あの時みたいにな？」

「ああ」

死なせない 血が吸いたい。

「大丈夫だ」

「だったら、安心だね」

言葉とは裏腹に、声色から一切の希望が感じられなかった。俺は、血が吸いたい アズサを必ず助け出すという決心を、一層固めていった 血が吸いたい。

魔性に頼らず、とにかく四肢に力を込めてみる。やはり、ビクともしなかった。時間は緩やかに、しかし確実に俺とアズサの破滅へと、その針を刻んでいく。血が吸いたい。

「ソウク」

「何だ？」

「自分を責めちゃだめだよ」

「どういう意味だ」

「私がこうなっちゃってるのは、ソウクのせいじゃないって事」

お前が《こうなっちゃってる》のは俺のせいだ。

「巻き込まれたとか、思ってないよ。私、ソウクが好きだから一緒にいたんだもん」

俺も、お前が好きだから 血が吸いたい ？ 違う。好きだから、守ろうとして、その結果が、これだ。本末転倒。ふざけてる。

抵抗の意志と、強烈な渴望が俺の中でぶつかり合っていた。時間に比例して、渴望が意志を少しずつ浸食していく。

石の扉から、声がした。爺さんだった。

「気分はどうだ。ソウク」

「最悪だ」

「そうだろうな。娘の血が欲しくてたまらないじゃろっ？お前が望めば、すぐにでも自由にしてやるぞ」

「糞食らえだ」

「いつまで、痩せ我慢が続くかの？」

足音――遠ざかっていく。

「ソウク？」

「どうした」

「吸いたい？」

吸いたい

吸いたい筈がない。

「前にも言ったけど、私、ソウクなら、いいよ？」

吸わせてくれ

「アズサ、やめろ。俺は」

血が吸いたい。

「血なんて、吸いたくないんだ」

意志の力——ここまで脆弱だとは思わなかった。所詮、俺も単なる血に飢えた化け物に過ぎないということか。

「無理しないで」

「すまない。少し黙っててくれ。イカレそうなんだ」

「…ごめん」

最悪だ。俺のせいでこんな目に合っているアズサが、それでも尚俺の身を案じてくれているというのに、そのアズサにあたるなどと…。

「俺こそ、すまない」

沈黙が、部屋の空気をより一層重くしていった。

朝になった。一筋の光が、部屋の中心に小さな円を作る。祈ってみた。その光を、適当な神に見立てて、俺は俺とアズサの救済を祈ってみた。

扉が開く。クスカが入ってきた。

「おはようございます。よく眠れましたか？」

「黙れ。殺すぞ」

気が立っていた。血が吸いたくて仕方がなかった。それがつまり

どういう辛さなのかを説明するのは困難だが、よかつたら考えてみて欲しい。あんたがいくつなのかは知らないが、生まれてこの方、一度も《痒い所に手が届いた事がない》んだ。その想像を百倍程膨らませてくれ。今の俺の気持ちになれる。

クス力は、両手に陶製の小瓶を持っていた。無表情で、それを俺にちらつかせる。

「片方は水です。アズサさんの補給の為に運んで参りました」

眠っているアズサの口に、クス力は強引に水を流しこんだ。咳込んでアズサが目覚める。

「おはようございます」

空になった小瓶を床に置いて、今度はもう片方の小瓶に手をいれるクス力。

「これ、何だかわかりますよね？」

人差し指と親指の間に、白い粉が摘まれていた――塩だった。

「何をする気だ」

想像は出来る。想像したくないだけだ。

「あなたがいつまで耐えられるかも見物ではありますが、伯爵様もあまり気の長い方ではないのですね。この調教にアクセントをつける事にしたんですよ」

今度は塩を鷲掴みにしてクスカが言った。

「やめろ」

「どうせ、アズサさんは死ぬのです。あなたも早く血を吸ってあげた方が、二人とも楽になれますよ」

「やめて……」

アズサーー恐怖で顔が引きつっていた。声が掠れていた。

「やめろ!」

叫んだ。体が砕け散りそうな怒りーそれでも血が吸いたいという渴望が消える事はなかった。

丁寧に、擦り込ませるように、クスカはアズサの傷口に塩を塗りとくつていく。絶叫が部屋に響いた。絶望が部屋に響いた。

「やめろ!」

クスカがやめる事はなかった。無造作に、その所行を続けていくだけだ。俺が工場で、ベルトコンベアーから運ばれてくる部品をダンボールに詰めるのと同じように、淡々と。

悲鳴と涙。懇願と渴望。何もかもが無意味だった。俺に出来る事と言えば、適当に見立てた光の神を、ひたすら呪う事だけだったー

十三、ソウクの崩壊――始まりの終幕

さらに、一日が過ぎた。俺もアズサも、ほとんど口を利かなくなっていた。

クスカにいたぶられたあと、アズサは一時間程、痛みに苛まされ、すすり泣いていた。なによりアズサを辱めたのは、あまりの痛みに、失禁してしまった自分の尿を、さらにクスカによって顔中に塗られた事だった。

『よくお似合いです』

クスカが言った。

『殺してやる』

俺が言った。

『出来るものなら』

出来なかった。俺は無力だ。無力故に無様だった。

血が吸いたいという欲望はピークにまで上り詰めている。頭の中から、アズサを助けなければならないという意志が、どんどん小さくなっていくのが自分で解った。

血を吸えば身も心も楽になれるのだ。吸ってしまえば…。

爺さんの声――いつまで瘦せ我慢が続くかの？

もう、限界かもしれない。

しかし、先に壊れたのはアズサの方だった。

深夜ー部屋から明かりというものが完全に消えた。深淵の闇の中、アズサの笑い声が聞こえてきた。

「アズサ？」

アズサは答えない。ただ、狂ったように笑い続けていた。

俺はあろう事か、苛ついてしまった。血の魔力に、本来俺がアズサに抱いているはずの愛情を吸い取られてしまったようだ。

「黙れ」

鬱陶しい。俺がこれほどまでに渴望に苦しめられている時に、苦しめている張本人が何を呑気に笑っているやがる？

アズサの笑い声は不気味だった。それはおおそ、人間のものとは思えない笑い方だったのだ。それ以前に、そもそもそれが笑いなのかすら、徐々に解らなくなってくる。笑い声が鳴き声にも聞こえてくるのだ。なんというか、それは発情した獣の鳴き声に似ていた。

「ソークー」

間延びした声。普段のアズサからは考えられない。

「ねー、ソークー、わたし、濡れてきちゃったー」

「黙れ」

黙らせたい。俺は血を吸いたいという渴望を抑え込むのに全ての神経を使い切っているのだ。

「冷たい事言わないでよー、ねー、しょうよソークー」

「黙れ！」

怒鳴った。何もかもが糞だった。だが、アズサの言葉に、俺のものもまた、激しく反応している。性欲と吸血欲。うんざりだ。

「冷たい事言わないでよ、いつもみたいにさ、ねえ、ソーク、してよ。愛してるんだからさ」

アズサは俺を愛していると言う。まやかしかった。

《アズサは俺を愛してなどいない。》

俺が今まで、ひたすらに目を背けてきた事実が、この極限状態によつて眼前に突き付けられている。

「愛してるのお。してよお、してよおお」

アズサの中にある俺の魔性炉の半分が、本来在るべき俺の中へと戻りたがっていた。それが、アズサが俺を求める理由だった。アズサは、それを愛情と勘違いしている。

そうでなければ、こんな状況で性欲が機能するはずがないのだ。

俺もまた、壊れる寸前だった。アズサを犯し、その血を一滴残らず貪りたい。俺は叫んだ――血を吸わせろ、この女を犯させろ。

「初めから、そう言っておればよかったものを」

扉が開き、爺さんが入ってきた。闇に、爺さんの朱い眼がゆらゆらと浮かんでいる。

「この女を、食えるな？」

頷く。

「いいだろう。戒めを解いてやる」

枷が外れた。俺はアズサに飛びついた。

首筋に、牙を突き立てる。美味い。力が漲ってきた。吸う。吸う。力強く吸う。アズサが何かを呟いた。聞こえなかった。

「爺さん」

「なんじゃ」

「アズサの、足枷を外してくれ」

爺さんは満足そうに頷くと、慣れた手つきで素早く解いた。

俺はアズサの両脚を広げ、貫いた。果てた。血を吸った。貫いた。果てた。

「それでいい。この産卵の塔は、この為に建てられたのだから」

どうでもいい。これが役に立たなくなるまで、アズサを犯し続けてやる。

下衆野郎――どこかで俺が俺に言った。構わない。犯し続けてやる。

下衆野郎――アズサの声だった。それでも俺は収まらなかった。

「何が下衆だ？お前が望んだんだろう？俺に犯されたかったんだろ？俺になら、血を吸われてもいいんだろ？」

「だって、だってソウクは、こんな、乱暴な事はしない、しない、でも、いいの、すこしいいの」

壊れた牝の戯言だった。支離滅裂。下衆に犯されて喜んでやがる。

イメージが溢れた。俺はアズサを犯しながら、魔性を解放する。

何を具現しよう？俺は体中に性器のイメージを描いた。何故こんなくだらない事を考えたのか自分でも解らない。ただ、俺は体の全てをアズサの中に入れたかった。体の全てでアズサを犯したかった。

やがて、俺の体は性器となり、アズサの子宮へ侵入を図った。

もちろん、それには無理がある。アズサは、性器から真っ二つに裂けていった。

十三、ソウクの崩壊――始まりの終幕（後書き）

一部完となります。

やりたい事全てをぶち込もうと、ついつい焦りすぎたのか、中盤で物語に大きなミスを侵してしまい、大幅な方向転換をせざるを得ない状況に陥ってしまいました。完全に僕の注意力散漫です。よって、新たに最終話までの道筋が整うまで、更新が困難になります。この物語をここまで読んで頂いた方には、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです。すみませんでした。時間はかかりますが、必ず再開致しますので、どうかご了承ください。繋ぎという訳ではありませんが、その間、過去に作り上げた作品を載せさせて頂こうと思っています。

こちらの休載は、長くてもひと月程になるかと思います。再開の際に、まだ覚えて頂いていたら、またよろしく願います。本当に、申し訳ございませんでした。

太郎鉄

1、小田桐ソウケの行方（前書き）

思いの外、早く再開出来ました。こんな事なら前回後書きを綴る必要はありませんでした。どうも、大変お騒がせ？して申し訳ございません。それでは、第二部になります。どうか最後までお付き合いください。

1、小田桐ソウクの行方

以下は、柳沢秀明が、矢部広明に対して行った質疑とその応答をカセットテープに録音したものの再生記録である。

柳沢：それで、あなたはその小田桐ソウクという吸血鬼に命を助けられたわけですが、以前から、小田桐とは親交が深かったのですか？

矢部：いいえ、俺はそれまで、なんつうか、とにかく吸血鬼を毛嫌いしてまして、小田桐にも、まあ、その矛先を向けちゃってましたね。

柳沢：辛く当たっていた？

矢部：はあ、まあ、そんな感じですよ。

柳沢：しかし、それでも尚、小田桐はあなたを助けたと、こういう事ですか。

矢部：ええ、そうです。

柳沢：小田桐ソウクとは、どんな吸血鬼だったんでしょう？

矢部：小田桐について、よく考えるようになったのは、あいつに助けられた後からで、それ以来あいつは姿を消しちゃってるから、何て言ったらいいか判ないですけど、仕事は真面目にやっていましたよ。俺以外の作業員には好印象だったと思いますね。特に社長は、恋人の命を助けてもらったとかで、かなり小田桐を買っていました。

柳沢：以前から、人間に好意を抱いていたという事でしょうか？

沈黙。機械音が混ざる。

矢部：さあ。でも、一つ言えるのは、あいつは、結局人間とそんなに変わらないんじゃないかって事だけです。

柳沢：小田桐の失踪と前後して、谷口社長が吸血鬼らしい人物に襲われ重傷を負い、また、現場にいた彼の恋人である金井アズサさんが誘拐されるという事件が起こっていますが、小田桐と何か関連があると思いますか？

矢部：タイミングから言って、そりゃ何らかの関連はあると思います。だけど、犯人が小田桐であるとは全く思ってません。

柳沢：では、万が一、小田桐ソウクが犯人だとしたら、どうします？

沈黙。ライターの着火音。

矢部：そんな事はいざそうなるまで解らないし、そうでない事を信じてますね。

柳沢：成る程。ありがとうございました。

矢部：俺からも、一ついいですか。

柳沢：何でしょう？

矢部：柳沢さんの著者、読ませてもらったんすけど、結局、あなたは、吸血鬼の事どう思ってたんですか？吸血鬼の利害とかそういうの抜きで、もっと主観的な感情では。

沈黙。コーヒを啜る音。カップをテーブルに置く音。

柳沢：害虫ですね。しかも人間にとって致命的な毒を持った。出来る事なら、滅んで欲しい。

矢部：だったら何故、小田桐の本なんて書こうと思っんです？

柳沢：小田桐ソウクは実に興味深い吸血鬼です。

少なくとも、一般の職場を持っている吸血鬼は私の知る限り彼だけでしょう。谷口さんの事件を知ってから、小田桐の存在を認識しましたが、あるいは、彼が我々人類と吸血鬼の共存の鍵を握っているような、そんな気がするんですよ。何とか彼とコンタクトを取りたい。私の主観とは、矛盾した目的ですがね。

矢部：見つかるといいんですがね。社長の為にも。

柳沢：彼から何らかの連絡が入ったら、どうかご一報ください。今日は、どうもありがとうございました。

柳沢は自宅の書斎でテープレコーダーに耳を立てていた。矢部広明からは結局大した話が聞けなかったが、収穫が零というわけではない。小田桐ソウクという吸血鬼が、やはり他の吸血鬼とは一線を画して人間的であるという事は確認出来た。

少なくとも、小田桐には矢部という男が抱いていた吸血鬼全般に

対する負の印象を覆す事に成功しているのだ。これは、ある意味では歴史的偉業と言ってもいい。

調査を進めていく内に面白い事も判った。小田桐ソウクは、谷口社長の恋人を横恋慕している。金井アズサのマンションで、血相を変えた上半身裸の小田桐が屋上へ走っていく姿を、隣室に住む女性が一度だけ目撃していた。

注目すべきは、小田桐が社長の谷口に隠れて事を行っている点にある。普通の吸血鬼なら、こんな回りくどい事はしない。欲しい女はさらって血を啜って殺すだけだ。この事から、小田桐の二つの特徴が判明する。

一、小田桐は人間の血を啜らない。我慢強い吸血鬼である。

二、小田桐は横恋慕に罪悪感を抱いている。つまり、雇用主である谷口に感謝の念を持っていた。と、同時に金井アズサを愛している。

相反する感情に、血に対する渴望と等しく苛まされる悲劇の吸血鬼、小田桐ソウク。これは売れる。そして、人類の吸血鬼に対する印象も少しは変わるかもしれない。

とにかく、小田桐ソウクは金になる。柳沢は書斎で、コンビニ弁当を平らげ、簡単に夕食を済ますと、再び何処かへ出かけていった。

当の小田桐ソウクは、その時、太平洋を北上していた。彼の背には二枚の翼が伺える。大空を超スピードで飛行する彼の姿は、たまたま目撃していたキリスト教を信仰する漁師には、まるで黙示録に登場する天使のように映ったという。

しかしながら、漁師の印象とは裏腹に、小田桐ソウクの瞳は、怒れる悪魔の如く、朱く燃えたぎっていた。

日付は十二月二十四日。クリスマスを三時間後に控えた、イブの夜の出来事である。

2、墮天使

新宿駅東口とアルタの中間にある広場では、特設のステージが設けられ、裾の短いサンタクロースの衣装に身を包んだ女性のダンサーに囲まれたアイドルが、クリスマスソングを熱唱していた。

街路樹のイルミネーションは、ここ数日で最も豪華な輝きを放ち、訪れる恋人達に、至福の時を与えている。

小田桐ソウクは、その光景を三千メートルの上空から見下ろしていた。間もなく、ここから数十キロ離れた《神の家》という巨大な教会に、ワラキアからドラキュラ達がやってくる。時刻は午後七時。すでに、神の家には日本中の吸血鬼が集まっている事だろう。たった一人の戦いになる。かつての父のように、たった一人でドラキュラ達と戦う。

しんがりには、クスカの隊がくるはずだ。次いでヤマシ。その後ブラドとドラキュラ。合計三万五千程の軍勢。一夜で日本を転覆させるに余りある顔ぶれだった。

現在、ソウクの戦闘能力は、ヤマシを僅かに上回る。全吸血鬼中、序列で示せば三位の実力と言えるはずだった。

今夜で、終わりにする。例え、この命と引き換えになろうとも。

ソウクは目を閉じ、内なる意識に声をかけた。

『アズサ、調子はどうだ』

『うん、いい感じ。あんたが喋りかけさえしなきゃね』

『今夜は、少し負荷をかけてしまいかもしれない。大丈夫そうか』

『駄目って言ったら、やめてくれるわけ？』

ソウクはかける言葉を失った。それがアズサの真なる望みである事を知っているからだ。

『すまない』

『じゃあ勝手にしてよ。勝手にして勝手に死んで』

ソウクが地上に降り立つと、夢気分を満喫していた恋人達の注目の的となった。ステージ上のコンサートも、ソウクの降臨により一時中断される。

ソウクは魔性を解放し、マシンガンのイメージを両腕に描く。人々の夢気分は終わり、代わりに至る所から悲鳴が聞こえ始める。

マシンガンが火を吹いた。悲鳴が阿鼻叫喚に、阿鼻叫喚が断末魔の叫びに変わっていく。吹き飛ぶ頭、体、四肢。ステージ上のアイドルとダンサー、下の観客達があっという間に潰れたトマトに変貌する。

ソウクはそれら一つ一つの死体から血を啜る。魔性力が飛躍的に向上し、彼の体から朱い湯気のようなものが立ち上っていく。

すぐさま、けたたましいパトカーのサイレンが聞こえた。何発もの弾丸が、四方からソウクに飛んでくる。

ソウクは再び空へと飛翔し、音速に近いスピードで闇に消えていった。

『社長の所へ、寄っていくか?』

『何それ。当てつけのつもり?』

『違う。気になっていると思っただ』

『うるさいな、面倒だからいいよ』

『解った』

神の家のすぐ後方は絶壁で、その下には海がある。ステンドグラスに描かれた、十字架に磔られているキリストが無表情な瞳で上空のソウクを見つめていた。

キリストはソウクの親戚に当たる。聖書におけるキリストが起こした様々な奇跡は、魔性の力によるものだ。時に体をパンに変え、血をぶどう酒に変えた。彼が再三祈っていた大いなる父とは、ドラキュラの事を差すのだ。

皮肉な話だった。ドラキュラこそが、人々が救いを求める神なのだ。さしずめ、今夜は黙示録の再現と言ったところか。ドラキュラの世界侵攻は、キリストの伝導と深い関わりがあるとハクアやブラ

ドは言っていたが、真相は定かではない。

神の家は吸血鬼が神父を勤めている。礼拝堂内はオペラのホールと見間違えるくらい立派で奥行きがあるが、日本中の吸血鬼を収容できるはずもなく、神の家の周囲はあふれた吸血鬼で溢れかえっていた。

大掃除の時間だ。ワラキアから本隊が到着する前に、雑魚は全て片付ける。

本来の大きさに戻った魔性炉と、血の力による能力の増幅。視認出来る吸血鬼の数はおよそ二千。

まずは、外の連中からー！。

ソウクは魔性を五分の力で解放し、翼にレーザーのイメージを描く。具現化した魔性をさらに別のものと併用する。これはワラキアの吸血鬼でもヤマシ以上の能力がないと難しい。

さらに、レーザーの威力の調節。撃つではない。討つにー！。

全ての吸血鬼を討つ光となれー！。

翼から数万の、細く朱い光が、地上の吸血鬼に、雨のように降り注いだ。

3、ソウク対クスカ

神の家から、賛美歌が聞こえてくる。もろびとこぞりて、主は来ませりー。

礼拝堂内の吸血鬼達は、外の惨状に気が付いていないようであった。

もろびとこぞりて、迎えまつれ、久しく、待ちにし、主は来ませりー。

確かに、日本の吸血鬼達にとっては、これ程今宵に合う賛美歌もないだろう。ソウクは、僅かにはあるが、呑気に賛美歌を歌っている吸血鬼達を憐れんでいた。恐らくは、彼等にとっての主、ドラキュラ伯爵の救済を心から信じているはずだ。

そんなものはありはしない。これから俺が叩き潰すー。

ソウクは、産卵の塔でアズサを陵辱して以来、基本的に余分な思考をしなくなっていた。あの後から、彼にあるのは、ドラキュラへの限らない憎悪と、己に対する最上級の嫌悪だけだ。

ソウクは、吸血鬼達の数え切れない程の屍の上で、夜空を見上げた。星は見えない。月も見えない。あるのは無限の闇と、冬の冷気だけだった。それは、今のソウクの心と同じだった。

それを憂いだわけではないが、ソウクは掌に炎のイメージを描き、神の家に向けてかざした。クスカの十八番。しかし、今のソウクの魔性は、クスカのそれを凌駕している。

焼くではない。灼き尽くすー。

掌から生み出されし爆炎が、神の家を覆い尽くした。以前、クスカとの戦いにおいて、アパートを炎から守った事があったが、そのような記憶が蘇る事もなかった。人間らしい生活は、二度とソウクに戻ってこない。

《灼き尽くす》というイメージの力は絶大であった。神の家から何人もの、炎に包まれ、夜の闇のにあつてはその存在の視認すら難しい程に黒く焦がされた吸血鬼達が、もがきながら這いずり出て来る。

本来、燃やす程度で吸血鬼の命を絶つ事は出来ない。膨大な再生能力が、即座に新しい皮膚を内側に造り出すからである。

だがー。

ソウクの炎に晒されては、日本の吸血鬼達の再生能力などまさに焼け石に水であった。再生のスピードより早く、体内までも灼き尽くし、やがては吸血鬼の心臓、魔性炉にまで炎は及ぶ。

熱いという悲鳴。ソウクには羨ましくすら聞こえた。凍りついた彼の心が、無意識に熱さを求めていたのかもしれない。

上空に飛び、海の彼方を見据えた。無数の朱い点が、凄まじいスピードでこちらに向かってくる。

いよいよ、クスカの隊がやって来たのだ。神の家が、狼煙代わりに、黒煙をさらに深い漆黒へと溶かしていく。

空中戦は初めてであった。対して、クスカやその配下の吸血鬼は空を飛ぶ事に慣れきっている。

すなわちー！。

それは何ら脅威になり得ない。なんのアドバンテージにもなりはしない。

クスカを中心に、数千の吸血鬼がソウクの目前で浮遊していた。

「ようやく、見つけましたよ」

言いながら、クスカは眼下で燃え続けている神の家に視線を移した。

「やってくれましたね」

強気な科白と裏腹に、クスカの表情からは僅かな恐れが見受けられる。当然だった。この短時間で、ソウクが殺した吸血鬼は、彼の絶大な実力を証明するのに十分な数に達している。

「我々は、簡単にはいきませんよ」

「うるせえよ」

自分でも信じられない程低く、重い声だった。生きている者に声をかける事自体、久しぶりだったせいもあるのだろうか。

「さっさと来い。前座が長いと、客が退屈する」

その言葉に怒りを覚えたクスカは、まず、左手を振り上げ、左翼の吸血鬼達に戦意を促した。

「殺しなさい！」

あっという間に、ソウクは吸血鬼達に囲まれた。上下から、前後左右に至るまで。遠目には、何か巨大な円の塊が空に浮いているようにしか見えない。次の瞬間、円が燃え、四散し、海に堕ちた。

「馬鹿な……」

思わず、クスカはするように洩らした。

「右の連中は、俺の方から片付けてやるよ」

ソウクは右腕にブレードのイメージを描いた。恐ろしいまでに長く、巨大なブレードが、水平に伸び続けていく。

直径にして、三百メートル。幅ですら十メートルはあるであろう、虐殺の刃の完成である。

クスカは戦慄を隠す事が出来なかった。目の前の光景に、明らかにうろたえている。だが、敗走は許されない。魔性炉を完全に取り戻したソウクよりも、遥かに恐ろしい存在が後方より現地に向かってきているのだ。

逃げれば死。では、立ち向かえば？

「私が、彼を恐れるなど……有り得ない！」

右翼の吸血鬼の頭部が、遠方から順番に――恐らく、人間の視力では全てが一瞬の内に――斬り落とされていく。無論、ソウクのブレードによってであった。

それほどに巨大な刃を、ここまでのスピードで操れるだけです。に驚嘆に値するが、それよりも、クスカが驚いたのは、その精度の高さであった。全ての吸血鬼が、正確に魔性炉を刻まれたのである。クスカの隊が到着してから、時間にして僅か二分。

生き残りはクスカだけとなってしまった。

「信じられない。まさか、あなたの真の力が、これ程までだったとは……」

鳥肌が立つなどと、ワラキアに生まれたクスカにとっては初めての経験である。

「来いよ。お前には随分と借りがある」

ソウクがブレードを腕に戻す。後悔していた。ソウクの怨みを買った事を、クスカは後悔して止まなかった。

半ば自棄になって、クスカは全魔性を解放し、両腕を炎に変えた。合わせて、銃に見立てる。ソウクに狙いを定めた。

撃つ。そのイメージと共に、両腕の炎がソウクへと飛ぶ。持てる力の全てを使った一撃であった。

ソウクの姿が炎に包まる。夜の空にまで、その灯りは届いていた。

「燃え尽きてしまいなさい！」

魔性を使い果たした反動により、クスカを途方もない倦怠感が支配した。今集中を怠れば、浮遊する事すら困難になる。

炎が消えた後には、灰だけが残るはずだった。もちろん、クスカはそれを信じていた。否、信じたかった。

しかし、炎の中から現れたのは――。

「温いよ」

数秒前と全く変わらないソウクであった。

クスカの精神は、もはや崩壊に足を掛け始めていた。この一撃が通用しないとなると、手だては残っていない。いくら鍛え抜かれた吸血鬼といえど、ここまで限定された絶望の未来を前にしては、平常心を保てという方が酷な話である。

クスカは叫んだ。叫ぶ事しか出来なかった。

「宴の時間だ。雑魚は始まる前に」

クスカの視界が塞がれた。何が起きたか判らない。恐怖に混乱が混じる。ソウクがクスカの顔を掴んでいるのだが、それは刹那より早く起こった出来事なのだ。

「闇に帰れ」

ソウクは皮肉を込めて、指先から冷気を浸透させていった。冷気は、クスカの恐怖もろとも、彼の頭部を凍てつかせていった。

4、苦闘

『アズサ』

『なによ』

『まだ、耐えられるか』

『ご機嫌とりはもうやめて。反応するのも面倒だから』

アズサの言葉に、ソウクが傷付く事はなかった。後悔や自責は、もう数え切れない程繰り返している。今更、かつてのアズサを望む事はないし、その資格もソウクにはない。

海が荒れていた。堕ちた吸血鬼達の魔性炉が溶けているのが原因かもしれない。亡霊が黄泉の扉をこじ開けているかのように、波がうねり、巨大な渦巻きを作り出していた。

あれは地獄と繋がっている。

『どうせなら、完全に死にたかった。冗談じゃないよ。私は二度も死んでるのに、二度とも死にきれなかった』

一度目は生への帰還を喜び、二度目には呪った。

『安心してくれ。それも今日で終わる』

全てにカタが着いたら、ソウクは死のうと思った。全てにカタが着くまでは、死ぬわけにはいかなかった。ドラキュラだけは、生か

しておくわけにはいかない。かつてのように守るべき者はいない。これは、単なる復讐であつた。

ヤマシが、猛スピードでソウクの前にやってきた。

「一人か」

「遠目から見る限り、雑魚何匹連れてきても、役に立ちそうになりからな。先に街に飛ばせた」

「そうか」

「止めねえのか」

「もうその必要はない。俺もさっき、人間を殺してきたばかりだ」

「変わったな」

「お前達のお陰でな」

嘲りーヤマシの口から、夜に響いた。

「結局、お前は俺達の誰とも変わらなかったわけだ」

イメージー左腕は鞭。右腕はブレード。どちらも伸縮自在。

「よく、ワラキアを抜け出したな。大分探したんだぜ。どこにいやがった？」

爆発。変貌。攻撃。

鞭はヤマシの体を縛り付け、ブレードが右方向から水平にヤマシの魔性炉を狙う。

ヤマシの首が伸びた。まるでろくろ首。ブレードはヤマシの首を切断する。

「気が早えよ。ソウク」

切り離された首の断面から細い繊維。繋がり、元通りになる。

鞭が破裂した。左腕の再生。瞬間的に終わる。

「鞭と爆弾は相性が悪いぜ。曲線は使い勝手がいいが、破裂を司る魔性には弱い」

御託ー聞き流した。

今度は上空から、直接ヤマシを一刀両断しようとした。ブレードを振りかざす。降ろす。ヤマシが避け、ソウクの腹にアッパーブローを打ち込んだ。爆発。ヤマシの拳が碎け散り、ソウクの腹部に穴が開く。

「ちつ。爆弾も近接戦闘には向かないな。いちいち再生しなきゃならねえ」

薄笑いを浮かべるヤマシ。距離を取るソウクは無表情。両者が損なった部位は、この時点で完全に復元されていた。

ソウクとヤマシの戦いにおいて、魔性炉以外への攻撃は、ほぼ無

意味だった。再生能力の高さ故に、お互い、通常の戦闘方式ではダメージが与えられない。

しかし、ヤマシはソウクに尚も近接戦闘を挑んでくる。両手両足にボムのイメージを込め、着弾と同時に破裂させる。

「古いぜ。ヤマシ」

右の拳を左に避けると、下から左足がソウクの顎目掛けて飛んでくる。こちらは上体を後ろにずらしてしのいだ。

反撃。ブレードを振る。ヤマシの体が千切れた。腰から下と上。翼のない下半身が海に堕ちて、波にさらわれた。

「へえ。やるじゃなえか」

ヤマシは楽しそうに言った。切断面から、腸と思われる臓器が垂れ下がり、そこから血が滴っている。

ソウクが有利の展開となった。下半身を丸々損なったとあれば、いくらヤマシと言えども、再生にはそれなりの時間がかかる。

「それが、直系の血の力かよ」

「ああ。呪われし力だ」

「その力を失ってまで、具現していた女の命を、再びてめえで奪ったわけだ。間抜けな野郎だぜ」

左腕もブレードに変えた。二刀を交差させた斬撃が、ヤマシの上

半身を肩から×印に刻む。ヤマシに残ったのは、頭と肩より下の、僅かな逆三角形となった胸部だけであつた。肩より突き出た翼は、かろつじて彼を浮遊させるに留める。

「怒つたのか？単純だよな、本当によ。初めて会つた時の事を思い出すぜ。血を吸わない者同士、仲良くやろうぜ、とかそんな言葉に、お前心底嬉しそうな顔してたっけ。初めて、真の意味での《同胞》に出会えたとか抜かしてたよな？」

お笑い草だぜー嘲りが呪詛にすら聞こえた。

『この人の言うとおりよ』

アズサの声も、また呪詛であつた。

『あんたは間抜けで、最低の下衆野郎。一度でも愛してるなんて思つた私が、愚かすぎて泣けてくるわ』

思考が乱れる。イメージが消える。ブレードが腕に戻り、翼も徐々に浮力を失い始めていた。

「アズサ。今は、静かにしててくれ」

『はあ？私がいつ、どこで、何を喋ろうと、私の勝手でしょ』

くそーアズサを黙らせたかつた。黙らせる力と資格がソウクにはなかつた。

頭だけのヤマシが眼前に迫る。

「仲間割れか、おい」

嬉しそうな顔。憎たらしくて仕方がない。ソウクは魔性抜きの、生身の拳でヤマシの顔を殴った。鼻血が、ポタポタと唇の上に溜まっていくのが見えた。

「けけけ。そんなへばパンチじゃどうにもなんねえなあ」

ヤマシの口から唾――狙いはソウクの顔。とっさに右腕で庇う。爆発。

「ちい。惜しいな」

『死ねばよかったのに』

「頼む。黙っていてくれ！」

イメージがアズサの呪詛に削り取られていく。まさか、ヤマシが心理戦に持ち込んでくるとは思わなかった。ソウクの知っていた、友としてのヤマシは、単純明快な男であつた筈だが、それも芝居の一環という事だったのか。

客観的には、明らかにソウク有利の戦いであるにも関わらず、ソウクは徐々に追い詰められていった。ヤマシが、ソウクの中にいるアズサの意識に気付いて、彼に罵声を浴びせたのかは定かでないが、極めて有効な手段である事は明白だった。いくら本来の魔性炉に血の力を加えたソウクと言えど、イメージが上手くいかなければ、そんなものは全て無意味なのだ。

加えて、頭だけになったヤマシからここまでの余裕が見受けられ

る事も、ソウクの心理的なプレッシャーに繋がる。親衛隊長ごときに、魔性力を消耗している場合ではないのだ。真なる敵は、さらに強大なのだから。

「ところでよ、ポコチンになるってのはどんな気分なんだ？やっぱあれか？感度が増すのか」

「黙れヤマシィー！！！」

怒りの具現――やはりブレード。ヤマシの魔性炉、頭の上部を狙う。命中。終わる筈だった。

側頭部に当たったブレードは、あっけなく折れてしまった。まるで、安物のカッターナイフのように。

5、凶事の始まりは別の場所から

欠損したブレードを修復する事すらままならない。アズサの呪詛が、ひたすらにソウクの死――あるいは自身の死――を望んでいるからであった。

『殺されちゃえ』

頭痛と目眩。ヤマシの顔が歪んだ。血が欲しい。アズサの声をかき消し、俺をトリップさせる麻薬が欲しい――。ソウクは思った。

「ははは。おいおい、腕っ節は強くなっても、口喧嘩はほんと弱くなっちまいやがったな。ポコチン野郎」

もう片方のブレードが腕に戻る。ソウクは頭を押さえた。このままでは、翼すら危うい。

一時退却すべきか――。

「伯爵様が間もなくおいでになるぜ。タイマンに運びたかったんだろっが、このままじゃ無理そうだなあ、え？」

折れたブレードを振り回した。当たらない。当たったところで効果もないが。

『死ね死ね死ね死ね』

血を、力を、アズサの呪詛を上回る呪いを俺にくれ――。

「まあいいや。意外とあっさり片付いてラッキーだったぜ。せいぜい罵りあってくれや。あばよ」

息を吸い込む音。吐く音。翼に当たる感触。翼が破裂する音。

ソウクは落下した。荒れ狂う海は、ソウクの想像通り、地獄に繋がっているように思えた。

同時刻。東京都渋谷ー。

ハチ公前で、矢部はリカを待っていた。リカとは、矢部が以前にキャバレークラブで知り合った十代の女性である。一重で、どこかキツそうな印象を男に与えてしまう事から、飲み仲間には評判が悪かったが、矢部はリカを気に入っていた。

キツそうなイメージと裏腹に、年齢や外見に不相応な敬語を正確に操れるのもリカの魅力の一つだが、何よりも死んだ前妻の愛子に瓜二つである事がその理由だった。

出会ったのは半年程前だった。以来、矢部は週一回のペースでリカが働く渋谷のキャバクラーヴィーナスへ通っている。彼の給料ではなかなかキツイノルマではあったが、そもそも無趣味で他に消費もない矢部には、何とか誤魔化せる範囲の額だった。

何度か、告白を考えた事もある。しかし、リカが矢部に対して男性的な好意を抱いていないのは明白だったし、十以上年が離れている女の口説き方など、矢部には知る由もなかった。

それでも、クリスマスである今日くらいは、店外デートと洒落込

みたかったのだが、リカが出勤日で、なおかつ同伴の強制日だと知ると、そんな気持ちは胸の奥に引っ込んでしまった。

約束の時間の五分前、リカが雑踏の中から姿を現した。ピンクのドレス。露出した肩を冷氣から守るように、白のカーディガンを羽織っている。茶色く染められた長い髪は、先端にウェーブがかかっていた。

矢部は苦笑する。もしも愛子が水商売をやっていたら、やはりこのような外見になるのだろうか。当時の矢部が、妻に水商売を許す事もなかったであろうが。

「矢部さん、ごめんなさい。待たせてしまいました？」

矢部は小さく笑って首を振った。やはり、言葉遣いがすっかりしている。髪型や化粧の仕方は渋谷でよく見られる少女と変わりはないのに、たたずまいは大和撫子のようなだった。

「今日は、本当にありがとうございます。実は困っていたんですよ。誰にも相手にされなくて」

眉を八の字にして、悪戯っぽくリカが笑った。こういう仕草の一つが、やはり愛子を連想させた。

「行こうか。ここ、寒いでしょ」

リカは頷き、矢部と共に歩き出した。八チ公前の交番を横切り、宮益坂を登っていく。少し歩くと、右に小道があった。ヴィーナスはこの通りに面している。

クリスマスソングが、ボーイ達のいらっしやいませという声にかき消された。店に入ると、すぐさま隣にリカが付いた。VIPルームに腰を掛けてみたいとも思ったが、そこまでの余裕はない。それに今は、手提げ袋に入ったりリカへのクリスマスプレゼントを、どのタイミングで渡すべきかで矢部の頭はいっぱいだった。

対面の席では、頭の禿げ上がったサラリーマンが酔った勢いでやたらと女の体を触っていた。女は困った笑顔でそれをいなしている。

「この季節、増えるんです。ああゆうお客様」

ため息をつきながら、リカがテーブルの上で水割りを作っている。

「リカちゃんも、やつぱされんのかい。ああゆうの」

「ええ。やはりお客様ですから、どんなに嫌でも耐えるようにしています。ですが、時々本当に泣きたくなくなってしまふんですよ。だから、矢部さんのような方に付く時が、ここで一番安らげる時間です」

矢部さん、ではなく、《矢部さんのような方》という表現に、少し肩を落としたものの、矢部はふむと鼻を鳴らした。

どうして、キャバ嬢なんてやってるんだいーこれまで何度も、口から出そうになった言葉を、矢部は何とか飲み込んだ。彼女には彼女の理由があるし、それがあいるいは悲劇的なものであった場合に、どんな言葉を掛けていいか解らなかつたからだ。もちろん、リカが標準的なキャバクラ嬢であつたならそんな杞憂は存在しないが。

それにしても、対面の男の態度は酷かつた。女がいくらいなして

も、執拗に胸元や腰に手を回す。

「お店の人、注意しないの？」

「最近では、渋谷にも、その、セクハラを前提としたお店が増えていますし、お客様がどんどんそちらに流れていつてしまうから、店長からも、相当悪質でない限り、我慢するように言われてるんです」

あれは《相当悪質》な部類に属さないのだろうか、矢部は唸ったが、自分には関係ないし、気にしないように努めた。

「何か、飲みたい？」

「いえ、大丈夫です。来て頂けるだけで、私には充分なんです」

やはり、リカはキャバクラに向いていない。ここで貪欲になれないのであれば、成績が上がる事はないだろう。もっとも、矢部にはリカのそういう謙虚さが一番輝かしく見えるのだが。

「いいんだよ。俺からのささやかなクリスマスプレゼントだと思っでさ。リカちゃんが頼まないなら、俺が勝手に決めちゃうよ」

矢部はメニューを広げた。値段順に様々な種類のアルコールが記載されている。最高額は三十万のドンペリ。ホストクラブよりは遥かに安い、それでも矢部の手には届かない。

結局、カシスオレンジを頼む事にした。以前、リカが甘いお酒しか飲めないところばしていたのを思い出して。

「本当に、いいんですか？」

「もう頼んじやったもん。ほらほら、そんな困った顔しないでさ、楽しもうよ。クリスマスだぜ、今日は」

リカの顔がパツと明るくなり、はい、と元気な返事が返ってきた。

メリークリスマス。矢部とリカは互いのグラスを弾かせた。店のBGMが、赤鼻のトナカイに変わる。

「てめえいい加減にしろよブスウ！」

対面の席。先程のサラリーマンの声だった。

「こつちがいい気分で飲んでんだからよお！乳くらい触らせろつつう話だよ！高い金払ってんだぞ俺は！それとも何か、てめえのありふれた乳は俺が払った金より高いとも言いたいのかああ？！」

男はテーブルを拳で叩いていた。付いた女も、いい加減苛ついたのか、男に冷ややかな視線を送るだけだ。

「てめえなんだその目はあ！おい、店長出せコラ！この店接客悪いぞ！」

男より遥かに若い二十代と思われるボーイが、うるたえながら頭を下げていた。リカはやりにくそうに視線を矢部に向けている。

矢部もまた、苛ついていた。せつかくのリカとの一時をぶち壊された事もそうだが、この苛つきの根底には、何か別の原因があるようだった。

男はボーイに水割りをぶちまけた。何故か、小田桐の手の甲にナイフを突き刺した自分がオーバーラップして見える。

「ああうぜえ。チェンジチェンジ。俺の前に座ってる女連れてこいや」

リカの事だった。リカの表情は恐怖に溢れていた。助けを求めるように矢部を見つめる。

矢部には好都合でしかなかった。これで心置きなく、あの男をぶちめせるー！。

ボーイは顔を拭うのも忘れて、申し訳なさそうに矢部の元へ歩みより、リカに指名が入った旨を伝えた。

「ごめんなさいと言って立ち上がろうとするリカを、矢部が制する。

「矢部さん？」

矢部は乾杯したグラスを手に取り、男の前まで歩いて、頭の上で逆さにした。

男は怒り狂って矢部の胸倉を両手で掴む。早口でまくしたてられたが、意味は理解出来なかった。

「うるせえ。赤鼻にするぞてめえ」

矢部はあらゆる侮蔑を視線に込めて、男を睨み付ける。男は僅かに怯んだが、アルコールの力が、さらなる暴力を男に強行させた。

右フックが、矢部の頬に命中する。歯がぐらついた。矢部は笑った。正当防衛の準備が整ったからだ。法律的なものではなく、あくまでリカの印象を気にした正当防衛が。

矢部は渾身の力を拳に込めて、男の鼻に右ストレートを放った。確実な手応えが予想される。

しかしー。

男の顔が消えた。代わりに、膨大な量の血液が男の首から噴水のように溢れ出る。顔中に返り血を浴びる矢部。とっさに顔を両手で塞いだものの、間に合うはずもなく、彼の顔は、とりわけ突出している鼻の頭は、真っ赤に染まった。

一瞬の沈黙。その後に悲鳴が店内に響いた。BGMが、最後のサビに移行しようとしている時の事だった。

暗い夜道にや、ピカピカの、お前の鼻が、役にたつのさー。

この凶事に、矢部の鼻は一切の機能を失っていた。

6、虐

同日。五分钟前。東京都渋谷上空――。

夜空を朱い点が覆い尽くした。最初にその異常に気が付いたのは、センター街の路上に座り込んでいた三人組の若い男女である。男性二人は人工的な紫外線の力で創りあげた東洋人としては有り得ない黒色の肌を、脱色を繰り返して艶や生気を失った白髪で際立たせていた。女性の方も、ほぼ同じような外見をしている。

「なんか空、やばくね？」

「マジだ。なんか半端ねえ」

「ちょろクリスマスとほど遠くない？」

星でない事はすぐに解った。朱い点が目まぐるしく移動しているからだ。

「おい、なんか近付いてきてねえ？」

「マジだ。なんか半端ねえ」

「キヤハハ。サンタさんっぱいって」

女の首が飛ぶ。噴水。男の白髪を返り血が赤く染めた。通行人が叫ぶ。通行人の首が飛んだ。噴水。朱い点の正体――有翼の吸血鬼である事はこの時点で街を歩くほとんどの人間が理解していた。思考の凍結は、この惨事の原因が理解出来ないからだった。

「なんか半端なくねえ？」

「半端ねえ」

街中の通行人が赤い噴水に変えられていく姿を、二人は呆然と眺めていた。最後に、自分達の首がはねられるその瞬間まで――。

再び、ヴィーナス。

首を失った男の死体は、床に倒れた後も、血を流し続けていた。血溜まりが広がり、矢部の足元に到達する。

矢部はまず、顔を袖で拭った。血液を拭く意味合いもあったが、これが夢か現実かの確認の為でもある。

現実であつた。

次に、自分の拳を見つめる。まさか、このようなパンチ力がこの拳に存在していたとは――違う。そんな筈はない。何だ？ 一体、何が起こつたというのだ？

「おいおい、どうしたんだよ。ほら、新しいお客様来てるって。あれ？ お宅ら吸血鬼？ 悪いけど、うちは吸血鬼お断り……」

店長らしき男の声が入口の方から聞こえてきた。矢部が振り向いた時には、すでに店長の首も無くなっていた。

店長が倒れても、今度は誰も悲鳴を上げなかった。ボーイもリカ

も、他のキャバクラ嬢達も、客も、皆、一様に顔をひきつらせ、時間が止まったとでも言うように、表情を固定させている。

店長の死体を、吸血鬼と思われる二人組の男が見下ろしていた。

二人とも、黒のタキシードにオールバックの銀髪という格好だった。顔が蒼白くなければ、あるいは品のいいボーイにも見えたかもしれない。

「《前菜はどっち食べる?》」

「《どっちも不味そうだ。やはり、先に女を食おう》」

「《焦るなよ。不味いものを先に食った方が、ご馳走の味に引き立つだろ》」

「《成る程。それもそうだ。それじゃ、俺はこいつを貰おうか》」

二人は何やら聞いた事のない言葉を喋っていた。矢部にも、店内にいる人間にも、それがワラキアの吸血鬼言語である事など解る訳がない。

吸血鬼の片割れが矢部の元に歩み寄り、しゃがみ込んで、床にある顔無しの血を啜った。すると、信じられない事に、血溜まりが綺麗に消えた。機能性の高い掃除機の如く、そこには何も残らなかった。

もう片方の吸血鬼は、顔無し店長の首に、そのままかぶりついている。誰かの金切り声が聞こえた。先程、男からセクハラを受けていた女のものだった。

矢部は足元で血を啜っている吸血鬼を呆然と見つめている。何が起こっているのだろう。何かしなければならなかったが、言葉が頭に浮かばない。

吸血鬼は二人とも、叫んだ女の方に目を向けた。女は泣いていた。股間部分の衣服が濡れているのが解った。

「《漏らしてるぜ、この女》」

「《ああ。汚いな。それだけにいたぶり甲斐もある》」

吸血鬼達は目を合わせると、女の前に立ちふさがった。女は座ったまま、焦点の合わない目で虚空を見つめている。口が時折、パクパクと動いた。

左の吸血鬼が、女の左腕を、右の吸血鬼が女の右腕をそれぞれ片手で掴んだ。

「《一、二の、三でいこうか》」

勢いよく、女の腕を引つ張る吸血鬼。まるで、女は人間ではなくマネキン人形であつたかと錯覚する程に、簡単に女の腕は《外れた》。左右から赤い水を吹き出すマネキンは、その表情を醜く歪め、恐らくは絶叫しようとしたのか、口を大きく開けたまま気を失った。

矢部は相変わらずその光景を見つめていた。心臓がとてつもないスピードで動いている。深呼吸をしようとしたが、それも叶わなかった。鼓動が最高潮に達すると同時に、矢部のあらゆる筋肉は、完全に硬直してしまっていた。

永遠と思い違える程の刹那の後、悪臭が鼻に届いてきた。

「《くせえ。糞まで漏らしやがった》」

「《そそれないな。さっさと殺して、さっきの死体を片付けよう》」

左側の吸血鬼の腕が、ノコギリのようにギザギザした刃物に変わる。

「《まあそう言っな。ちょっと遊ぼうぜ》」

「《ヤマシ様がお怒りになる》」

「《大丈夫だよ。ほんのちょっと》」

ノコギリが女の喉に触れると、女の意識が再び蘇る。

「《起きたぜ。糞女。次は何を漏らしてくれんだ？》」

ノコギリが、女の喉元に触れたまま、左方向に移動した。今度は、噴水ではなく、なめこ汁の入ったビニールのパックを裂いたように、ドロドロとした血液がノコギリを汚した。

鈍い切れ味だった。女はようやく絶叫した。肩が僅かに上がったように見えた。腕が亡くなった事を忘れて、喉を押さえようとしたのだろうか。

さらにもう一度、右方向にノコギリがスライドする。絶叫ー声

は聞こえなかった。喉元から、ヒュウヒュウと、笛のような音が聞こえてきただけだ。

女の顔は、人間らしさを失っていた。血の気、生気を失った顔色。眼は本来の大きさを遙かに上回って肥大し、開いた口の端が吊り上げって、不気味な笑顔を作り出した。すでに死んでいるのかもしれない。

吸血鬼は、木こりの如く、その所行を繰り返す。やがて、女の首は、鮮血と共に床に転がり落ちた。

転がった顔。女の眼が、矢部を見つめていた。幸いにも、それで矢部は我に返った。圧倒的な恐怖が、ようやく矢部に危険信号を送る事に成功した。

二人の吸血鬼は、満足したように笑うと、再び《持ち場》に戻った。片割れは矢部の足元の死体を、喰い始めていた。肩に牙を突き立て、そのまま咬みちぎる。フライドチキンでも頬張っているように見えた。何故、こんな事を？何故俺達は襲われている？答える者がいない疑問。

矢部は、ゆっくりと振り向いた。リカーン震えている。歯がカチカチぶつかる音が聞こえた。

何かが芽生えた。何かが何なのかを形容する語彙が、一瞬遅れて矢部の脳内に宿る。

リカを守れー！。

同時に、恐怖に反抗する為か、矢部の中に怒りの炎が燃え始めて

いた。こいつら、愛子をこんな風に殺しやがったのかー！。愛子の死体が、愛子の死に顔が首だけになった女にダブる。

ぶっ殺してやるー！。

そして、リ力を守り抜く。あるいは、今度こそ愛子を救い出す。

怒りの炎は、その温度が上昇する度に、不思議と矢部の頭を冷やしていった。

どうする。どうやったら奴らを殺してここから逃げれるー？

下手に動くのは得策とは思えない。

小田桐、力を貸してくれー！。

天啓ー！小田桐が願いを聞いたとでも言うかのように、矢部の頭に舞い降りる。記憶の奔流。森林公園で小田桐に助けられた。小田桐に謝罪しようとした。出来なかった。帰り際に吸血鬼の本を買ったー！。

【…よって、彼等に目立った弱点はないが…吸血の際に無防備になつてしまう事くらいだろう。…血を吸っている瞬間において…魔性炉を機能させる事が出来なくなり、注意力も散漫になつてしまう】

今なら、殺せる？

いや、逃げた方がいいのではないか。だが、いくら注意力散漫といえど、自分だけならともかく、リ力を連れ出すのは不可能だろう。今の彼女を簡単に動かせるとは思えない。

どうやって殺す？頭の中の、魔性炉が弱点であるのは解っている。しかし、素手では無理だ。さらに相手は二人もいる。気付いた頃にはあの世にいるくらい、迅速に一体ずつ殺さなければならぬ。

何か、何か武器はないだろうか。矢部はゆっくりとあたりを見回す。厨房が見えた。包丁くらいはあるだろうが、探している時間もない。

吸血鬼は腹を空かせた子供のように、死体をガツガツ食っている。矢部の足元にあった男の死体は、すでに下半身しかなかった。

焦燥感が体を駆ける。その時、ようやく矢部に光明が見えた。アイスピックが落ちている――恐らく、先程男がテーブルを叩いた時に転がったのだろう。

取りに行く――テーブルの下。吸血鬼のすぐ真横。

矢部には、もはや自身の死に対する恐怖は無かった。あるいは、恐怖は無いと言い聞かせていた。怖いのは、ここで死んで、リ力が殺される事だけだ――。

先程芽生えた意志を、決意に変えて、恐る恐る、矢部は一步目を踏み出した。

7、酷白

足音――消した。呼吸――止めた。先月、小田桐に助けられたあの夜を思い出す。

『息をするな。見つかる』

あれが、この状況にまで有効なアドバイスになろうとは。吸血鬼は、相変わらず死体を貪っていた。残っているのは左脚一本。

その惨状を横目に、矢部はなんとかテーブルの前までたどり着いた。気付かれてはいない。

ゆっくりと、膝を折る。屈んで、テーブルの下に手を伸ばした。息を飲む音――どこからか聞こえた。矢部が、これから何をしようとしているか気付いた人間のものだった。

手が震える。アイスピックを取った。微かな音。しかし気付かれはしない。

足裏に全神経を集中して、吸血鬼の背後に回った。アイスピックを見る。千枚通しと大差ない程細い針。こんなもので、吸血鬼を殺せるのだろうか。魔性炉を正解に貫く事が出来るだろうか。

運に委ねる他、方法は無かった。幸い、もう一人の吸血鬼はこちら程がつついてはいない。今なら間に合う。巡ってきている。運は、確実に矢部に巡ってきている。

矢部は両手でアイスピックを頭上に掲げた。一度だけ、息を吐き

出す。吸う。冷や汗――額から滴り落ちそうだった。

後頭部目掛け、思い切り振り下ろした。鈍い感触。吸血鬼の震え。アイスピックを通して、矢部の体中に伝わった。

アイスピックを押し付ける。今度は、レンズが割れたような手応えがあった。それが魔性炉を貫いた証拠であると確信した矢部は、後ろから吸血鬼の口に手を回し、塞いだ。

叫ばしてなどやるものか――。

抵抗の痕跡すら見られない。吸血鬼は、矢部の腕の中で死んだ。

虫や昆虫以外の生物を殺したのは初めてだ。だが、余韻に浸るわけにもいかない。もう一人、残っている。矢部が振り向こうとしたその時――。

それより早く、破滅的な視線を感じる。振り向いた。店長の死体に口をつけたまま、もう一人の吸血鬼がこちらを見ていた。

しかし、吸血鬼の方も目を丸くしていた。まさか、人間が同胞を殺せるなど、想像もしていなかったようだ。

膠着――駄目だ。止まるな。走れ。殺せ。

走った。吸血鬼の能天目掛け、渾身の一撃を試みた。右手に握ったアイスピックを振り下ろす。

右腕を掴まれた。信じられない握力だった。

吸血鬼はそのまま立ち上がり、矢部に憎悪の眼差しを向けた。

「《よくも、同胞を殺したな》」

「ちくしょう！」

腹に拳を食らった。宙に舞い上がり、テーブルに落下する。グラスを下敷きにした。グラスが割れた。破片が、背中に突き刺さったが、腹の痛みが、そんなありふれた苦痛などかき消してしまった。

吐血――内蔵がやられたのが解った。

「矢部さん！」

リカの声――後ろから聞こえた。ここは先程自分が座っていたテーブルだったらしい。

リカが、テーブルの上の矢部を抱き起こした。

「大丈夫ですか？」

リカが泣いていた。この非常時にも関わらず、自分の為に涙を流すリカと、自分の危険が彼女を動かした事が嬉しく思えた。矢部の上体は、彼女の胸に背中を預けていた。抱き締められていた。痛みを忘れさせるほど、心地良い温もりを感じる。彼女は、矢部の肩に顔を埋めてさらに泣く。恐怖で混乱しているんだろうか。

「リカ、ちゃん、逃げろ」

左脚に激痛。リカの悲鳴。同時に金属がぶつかる音。左脚が、膝

のあたりからテーブルもろとも吸血鬼に切られたようだ。

吸血鬼は、右腕を日本刀らしい刃に変えていた。

「《こういうのは、彼ほど好みではない。しかし、貴様は、ゆつくりと、あらゆる残虐な方法を試しながら殺してやる》」

店内に再び悲鳴が轟いた。ここには数人の人間が残っている。誰も逃げ出そうとしなかった。誰も矢部を助け出そうとはしなかった。

左脚の痛みが緩慢になっていく。代わりに、悪寒が矢部の体中に鳥肌となって現れ始めた。

右脚に激痛。意識が飛びそうだった。リカがいなければ、間違はなく飛んでいた。

矢部は両脚を失った。

リカは矢部を抱き締めた。さらにきつく抱き締めた。《愛子》に抱き締められながら死ぬなら、いかに残酷で苦痛を伴っても、悪くないのではないかとすら思い始めた。

《愛子》の泣き声が聞こえた――やはり死ぬのは駄目だと思い直した。

生に執着しようとする。痛みが膨れ上がった。精神と肉体が生と死を引っ張りあっていた。

吸血鬼は日本刀を腕に戻す。視線がリカに移動した。不気味な笑みが垣間見えた。嫌な予感がした。

「《邪魔だな。女。先にあっさり殺してやるう》」

矢部はその言葉の意味を理解出来ない。しかし、吸血鬼が何をしようとしているのかは簡単に理解出来た。

「おい、こら、てめえ、俺に、ム力ついてんだろが、俺から、殺せよ」

残りの力を絞って、腕をあげ、指先でファックサインを送る。言葉の意図は、全てこのサインに集約されていた。

腹に痛みー殴られた。破裂した内蔵が口から出るような気がした。

矢部は死を悟る。これ以上の肉体の崩壊は精神力でカバー出来る領域ではなかった。

「りがちゃん、にげ…ば」

内蔵から喉の方向へ血液や胃液が逆流して、上手く言葉を持ってこない。次が最後の言葉になりそうだった。

「おで、りがちゃんぐあ、すぎ」

言い切った。泡状の血液が矢部の口から吹き出した。

吸血鬼が、もう一度矢部の腹を抉ろうとしていた。死ぬ。次で矢部は死ぬ。確信していた。拳が放たれた。矢部の視界がスローモーションになった。

リ力ちゃん、ごめんな。愛子、悪い。守れなかった。小田桐、当たり前散らしてすまなかった。

ありとあらゆるものに謝った。そうすれば、天国に逝けると思った。

拳が、吸い込まれるように近付いてくる。あと三十センチ、二十センチ、十センチー！。

五センチで止まった。矢部は自分が死んだのではないかと思った。ところが、ポタポタと何か赤い滴が吸血鬼の額から零れてくるのが見えたので、矢部はまだ生きている事を悟った。

よく見れば、吸血鬼の額から、細い針が突き出ているのが判る。実際は後頭部から突き刺さっているのだが、それに気が付いたのは少し後だった。

細い針が縮んでいく。吸血鬼は、そのまま後ろに倒れた。そしてそのさらに後ろに、初老の男が人差し指をこちらに向けて立っているのが見えた。

「間に合ったようですね」

男は、柳沢だった。

8、ドラキュラ到着

「説明して、もらえませんか？」

生き残ったキャバクラ嬢やボーイ達、そしてリカと共に、柳沢を囲むようにして矢部は言った。

疑問――何故、俺達は吸血鬼に襲われたのか。

疑問――何故、損なった両脚が柳沢の血液で再び結合出来たのか、破損した内蔵が修復されたのか。

疑問――何故、柳沢に吸血鬼を殺す事が出来たのか。

柳沢が矢部を救う為に、針に変えた指によって腕に空けた穴を修復していた。元々小さな傷口であったが、目に見えるスピードで塞がるというのは、《人間》の常識を越えている。

「あなたが吸血鬼に襲われた事に、理由なんてありません。たまたまここにいたから、ですよ。たまたまここにいたあなた達を彼等が狙っただけです」

「保護法ですか。保護法のストレス発散に俺達が使われたって事ですか」

「いえいえ、彼等は日本人じゃありませんから。そんなものは無関係です」

柳沢は背広の内ポケットから、煙草を取り出し、口にくわえた。

「火を貸してもらえませんか？」

こんな時にまで、キャバクラ嬢の習性だろうか。コメンテーターとしてテレビでよく見掛ける柳沢に取り入ろうと思ったのかもしれない。媚びた目つきで、三人が同時に、小さな火を手で庇うようにして柳沢に差し出した。リ力は含まれていない。

「これはどうも」

柳沢も気を良くしたのか、全ての火に煙草を晒した。

「もう、お判りでしょうが、私は吸血鬼なんです」

矢部やリ力にはある程度予想出来た答えだ。しかし、他の人間は違った。皆、頭を抱えて震えていたのだ。助かった事に気が付いたのは、柳沢が矢部の治療を終えた後である。

火を差し出したキャバクラ嬢達の視線が侮蔑に変わる。柳沢は苦笑した。

「でも、柳沢さんの顔は蒼白くもないし、牙も見えないでしょう」

何よりも不可解な問い。矢部は柳沢の答えを待った。

「それについては《後》で話しましょう。とにかく、私は吸血鬼です。もつとも、あくまで端くれですがね。矢部さんの脚を繋ぎ合わせる事が出来たのも、切断面が綺麗だったからです。そうでなく、私の微少な再生能力では無理でした」

あ、吸血鬼の血には他人の傷を癒やす力もあるんです、と柳沢は付け加えた。

同時刻。神の家上空。

「奴は、我々から祈る場所を奪ったか」

一万の軍勢を背後に控え、ドラキュラは炭になった神の家を見下ろしていた。漆黒のマントが時折夜風に晒されて、不気味に闇に揺らめいていた。

相変わらず、とんでもねえ方だなー。体の修復を終えたヤマシはそのように思う。

ドラキュラは宙に浮いている。それ自体に驚異はない。ヤマシを始め、ワラキアの吸血鬼は皆、背骨で翼を具現出来るのだから。

《ドラキュラには、翼がない》

生身の体で浮遊しているのだ。確かに魔性の力は感じるが、特に何かを具現している様子はなかった。

「あの男はどうした」

「殺りましたよ。海に落っこちました」

ヤマシの首から下を、ドラキュラは丹念に眺めた。

衣服はソウクに斬られた体の部位と共に海に落ちている。わずか

な布切れが、ナプキンのように首に掛かっているのを除けば、ヤマシは全裸だった。

「我の前にそのような姿を見せる事は、本来なら万死に値するが、大義の後だ。寛大に許そう」

無表情で掌をヤマシにかざすドラキュラ。次の瞬間には、ヤマシは黒のタキシードを身に纏っていた。

おいおい、どうすりゃそんな魔法みたいな真似が出来んだ？あやかりたいぜー！。

「ブラド様は一緒じゃないんすか？」

「ブラドなら、汝が放った吸血鬼達の統括に向かった。ヤマシ。汝の判断は過ちではない。が、次からは我の勅命なしに勝手な事をするな」

瞳が朱みを増していく。ドラキュラが怒っている証拠だ。ヤマシは息を飲んで頭を下げた。

仕切りなしに雑魚を放つと、ロクな事になんねえと思ってんのか。心配しすぎだぜ。ソウクのいない日本に、他にどんな脅威があんだー！。

「申し訳ありませんでした。俺も今から向かいます。伯爵様は、どうします？」

「我は祈る」

唐突な答えに、ヤマシは思わず怪訝な表情をしてしまった。すぐさま平静を繕って、もう一度問い直す。

「祈るって…伯爵様程の方が一体何に祈るんです？」

「神に決まっているだろう。さあ行け。遊んでいる時間はない。夜明けまでにこの国の人間を一人残らず殺すのだ」

そう言うと、ドラキュラは平行に両腕を伸ばした。どこか、十字架を象徴しているようにも見える。

これ以上の質問はドラキュラの機嫌をそこねる事になりそうなので、ヤマシは翼をはためかせ、彼方へと飛び去った。呼応するように、一万の吸血鬼達が四方に散る。

全ての人間にとって、絶望の夜が訪れた。

祈るだってよ。神？そりゃ、あんたの事じゃねえのかい。伯爵様よー。

渋谷までの数十キロの飛翔にかかる時間は約五分。ヤマシがそのような事を考えている内に、人気のない都市の灯りと甘美な血の匂いは、すぐそこまで近付いていた。

9、救うべき者、捨てるべき者

先程まで、恐怖に顔を上げる事も出来なかった人間達が、柳沢に對する不信を口々にこぼしていた。不信はやがて憎悪に変わっていく。

あいつも私達を殺す気よー。

そうだ。そうに決まってるー。

畜生。吸血鬼にこんないいようにされるなんてー。

こいつ端くれらしいわよ。私達でも殺せるんじゃないー。

リカが矢部の手を握る。二人の吸血鬼は死んだ。当面の危機は去ったというのに、リカはまだ何かに怯えているようだ。

何かー言わずもがな、人間達。人間達の黒い憎悪。

「やれやれ。居心地が悪くなってきましたな。行きましようか、矢部さん」

「行くつて、何処へです？」

「谷口さんの所ですよ」

社長の？何故？矢部が口に出そうとすると、柳沢は適当な灰皿に煙草を押し付けて、それから最後の煙を吐き出した。

「危険なんですよ。外は吸血鬼で溢れかえってる。彼らは、この国の人間を一人残らず殺す気なんです」

どよめき。店中がパニックになる。

「既に、渋谷の街は血の海です。この店の惨状が、天国に思えるくらいにね」

柳沢の言っている事を理解するのは困難だった。渋谷が血の海？まさか、さっきまであんなに人で溢れかえっていたじゃないか。援交少女が地べたに座って、ガングロ男がガングロ女を軟派する。ありふれた光景がクリスマスモードで行われていたじゃないかー。

「矢部さんが恐らくここにいるだろうという事は同僚の方から聞いていましたがね、そのせいで着くのが遅れてしまったんです」

そういえば、柳沢はそもそもここへ何しに来たんだ？矢部は聞いた。

「上質なドキュメンタリーは、綿密な取材の上に成り立つんですよ。私の次作は小田桐ソウクが主役ですが、矢部さんや谷口さんにも、名脇役として出演して欲しいんです。この方、亡くなった奥さんに似ているんですってね」

顎をリカに向けてしゃくる柳沢。矢部はあっけに取られて言葉を失う。リカにそれを伝えた事は無かった。伝える気も無かった。

「奥様が、いらっしゃったのですか？」

リカの視線――手に汗が滲んだ。

「おや、これは無粋でしたかな」

無粋どころではなかったが、今は怒る余裕もない。矢部は冷静になろうとした。考えるべきは、別の事だ。

「一度に、色々起こり過ぎて、正直わけわかりません。とにかく、外がヤバいんですね？社長が危ないんですね？」

まくしたてるように聞いた。柳沢が頷いた。

「助けたい奴がたくさんいます。だけど、社長は動けない。優先しなきゃならない。聞きたい事、めっちゃくちゃあります。社長助けたら、全部教えてもらえますか？」

「もちろんですよ。墓まで持っていこうと思った秘密ですが、ワラキア国の吸血鬼がこんな暴挙に出たからにはそれも叶わないでしょう。全て教えます」

「行きます。連れてってください。リ力ちゃん、この街は危険らしい。一緒に行かないか」

ちよつと！私達はどうなるのー！キャバクラ嬢の一人が言った。

そうよ。外がそんな事になってるなら、ここだって危ないじゃない！

助けなさいよ！

柳沢はため息をついた。

「私はあなた達を殺そうとしてるんじゃないんですか？」

答える者はいなかった。何かが、矛盾していると矢部は思った。

「私が用があるのは矢部さんだけです。ああ、そちらのリカさんにも来ていただけると助かりますが。あなた達には、特に来て欲しくありませんね。私の車は五人が定員ですし」

五人が定員――乗れるのは二人。

矢部は他のキャバクラ嬢やボーイを助けるように柳沢に要請した。柳沢は首を振った。

「無理ですよ。そもそも、それには何のメリットもない。リスクだけです。人が多ければ多いほど、吸血鬼の鼻は効きます」

ふざけんなよ助けるよ――キャバクラ嬢の叫び声。狂っているように聞こえた。

柳沢が人間なら媚び、吸血鬼なら蔑み、自分が危険なら助けを乞う。それが矢部の感じた矛盾だった。矢部も確かに、かつて吸血鬼という理由で小田桐を蔑んだが、少なくともそれには一貫性というものがあった。彼女らや彼らには、それすら欠如しているのだ。

「さあ、グズグズしていると見つかりますよ。急ぎましょう」

柳沢の催促。矢部は迷う。リカを見た。助けてあげてください。そんな眼差しを感じた。

「柳沢さん、何とかならないんすか？」

言葉遣いが普段のものに戻る。焦っていた。

「矢部さん。助けられるものなんて、初めから限られてるんですよ。現実を考えてください。今、あなたが守りたいのは誰ですか？手を握っているリカさんでしょう。意識の戻らない谷口さんでしょう。ここにいる人間全てを救うという事は、結果的に二人を危険に晒す原因になるんですよ」

認めたくはないが、正論だった。キャバクラ嬢の一人が、矢部の胸元につかみかかってきた。

お願い、助けて、何でもする、エッチでも、稼いだお金貢ぐのも何でもするから、私を見捨てないでー媚びるような目。人間と認識されていた柳沢に向けられたものと同一。

てめえ、一人だけ抜け駆けかよ、ねえ私の方が巧いよ、舌使いも締めりもいいよ、この子より指名もあるから稼ぎもいいよ、だから私を助けてーもう一人が押しのけて言った。

私だよ、私が一番だよ、尽くすよ、あなたの玩具になるよ、だから私を助けてーさらにもう一人が押しのける。

三人が矢部を引っ張りあっていた。値引きされたブランドにでもなった気分だ。ボーイ達はその後ろで俯いている。すでに、助からない事を悟っているようだ。

矢部は考えるのが嫌になった。リカはさらに強く、矢部の手を握り締める。

「どうしても彼女達を救いたいというのなら、矢部さんお一人でどうぞ。申し訳ありませんが、さっきの話は無かった事にしてもらいます。登場人物が一人減るのは嘆かわしい事ですがね」

柳沢「――冷酷と思った。冷酷に冷酷であると思った。しかし、柳沢を責める言葉が見つからない。

サバイバル。ここはもう、矢部の知っている日本ではないのだと思った。信じられない事だが、全ての事柄は、この一時間程度で、人間にとって致命的に変化してしまったらしい。

小田桐に会いたい――小田桐はどこへ行った？小田桐なら、答えを知っているような気がした。

リカの手を握り返す。

「行きましょう。柳沢さん」

てめえ見殺しかよお願い捨てないでお前らみんなくたばれ。

三人のキャバクラ嬢が同時に叫ぶ。

「彼女達を救えないなら、私も、ここへ残ります」

リカが言う。リカの気持ちは解った。今は尊重出来ないだけの話だ。

柳沢が出口へ向かう。三人のキャバクラ嬢が柳沢にすがりつく。一人は腰、残りの二人は両脚。

見捨てないで助ける人でなし。

柳沢は上に向かって人差し指を針に具現する。天井に突き刺さった。

「これ以上は、私もある程度の暴力に訴えなければなりません。残酷に殺されるのが嫌でしたら、今、私が殺して差し上げますよ」

三人は離れる。矢部はリカを引っ張って店を出ようとする柳沢に続いた。

「離してください！」

聞く耳を持たない。

ちくしょう、何でリカだけ助かるんだよ！

リカは三人に振り返る。そこには三匹の鬼がいるだけだった。

死んじゃえよくたばれ殺されろー呪詛がリカを蝕んだ。リカは自由な方の手で片耳だけ塞ぐ。

矢部は振り返らずに、三匹に叫んだ。

「生きたきや、なるべく息をするな！」

三匹には届かなかった。呪われるというニュアンスの言葉だけが返ってくる。

無力である自分を責めるのは、後回しにする事にした。

柳沢は言う。

「覚悟してください。今は、外が本当の地獄です」

覚悟を腹に決める猶予は、矢部に与えられていなかった。

10、追憶――父と母 前編

海――荒れている。直径二百メートル程の大渦が、周辺に生息していた魚達を飲み込んでいく。

ドラキュラは大渦の上空に浮遊していた。先程までと変わらず、体で十字架を型どり、懸命に何かに祈っている。

ソウクは大渦の下、海底に背中を預けていた。

呪詛――アズサのもの。もしくはソウクが殺した吸血鬼達のもの。あるいはその両方。異口同音に、それらはソウクに要請する。

死ね。

ソウクは目を開ける。海水が回っているようだ。亡霊が回っているようにも見える。

死ね。くたばれ。よくも殺しやがったな。吸血鬼のミソツカス。亡霊が言う。

『愚かなり』

ドラキュラの声が混じった。愚かなり――。

『何の為に我を殺すと言うのだ。汝が愛した人間の為か、それとも単なる近親憎悪か』

ソウクは問い掛けに答えようと思った。復讐の為だ。

『未来の為さ』

答えたのはソウクではなかった。父の声が聞こえた。声は、魔性
炉から響いていた。

『くだらん。汝は大局を理解していない。未来とは何だ？』

『俺のガキや、ガキ世代の連中が人間と手を取って暮らしていく
未来だよ。それにはあんたが邪魔なんだ』

景色がぼやけ、波状に揺れ動き始めた。暗転。ドラキュラが闇に
浮遊している。眼下にドラキュラ城。ここはワラキアだ。俺は、ワ
ラキアで何をしているー？

『そもそも我無くして、この世界に未来はない』

『あんたの傲慢に付き合うのは飽きたぜ。俺も、人間達もな。見
ろよ、満月が綺麗だ。死ぬにはいい夜じゃねえか』

口が勝手に動いた。右腕が剣に、左腕が盾に変わる。凄まじい魔
性のカーー懐かしい魔性の力。

この体は親父のものだ。この世界は、親父のー？

現象の理由も、それが何を意味しているのかも理解出来ない。視
界がドラキュラに吸い込まれてゆく。違う。近付いているのはソウ
クの方だった。

剣を振り上げる。斬撃。閃光。暗転――。

形容しがたい事態だった。ソウクの意識を、何者かが背後からとてつもない力で引っ張っている。反射的に抗おうとしたが無駄だった。視界が、あっという間に遠ざかっていった。

次に見えたのは女の顔だった。覗きこむように、上からソウクを見つめている。頭の後ろに太ももの柔らかさを感じた。

『お目覚めですか』

女が口を開いた。化粧気はない。眉は整っていた。紺色の和服。芸者だろうか。

ソウクは意志と関係なく上体を起こした。見知らぬ場所。畳の部屋だ。化粧台と思われる机がいくつか並んでいる。鏡に映った自分の顔――父、ハクアのものだった。

『嫌な夢を見た』

『どんな夢です？』

『俺に似た男が、お前に似た女をとんでもない方法で殺す夢だよ』

『とんでもない方法？』

『言うのとはばかられる方法さ』

ソウク、あるいはハクアは女の肩を抱いた。女はそのまま、顔を

ハクアの肩に預ける。

『怖えよ。怖くてたまらないんだ』

『ハクア様も、何かを怖れるという事がおありになるんですね』

『おかしいか、縁^{ゆかり}』

縁――母の名前だった。小田桐縁。

（俺は、一体何を見ているんだ？）

『安心しました。怖れるという事は、心がある証明になりますものね』

『故郷の吸血鬼が騒いでる。俺は戦わなくちゃならない。お前達、人間と』

沈黙――縁は左手をハクアの膝に置いた。

『震えています』

『言つたろう。怖えんだ』

『私を殺す事ですか』

『ああ。時々、お前の血が欲しくてたまらなくなる。自制心が粉々になりそうなんだ。親父は俺に言っていた。人間は犯すか殺す以外に使い道のない生き物だってな。実際、そうなんだろうと思ってたよ。俺の故郷じゃその考え方が当たり前なんだ』

ハクアは立ち上がる。

『俺はお前らで言うところの、皇族だ。城には教育係の爺さんがいてな。その爺さんが、俺に言うんだよ。《生き物の価値は、実際に自分で見てから決めるべきだ》。それに賛同した訳じゃない。だが、故郷は俺には狭すぎた。どっか、遠くへ行ってみたかったんだな。教育係の言葉を口実にして、俺は強引に城を飛び出した』

『それで、この国へ？』

『ああ。高い所から色んな大陸を見て回ったが、この国が、一番面白い形をしていた』

化粧台の上ー煙草が裸で二本置いてある。一本取って、口にくわえた。

人差し指が一瞬だけ炎に変わる。先端から煙が登った。

『ハクア様に出会うまでは、この世界に本当に魔法が存在していたなんて、思いもしませんでした』

『魔法じゃねえさ。魔性だよ、これは』

ハクアの笑顔ー吐き出した煙に隠された。

『生まれてからよ、この力が便利だと思った事はねえが、特に困る事はなかった。でもな、思うんだよ。こんな力さえなきゃ、俺は縁と、普通に暮らしていけるんじゃないかって』

縁は正座したまま、ハクアの横顔を眺めていた。視線は感じていたが、目を合わせようとはしなかった。

『でも、私はその力のお陰で、こうして元気でいられます。感謝していますよ』

『親父にバレたら勘当もんさ。人間の命を助けた吸血鬼なんてな』

『何故、助けてくださったんです？』

縁ー答えを知っている女の目だった。知っているが聞きたい。いじらしいとハクアは思う。ソウクにも、その気持ちは伝わってきた。

『野暮な事、聞くなよ』

『聞きたいんです。あなたの口から』

咳払い。煙草のせいではなかった。

『俺の故郷には女がない。俺の一族には女がない。これは話したよな？』

『はい』

『この国に降りて、俺は女っていう生き物を初めて見た。なんてこた無かったよ。ついてるかついてないかの違いだろ。そりゃ俺達から見たら、人間である事を除いても、確かに繊細だとは思っただけだな』

『まあ。随分と女性を馬鹿にした物言いですわ』

ソウクは昔、一度だけ父から母について聞かされた事がある。男尊女卑を徹底して嫌っていたらしい。時代が時代だ。男性中心社会は今も大して変わっていないが、この頃は遥かに露骨だった事だろう。恐らく、縁は『繊細』という部分に反応したはずだ。

『体力は確かに、男性にかなわないかもしれませんが、それで…』

僅かに縁の頬が紅潮したのが見えて、ハクアは苦笑した。最後の別れになるかもしれない時に、いつもと同じような類の喧嘩。縁らしい。

『怒るなよ。話は最後まで聞けって』

眼の奥に見えた怒りの炎は、ハクアの言葉で小さくなったものの、完全に消えた訳ではない。

『まあよ、それで、なんつつか、俺は女と話してみようと思ったんだよ。そうすりゃ少しは違いつてのが解ると思ったんだ。でもよ、言葉が通じねえだろ？面倒だから故郷の言葉で適当に話しかけてみたわけだ。そしたら叫ばれて逃げられるわ、軍服着た男達に、鬼畜なんたらとか言われながら追っかけられたりして大変だったけどよ』

『軍人を、殺したのですか？』

『いや。別段、そんな必要もねえかなと思ってよ。鉛玉で撃たれたって、俺には何ともねえし、それに教育係の言葉もあつたしな。あれを口実に出てきてんのに、いきなり殺しちゃ筋が合わねえだろ？』

筋——父の好きだった言葉。ソウクが通せなかったもの。

『でもまあ、言葉が通じねえくらいで鉄砲持ち出す生き物なんてくだらねえと思った。親父や周りの言うとおりの価値だって事も判ったし、外も大して面白くなかった。そろそろ帰ろうと思って海まで出向いた晩、あいつらに襲われてたお前を見つけたんだよ』

ハクアは回想する。ソウクにイメージが情景として現れる。

何故、俺はこんなものを見ている？俺以外の者の記憶を見ているんだ——ソウクは思う。

繋がっていると誰かが言う。全ての魔性炉は繋がっている——。

誰だ、とソウクは問う。

答えはない。目の前に、夜の砂浜が広がっていた。

11、追憶――父と母 中編

魔性を解放する。ハクアの背骨が肩を突き破り、金色の翼に変化した。空には満天の星が輝いて、夜の海を微小にだが明るくしていた。

最後にマシなものが見れたからよしとするか――。

空を翔ける為、右足に体重をかける。魔性の影響で足元から砂塵が舞った。

飛ばうとする――悲鳴が聞こえた。振り返る。

男二人が女一人を追いかけていた。男――以前ハクアを追った男と同じ服を着ている。軍人だった。女――紺色の着物。縁だった。

砂に足をとられて、縁は転ぶ。軍人二人は縁に覆い被さった。

距離は近いが、誰もハクアに気が付かなかった。縁も軍人も、それぞれがそれぞれの目的に無我夢中であつたのだ。

ハクアは眼を凝らす。軍人の顔は歪んでいた。それは恐らく笑顔であるように思えたが、吸血鬼であるハクアでさえ、このように歪んだ笑顔を見たことがなかった。

女の顔は怒っていた。怒りの中には恐怖も見受けられたが、あくまでそれは些細なものだった。

軍人の一人が倒れた縁の両手を押さえ、もう一人が縁の脚に腰を

落として、彼女の自由を完全に奪う。下方の軍人が縁の着物を強引に剥いだ。胸元がはだけ、左の乳房が露出する。

ハクアは、あの軍人達が縁（当然この時点でハクアは縁の名を知らない。あくまで記憶であり、あくまでソウクに伝わってくる想いである）を犯そうとしているのだと思った。

ハクアにとっての父、ソウクにとっての祖父であるブラドの言葉が頭によぎる。

人間など、犯すか殺す以外に使い道はないー。

以前からハクアは、犯すという事に少なからず興味を持っていた。ワラキアに死は確かに溢れている。奴隷として連れてこられた人間の男達。彼らは昼夜を問わず、石の塔を造らされていた。寒暖の激しさが彼らの消耗に拍車をかける。消耗品に過ぎない彼らは、次々に倒れ、次々に補充されていく。

ワラキアには女がない。以前にはいた。以前にいた女の数と同じだけ、ハクアの世代の吸血鬼がいた。

犯すとはどういう事なんだーこれが犯す。目の前に繰り広げられている光景が犯すという事。

軍人が縁の乳房を強引に揉みしだいた。叫びー悲鳴の名は屈辱。軍人達の笑顔は、相変わらず歪んでいる。いや、さらに歪みを増していた。

ハクアもまた、何か自分の中でどす黒い感情が芽生えてきているのが解った。気持ちさがざわめく。

それは、性的な興奮であつた。

あの女を犯してみたい。軍人ではなく、俺の手で犯してみたい――！。

しかし、それは同時に軍人の歪みと同化する危惧をハクアに与える。軍人達の歪んだ笑顔は、ハクアに対しても極めて不快な印象を与えていた。

相反する感情。縁はすでに下半身の衣服も剥ぎ取られていた。ズボンを下げる軍人。そそり立つ歪みの象徴。

くだらねえ――！。

何故か、この女にあれを入れさせてはならないような、予感めいた衝動に駆られる。

ハクアは歩き出す。砂を踏みしめる度、先程よりも高く砂塵が舞い上がった。

ハクアはまず、縁の腕を押さえていた軍人を蹴った。魔性は使わない。筋を気にしたというより、殺す事にすら値しない生き物に思えたからだ。

仰け反るようにして軍人は頭から砂浜に埋もれた。次は下の軍人。

『なんだ、なんだてめえ？その翼は？化け物？いや、貴様鬼畜……』

『《うるせえ。ワラキア語で喋れ》』

一割以下まで威力を絞った拳が、軍人の頬にめり込んだ。奥歯が折れる感触。軍人の眼球が上下に揺れ、完全な白目になると、仰向けに倒れた。

縁は啞然とした表情をしていたが、ひとまず起き上がり、顔を赤らめて、乱れた衣服を整えた。

『あの、ありがとうございます…』

『《ああ？なんだって？》』

『私、この近くで舞子をやっております。このお二人には、以前から眼をかけて頂いていたのですが、今日はしこたま飲んでおられて、私が店を出ると…』

ハクアは両手を前に出した。

『《待てつて。言葉が解んねえんだ。そんな一気に喋られてもよ…》』

僅かに怪訝そうな表情をした後、縁は右拳で左の掌を軽く叩いた。

『あ、ごめんなさい。異国の方ですか？そういえば、翼が生えておられますものね。けれど、米兵には見えませんし…』

両肩に縁の視線を感じて、ハクアは翼を元に戻した。それで、縁はようやく目を丸くする。

『魔法が、魔法が使えるのですか?!』

『《意味がわかんねえ。帰るか》』

溜め息をついて、ハクアは振り返り、再び海を目指した。右腕が引つ張られる――縁が困ったような顔でハクアを見ていた。

『何か、お礼をしなければなりませんし、それに……』

縁の視線――倒れている軍人に移った。

それが何を意味しているのか、ハクアはしばらく解らなかったが、縁が軍人の顔を心配そうに覗き込んでいるのを見ている内に、どうやら軍人二人の身を案じているのであるらしい事に気付く。

訳わかんねえ。自分を襲った連中が気になるのかよ――？

ハクアは苦笑する。とことんまで、人間とはくだらない生き物であると感じた。しかし、縁のそういうくだらなさ、ある種爽快に思えたのも事実だった。

少なくとも、ワラキアに《くだらない》ものはない。ワラキアにはこういう種類の矛盾がないのだ。探求心――あるいは、また何か別のものがハクアに芽生えた。

ハクアは右腕を噛みちぎり、血液を軍人の顔に振り掛けた。腫れた軍人の頬が、みるみるうちに回復していく。

『《もう一人は、別に平気だな》』

胸元を掴まれる――縁がハクアを見上げていた。その眼は、キラ

キラと輝いている。

『やっぱり、魔法が使えるんですね?!』

『《だから、何を言ってるか解らねえって》』

『来てください！見て欲しい人がいるんです！』

縁はハクアの手を握ると、海岸に背を向け走り出した。

『《おいおい、どうなってやがる?》』

つられて走り出すハクア。不思議と不快感は無かった。振り払える手を、振り払わない事が何よりの証拠だった。

走りながら、縁は首だけで振り向き、指を自分の顔に向けて叫ぶように言った。

『申し遅れました。私、縁といいます。解りますか?ユ、カ、リです』

さすがに、自己紹介である事くらいはハクアにも伝わる。縁の指が、今度はハクアの顔を指した。

『あなたは?』

答えるべきか迷ったーだが、言葉が口をついて出た。

『《ハクアだ》』

ソウクは父と母の出会いの記憶に、自分とアズサの出会いを重ねていた。全てが同じではない。むしろ、相違点の方が遥かに多い。しかしそれでも、何かが繋がっていた。

また、誰かの声が聞こえた。

全ての魔性炉は、繋がっているー！。

12、追憶――父と母 後編

肺をやられてやがるな――。

ハクアは縁に連れてこられた小さな家の小さな居間で、薄い布団を被って寝ている老人を眺めていた。縁は正座で、老人の下世話をしている。

てめえで小便すら出来ねえようじゃ、この爺さんも長くねえ――。

『この人、父なんです』

手拭いを湯の入った桶に浸し、きつく絞った後で縁は言った。

『…ごめんなさい、言葉、解らないんですよ？ええと、ハクア様…』

名前を言われて初めて、ハクアは先程の言葉が自分に向けられたものである事に気が付いた。特に断らず、床に腰を下ろしてあぐらをかく。

『病気なんです。しかるべきお薬を飲めば助かるらしいんですが、お金が無くて…。私も必死に働いているんですが…借金もあって…』

縁の表情が次第に陰っていく。ハクアはそれを見て、たまらなくいたたまれない気持ちになった。

なんだってんだ――？

『父の借金なのですが、少し怖い筋の方にお借りしていたもので、このような状況でも、待ってくれないのです』

縁が視線をハクアに移す。何かを懇願しているような眼差しだった。

『《この爺さんを、俺に助けさせようってのか？》』

縁は表情を変えずに頷いた。ハクアは驚きを隠せない。言葉が通じたと言うのか？

体勢もハクアに向けて、縁は土下座する。

『お願いします。ハクア様がもし、本当に魔法を使えるのであれば、どうか父を助けてあげてください…』

頭を床につけたまま、縁は動こうとしない。

くそつたれ、俺はどうしちゃったんだ？胸が、胸の奥がチリチリしやがる。この女に、土下座なんてさせたくねえー何故だ？

ハクアは立ち上がり、再び老人の顔を覗き込んだ。咳、吐血。今夜死んでも不思議ではなさそうだ。

『父さん！』

老人に駆け寄り、体をさする縁ー眼にはうつすらと涙が滲んでいる。

吸血鬼の血の力は外傷にはよく効くが、病となるとそうはいかな

い。早い段階ならそれでも何とか事足りるが、このように末期の症状では、かなり膨大な魔性の力を使うしかない。

人間の血が必要だった。問題は、それをどうやって縁に伝えるかである。

おいおい、爺さん助ける事前提で俺はモノを考えてんのか。ヤキが回ったもんだぜー！。

強引に血を啜れば話は早い。しかし、ハクアはどうしても踏み切る事が出来なかった。この女の血は吸いたい。先程もそう思った。だが、それには合意が、女の許可が必要に思われたのだ。

くそー！。

指を細い刃に変え、腕に小さな傷をつくる。血が滴る。縁に差し出した。

『助けて頂けるのですね？ありがとうございます！』

縁の歡喜に、ハクアは首を横に振った。悲痛な表情に戻る。傷口に指を差し、縁にもう一度差し出す。

『血、ですか？』

チーーこれが血液を表す日本語だと悟る。

『チ』

ハクアは呟くように言う。縁の顔に指を差し、さらにもう一度。

『チ』

今度は手招き。お前の血を俺にくれ。そうすれば爺さんは助かる――の意思表示。

『私の血が必要なのですか？』

通じたのだろうか。とにかく頷く。すると、縁は裾をまくり、細い腕を露わにした。

『いくらでも使ってください。父は一人で、私を育てあげてくれたんです』

縁の腕を掴む。少し力を入れれば、千切れてしまいそうだ。牙を突き立てた。縁が目を瞑る。唇を噛んでいる。

血を吸う――これ程美味い血を吸うのは初めてだった。恍惚する――恍惚するなどと自分に命令する。この女から必要以上に血を吸うな。

魔性の力が格段に上がる。老人に跨るようにして立ち、ハクアは深呼吸した。頭の中で、手順を復習する。

まず胸を裂き、傷んだ肺を取り外す。次に血を滴らせ、新しい肺に具現する。そして傷口を塞ぐ。一瞬で行わなければ、老人は死ぬ。

大丈夫だ――言い聞かせる。血の力を得た俺に、出来ぬ事は何もない――。

ハクアは両手を鋭利な刃物に変え、一瞬の手術を試みた。暗転――

「ハクア様は、結局、何を仰りたいのです？」

景色は先程の畳の部屋に戻っている。

「つまりよ、その、だから、俺が言いてえのは、あの頃の俺が知らない女とか、そいつの親父を助けたりなんてする訳がねえのにしちゃったから、その……」

解っていた。縁がどんな言葉を望んでいるのかは、完全に解っていた。言えない理由は、照れくさいからではない。これから、ハクアは人間達と戦わなければならない。戦争しなければならないのだ。それを言ってしまったら、二度と縁の元を離れなくなるであろう自分が怖がったのだ。

縁と縁の父を助けた日から、二人に引き留められ、三年の月日を共に過ごした。日本語を覚えた。誰かを愛するという事を覚えた。この日々が永遠に続く事を願った。

ドラキュラの使いが、その日々に終止符を打った。戦争の為の召集。ドラキュラに次ぐ魔性を誇る第三世代のハクアは、最前線で戦わなければならない。

ドラキュラの意志に抗う――出来ない。縁達を殺す――出来ない。説得を試みる他、方法は無かった。例えば、零に近い可能性であっても。

「よく、わかんねえや。悪いな、縁」

ハクアは笑った。鏡に映ったハクアの笑顔は、ひきつっているようにも見える。

「ハクア様は卑怯です」

縁は怒った。

「私の気持ちを知っているのに、きちんとした答えすらくださいません。是か非かくらい、教えてくれてもいいじゃないですか」

卑怯――その通りだとハクアは思う。全てを犠牲にした上で、縁を愛しきる事の出来ない俺はとんでもない卑怯者だ――。

「わりい」

笑顔が消え、ハクアは俯いた。真っ直ぐな縁の視線を正視する事など出来そうにない。

「三年間、世話になったな」

出口に向かおうとするハクアに、縁は背後から抱きついた。

「行かないでください」

立ち止まる。背中が暖かい。この温もりを失いたくない。

「愛しています」

俺も愛している――言えなかった。

「何故、一度も抱いてくださらなかったのですか」

「お前は犯しちゃならねえと思った。あいつらからお前を助けた、あの夜からな。お前も、嫌いなんだろう？男にいいようにされんのは」

「ハクア様は勘違いなさってます」

抱き締める力が強くなる。縁の感情のエネルギーを確かに感じ取れた。

「力で女をねじ伏せられると思っている男性が嫌いなんです、私は。それにハクア様が私を抱いたとしても、犯すという意味にはありません。その場合、私達は交わるんです」

ハクアは横目に鏡を見た。縁は背中に顔を埋めている。

「言つたろ。そうだとしたって、もしガキが出来ちまったら、お前は……」

「私がそんな事を恐れるとでも、ハクア様は本気で思ってらっしゃるんですか？」

思っていない。恐れているのはハクアの方だった。

「それに、私は知っています。ハクア様がこの三年間、どれだけ自分を抑えてきたか」

胸が熱くなる。縁の父を救うために血を吸った影響か、あれ以来、ハクアは幸せの中においても、常に血に対する渴望を律してきた。気付かれる事はないと思っていた。気付かれていた。

「何で、解る？」

「それが、愛するという事です」

ハクアは刹那に三年間を振り返る。縁の手を握った。縁の肩を抱いた。縁の父に夫は自分しかないと言われた。

「縁…」

「はい」

「少しだけ待っていてくれ。俺は必ず、お前の所に帰ってくる」

答えはない。背中が熱が、さらに温度を上げるだけだ。

「…待っています」

声が震えていた。縁は泣いている。

やはり、俺に縁を殺す事なんざできはしねえ。止めてみせる。絶対に戦争を食い止めて、縁の元に戻ってくるー。

ハクアは決意し、ゆっくりと縁の体を離れた。

「ハクア様」

「何だ」

振り返らずに答える。

「今まで、私はお金の為に踊ってきました。だけど、今日は、今日だけは、ハクア様の為だけに舞います。私の事を忘れないでください。私の姿を、目に焼き付けておいてください」

何かが、はちきれそうになった。まだ、はちきらすわけにはいかなかった。

ソウクは思う。やはり、俺は親父と同じ道の上を歩いてきた。だが、おふくろが親父を憎む事などなかったはずだ。俺が生まれてきた事が何よりの証。俺と親父の何が違う？ 親父はどうやって、俺をおふくろに宿したと言っただー！。

未来を生きるソウクは、父が戦争を止められなかった事を知っている。この先はどうなる？ ソウクは先程から聞こえてくる何者かの声に答えを促した。

返事はなかった。答えは、暗転してソウクの目の前に映し出される。

13、追憶――吸血鬼戦争 前編

ドラキュラ城の会議室――。

床、円形の巨大な机、それを囲うシンプルなデザインの椅子は全て漆黒の大理石で造られていた。壁にはドラキュラの肖像画が数枚掛けられ、例えば本人が不在であろうと、絵の中の朱い眼が吸血鬼達に厳しい視線を送っている。窓からは湖畔が見渡せた。

ブラドは窓側の議長席に、ハクアはその対面に、他の隊長クラスの吸血鬼達はその左右にそれぞれ腰を降ろしていた。

「親父、伯爵様は？」

「会議中に親父はよさんかハクア。伯爵様は現在瞑想を行っており。本会議の全権は私に一任された」

ハクアは腕を組み、小さく舌打ちする。どうせなら直接ドラキュラに直訴したかったのだ。

「さて、早速だが本題に入る。我ら吸血鬼軍の日本侵攻の話だ。知つての通り、伯爵様以下私の世代の吸血鬼は日中に行動する事が出来ん。よって、実働部隊は諸君ら第三世代の者達に任せる事になる」

実働部隊――千強の軍勢。いくら吸血鬼といえど、少しばかり頼りない数ではないだろうか。

「諸君らの危惧は理解している。だからこそその侵攻である。今回

の最重要目的はあの国の女だ。さらい、犯し、新たな吸血鬼を育む。我らにとって唯一の弱点は数だからな。確かに、脆弱とはいえ、鼠が猫を咬む事も大いに有り得るだろう。己が実力を過信する事なく、任務を遂行して欲しい」

女が目的であるというのはハクアにとって初耳であつた。縁が誰かに犯されるー嫌なイメージ。何としても止めなければならぬ。

「女つて、どれだけさう気なんだ」

なるべく感情を込めずに言う。僅かでもブラドやドラキュラに縁の事を悟らせたくなかった。ブラドはハクアをギロリと睨む。たじろぐ事はない。ハクアの魔性はブラドを上回っている。それでも、ドラキュラには遠く及ばないのだが。

「会議中は敬語を使わんか。それから当たり前の質問もするな。あの国の女、全てに決まっているだろう」

縁を失うー最悪のイメージ。

特に言葉には出さなかったが、少しばかり顔に出てしまう。ブラドがそれを見過ごす訳もなかった。

「何か不都合があるのか」

「別に」

言うと同時に思案する。何か、いい方法はないだろうか。ドラキュラ達が日本侵攻を断念するに事足りる理由はないだろうか。

窓が揺れた。水滴が一気に付着する。今夜は嵐になりそうだ。

「これは伯爵様の崇高なる意志の元に発動された計画である。一切の妥協も許されぬ。心しておけ。何か質問のある者は？」

ハクアの右手に座っている赤髪の吸血鬼が手を上げた。

「伯爵様の崇高なる意志についてお伺いしたいのですが」

「何だ」

「我らには、その意志がいかなるものなのか、明確な説明がなされておりません。よろしければ、ブラド様より答えを頂けないでしょうか」

ブラドの目つきが変わる。先程ハクアに向けた睨みは、たしなめるという意味合いであったが、今回は明らかな殺気が混じっていた。

「伯爵様の意志を疑うというのか」

「いえ、そのような事は……」

瞬間、赤髪に向かってブラドが指を差した。先端が伸び、その過程で針に変わる。針は、赤髪の額を狙っていた。

ハクアは即座に右手を上げて赤髪を庇う。針はハクアの掌に突き刺さって止まった。

「何の真似だ、ハクア」

「いきり立つなよ親父。この戦争が無茶だつて事くらい、あんただつて解つてるだろうが。こいつの質問には俺も納得出来る。恐怖政治でいつまでも縛っておけると思つてんなら、その内足下すくわれるぜ」

吐き捨てた言葉。縁の事を思うと、ハクアも苛つきを隠せなかった。赤髪がハクアに感謝の意を小さな声で告げた。針はブラドの元へ戻っていく。

「お前は三年もの間日本にいたというが、どうやら何かに毒されたらしいな。伯爵様を疑う事は大罪である事を忘れたか」

「忘れてねえよ。だが、知る権利くらいはあるだろうが。実際戦うのは俺達なんだからよ」

ハクアに肯定的などよめきが訪れる。

確かにハクア様の仰る通りだー！。

私も、出来れば知りたいー！。

教えて頂けませんかー！。

期せずしてだが、風向きがハクアの方に流れ始めた。上手くいけばー希望が芽生える。

「貴様ら…」

両の拳で机を叩くブラド。どよめきはもはや、その程度ではかき消せない。

ハクアがいなければ、恐らく会議室内の吸血鬼はブラドによってねじ伏せられていただろう。ブラドはハクアを恐れていた。

「黙らんか！」

どよめき――僅かに小さくなるも、微小にはならない。

「観念して聞かせろよ。伯爵様の崇高な意志ってやつの正体をな」

「それは出来ん」

「ああ？」

「古の盟約にこうある。神の意志を知る事、これ即ち禁断の果実を食する事と同義なり」

古の盟約――ドラキュラとブラドの世代の吸血鬼に交わされた約束である。この盟約において、神とはドラキュラの事を指す。

「それがどうしたよ。創世記の…」

創世記とハクアが言った瞬間である。どよめきがぴたりと止まった。ハクアも気付く。部屋の空気が凍り付いていた。絶対零度の魔性力――ドラキュラが、窓の外に幽鬼の如く浮遊していた。

「よい。プラト―」

外からの声が部屋中に響く。どんな魔性を使っているのだろうか。嵐に近い雨の中、浮遊しているドラキュラは全く濡れていなかった。

雨が、ドラキュラに落ちるのを避けているかのように見える。

ブラドは立ち上がり、深々とドラキュラに頭を下げた。他の吸血鬼達も続く。

「申し訳ございません。伯爵様の瞑想の障壁になっていたでしょうか……」

「いや」

「では、どのような理由で赴かれたのですか？」

ブラドは頭を下げたまま尋ねる。敬意を表すのと、若い吸血鬼をまとめきれなかった失策を隠す事が理由であった。

「新しき子らの気持ちも解る。私の口から教えてやろうと思ってな」

意外なドラキュラの提案にも、今度は誰も口を開かない。圧倒的な存在感と冷気は、ハクアに向いた風向きすら凍てつかせてしまった。

暗転――。

ソウクの眼に、再び日本の景色が映った。しかし、先程とは明らかに違う。大地の至る所に存在する建造物からは黒煙が登り上がり、夕焼けの空にはおびただしい数の戦闘機が飛行していた。

すでに、吸血鬼戦争は始まっているらしい。すなわち、父の記憶

も終局に折り返そうとしていた。

14、追憶――吸血鬼戦争 中編

黒煙の臭いと、人間の叫び声で溢れかえっていた。ハクアは大空に金色の翼をはためかせ、配下である十名の吸血鬼と共に彼方から迫り来る二機の戦闘機の迎撃に向かっていった。

ドラキュラの意志――お為ごかしだった。『汝ら愛すべき子らの繁栄が我の意志であり目的の全てだ――』

あの場にいた吸血鬼は皆、その言葉がまやかしである事を知っている。知っていたが、ドラキュラのプレッシャーを前にして、それ以上言及する事など誰にも出来はしなかった。

夕焼けに照らされ、巨大な黒影となった戦闘機から秒間何百発もの機銃が発射される。後ろの吸血鬼の何人かが碎け散り、碎け散るまでの二倍程の時間を要して再生する。

「いいか。一番デカいのは俺が仕留める。お前らは二手に別れて二機墜とせ」

ハクアの号令に呼応する吸血鬼達。ハクアを中心に、左翼と右翼に五人ずつが上昇した。二機の戦闘機が旋回してそれを追う。

残った戦闘機がハクアに迫ってきた。ハクアはため息をつく。俺は一体、何をやってやがる――。

ドラキュラに懇願した。とにかく戦争は見送った方がいい。かなりの数の同胞が犠牲になる――。

聞く耳をもたれなかった。視線に凍てつかされ、ハクアもまたドラキュラの恐怖に浸食されて、口を開けなくなってしまった。

この戦争において、吸血鬼には二種類の実働部隊があった。さう者と戦う者。ハクアのように戦闘能力の高い吸血鬼は全て日本軍との交戦に当てられている。

縁や、縁の父が気にかかった。すでにさらわれているかもしれない。どうするー！。

耳をつんざく轟音。戦闘機はすでに眼前まで迫ってきていた。機銃が効かないと解るやいなや、特攻に作戦を切り替えたらしい。

「うるせえな」

適当な魔性を繰り出してあしらおうと考えた時、頭の中に突発的に閃きが浮かんた。

ハクアの実力からいって、この閃きがその場凌ぎにしかない事は明白だったが、それでも縁に会う時間を稼ぐ事くらいは出来るかもしれない。

ハクアは全身に爆弾のイメージを描き、頭部にのみシエルトアのイメージを描いた。

特攻する戦闘機がハクアに触れた瞬間ー！。

大爆発が起こり、バラバラになった鉄の塊が地上に落下していく。その影にハクアの頭も隠れていた。上空からハクアの名を叫ぶ吸血鬼の声が聞こえたが、構っている場合ではなかった。

地上はすでに焼け野原と化している。都市部とはいえ、鉄筋の建造物が現代に比べれば圧倒的に少ない時代。燃え盛った後に、残滓が残るものの方が珍しかった。

焼け野原。その地域の女がすでにさらわれている事を意味する。ハクアは焦燥に駆られた。縁の住む町は遙かな北。数分で再生を終えると、ハクアは他の吸血鬼に気付かれないうつ、陸路を走り出した。

空から何度か爆撃される。大地が叫びをあげるかの如く、熱風や石埃を撒き散らした。それに構わず、ハクアは走りつづける。

縁に会って、その後はどうするー？

脳裏に響く言葉が爆撃にかき消される事はなかった。夕日は落ち、静寂と無縁の闇が辺りを支配し始めている。

縁を助けるという事は、ドラキュラを裏切る事に直結する。すなわち、ドラキュラとの対峙を意味する。

恐怖ードラキュラと戦う自分。縁を失う自分。

それらは天秤の上で傾く事なく、ハクアの中で静かに均衡を保っている。

答えの出ぬまま、縁と出会ったあの海岸に辿り着く。この近辺には、まだ吸血鬼の手は伸びていないようだった。波音を除けば、夜にふさわしい静けさに包まれている。

安堵して、ハクアは縁の家に向かった。

離れてから数日しか経っていないというのに、何もかもが懐かしく感じた。三年間、幾度も縁の手を取って歩いた道。長屋に囲まれた狭い道を通り、その先の十字路を左に曲がると、縁の家が見えてくる。

朽ちかけた門をくぐり抜け、木戸を叩こうとした時だった。周囲からいくつもの悲鳴が轟く。凄まじい数の同胞の気配。

ちくしょう、遅かったかー。

叫び声に反応したかのように、ハクアが手をかける直前、木戸が開き、その中には怪訝な表情をした縁が立っていた。

「縁！」

「ハクア様……」

縁の表情は一瞬柔らかくなったが、ハクアとの再会に叫び声が増えれば、それが何を意味するのか彼女に解らない筈もない。即座に引き締まった。

「始まったんですね」

「ああ」

思考――縁の顔を見た瞬間、全て凍結した。恐怖すら凍てつかす凍結は、ハクアにとって不快なものではない。

「逃げるぞ。親父さんはどうしてる？」

答えー一口をついて出た。天秤は傾くのではなく、音をたてて崩れ落ちる。残ったのは、ハクアにとって真に守るべきものだった。

「眠っています」

「叩き起こせ。時間がねえ」

背後から二つの気配。吸血鬼がこちらを伺っている。

縁も気付いたらしいが、ハクアの言葉に頷いて、何も言わず寢室に走っていった。

「何をなさってるんです、ハクア様？」

二人組の吸血鬼がハクアに歩み寄りながら問い掛けてきた。振り返る。空を見上げると、数十人の吸血鬼が一人につき二人の女を抱えて飛翔していくのが見えた。

二人組の吸血鬼はどちらも短軀で、小太りだった。

「あなた様の任は、各地の制圧だったはずでは……」

「気が変わってな」

膨大な量の魔性を、僅かにだけ絞る。それだけで、二人組の表情にあからさまな畏怖が宿った。

「ど、どついう事でしょうか……」

「人間につくって事だ。意味は解るよな」

魔性を込めた睨みに、二人組は震え上がる。

「しかし、伯爵様が」

「黙れや。この場は見逃してやる。さっさと行け」

唾を飲み込む音が聞こえた後、二人は文字通り飛び上がって逃げ出した。

「ハクア様」

縁の声。寝巻きの父に肩を貸していた。

「行くぜ」

「何処へです？」

何処へーードラキュラの手の届かない場所。ハクアと縁が平穩の
中で暮らせる楽園。

そんなものはない。

「とにかく、遠くだ」

有無を言わず、ハクアは縁と縁の父を両脇に抱えて、金色の翼
を具現し、《遠く》へ飛び去った。

「私はハクア様に殺されると思っていました」

「殺せる訳ねえだろう」

「ですが、ハクア様達の王は恐ろしい程に冷酷で、強靱な方なのでしょう？私達を助けたら、ハクア様の立場が……」

「そんなもの、くそくらえって事に気付いたんだよ。ちよつとばかり、遅すぎたがな」

「どうして、気付かれたのです？」

「どうしてー言うべき時は今。」

「愛するってそういう事なんだろうよ。お前も前に言ってたじゃねえか」

左脇に抱えている縁の、ハクアの腕を抱きしめる力が強くなった。この温もりを離さない。この温もりを渡さない。

ドラキュラがいる限り、俺達に安息の場所はない。奴の息の根を止めなければならぬ。縁の為に。縁の愛する人間の為に。縁を愛する、俺の為に。

楽園は俺が創ってやるー！。

15、追憶――吸血鬼戦争 後編――ソウクが縁に宿る夜――

どれほど飛行しただろうか。眼下に人間の痕跡が消え、森と山の景色になった。空は次第に明るみを増し、朝日が山間から登り始める。

山の一つに、洞穴を見つけた。縁と父を入口に降ろし、内部を確認する。奥行きはないが、横長の穴蔵。当面姿を隠す分には問題ないだろうー！。

「よし。ひとまずここが縁と親父さんのねぐらになる」

朝日が届かない為か、洞穴内は薄暗い。ハクアは枯れ木をいくつか拾うと、掌を炎に変えて灯りと暖をとった。

「快適とはいえねえが、あそこにいるよかマシなはずだ」

「ですが、これから私達はどうなるんです？」

心配そうな表情で縁がハクアに近寄ってくる。父の方は疲れたのか、地面にへたりこんでいた。

「俺が、この戦争を終わらせてやる」

「お一人で、ですか」

「ああ。味方なんざいやしねえ。ドラキュラに牙を剥くってことは、そういうことなんだ」

「あれほどの軍勢を相手に……」

大した数ではなかった。ハクアにとって敵となるべきは、吸血鬼の王ーードラキュラ唯一人。

「また、行ってしまうのですか」

「必ず戻る。約束は守るさ」

「ハクアさんよ」

縁の父が、遠くから遮るように語りかけてきた。顔はハクア達の方ではなく、下方の森に向いている。

「あんた、自分の故郷は好きかい」

唐突な言葉。ハクアは質問の意図が理解できず、縁に眼を合わせた。

「父さん、どうしたの？」

「俺あ、若い頃に徴兵されて、縁が生まれる前までは寒い国にいたんだ。だが、当時の戦争の末期に、肺をやられちまってよ。日本に送り返された。非国民って言葉と一緒にな」

非国民ーーワラキアにとって、ハクアはもはや同義の存在であるだろう。

「帰ったら、縁が生まれてて、妻は空襲で死んでてな。それで、病人の俺がなんとか縁を育てる為にゃ、借金を重ねるしかなくって

よ。てめえの体誤魔化しながら、頭下げて回ってな。非国民だなんだ馬鹿にされながら、なんとか金をこさえて、ああこれで大丈夫だと思った矢先、ついに体が動かなくなつて、結局縁に迷惑かけちまつた。ダメ親父だよ」

「父さん……」

「誰も、助けちゃくれねえ。お国の為に戦つたつて、使えなくなりやただのゴミさ。俺あ、この国を呪つたよ。いつそ滅んじまえばいい。そう思つて生きてきた」

縁は父の方へ、静かな足取りで歩み、小さくなつたその背中を抱きしめた。

「でもよ、こんな状況になつて、なんでだろうな。助けて欲しくなつちまつた。ハクアさんや縁が住む大地を、失わせたくねえ、壊させたくねえと、本気で思つてる」

父が重い腰を上げ、立ち上がると、縁は庇うように父を支えた。空は完全に朝の光を大地に照らしつけている。

縁の父はハクアに振り向くと、深々と頭を下げる。

「親父さん……」

「故郷に背くつて事がどれだけ辛えか俺は解つてる。解つた上で、こんな事を言うのは忍びねえ。だが、救えるのはあんたしかいねえんだ。頼む。縁と、この国を救つてやつてくれ」

ハクアは頷いた。誰かに何かを、これほど真剣に頼まれたのは初

めてだった。

「あんた達は、人間の血を吸うと強くなるんだってな。俺の汚え血でよかつたら、使ってやってくれ」

親父さん、それは出来ねえーハクアの言葉が喉にかかった瞬間。

縁の父の首が飛んだ。噴水が朝の空を赤く染め上げる。背後に、ハクアがドラキュラ城で助けたあの赤髪の吸血鬼が浮遊していた。

一瞬の間を置いて、縁の絶叫が洞穴内にこだまする。駆け寄る縁。それを狙う赤髪ー狙わせるな。

遅れてきた怒り。それに呼応するかのように、薪の炎が火柱になった。

分散した思考を統一する。危機、回避、すなわち赤髪を仕留める。

魔性の解放。しかしイメージは湧かない。とにかく殺せ。ハクアは右拳にありつた力の力を込めて、赤髪へ跳躍する。

秒間の会話ー。

《何故だ?》

《あなた様に、邪魔されるわけにはいかないのです》

《お前もドラキュラのやり方に反発していたらう》

《申し訳ありません。それでも、あの方に抗う事はできないので

す

《馬鹿野郎――！》

鼻の頭に、ハクアの拳が触れる。赤髪の鼻は塵と化し、瞬きの間に顔が灰になった。頭部――魔性炉を失った赤髪は、森へと逆さまに堕ちていった――。

夜――。縁は口を開かない。父の遺体は森に埋めた。いつか墓を建てに戻ってこよう――ハクアの提案に縁が答える事はなかった。

薪の火に照らされて、洞穴にハクアと縁の影が映っている。ハクアは縁の背後に立ち、縁は両膝を両腕で抱えて座っていた。

「縁。もう、行かなきゃならねえ。親父さんを死なせちゃったのは俺の下手際だ。まさか、尾行がついてるとは思わなかった」

迂闊――縁の家の前で出会った吸血鬼を生かしておくべきではなかった。

迂闊――気を緩めるのが早すぎた。

「はじめはつける。許せとは言わねえ。だが、お前まで死なせたくなえんだ。ここは危険だ。森に降りよう」

縁は俯いたまま、顔を上げない。重圧の沈黙が洞穴を支配していた。埒があかない。

不本意ではあったが、強行手段に出る他なかった。ハクアは縁の

肩に手をかける。刹那に縁が振り向き、ハクアは唇を奪われた。口内を縁の舌が妖艶に動き回っている。

縁はそのままハクアを押し倒した。ハクアの衣服を脱がせ、露わになった乳首を貪るように舐め回す。

勃起――こんな時に、俺はどうなってやがる――。

勃起――こんな時に縁はどうしちゃったんだ――。

抵抗の意志が削がれる。縁もまた、自ら忙しく衣服を脱いだ。

全裸――残酷なまでに美しく、残酷なまでに夢かった。

「やめろ」

縁の眼を見た。泣いている。涙はハクアの顔に落ちた。

「やめるんだ」

「抱いてください」

泣きながら、しかし、縁の声は毅然と響いた。微小な可能性といえど、子を宿したら縁は死ぬ。小さくなった抵抗の意志が膨れ上がる。

「駄目だ。危険すぎ……」

る、を言う前に、唇が唇で塞がれた。

「怖いんです」

額をくっつけたまま、縁は言う。

「一人になるのが怖いんです」

「お前は一人じゃない。俺がいる」

「私は父と共に生きてきました。父が死にました。ハクア様が行ってしまったら、私は永劫に一人です」

「俺は戻ってくる」

「行かないでください」

「無茶言っな」

「逃げればいいんです」

逃げ場所――楽園。創る為にも、逃げるわけにはいかない。

逃げられない事を縁に伝えた。縁の顔がくしゃくしゃになった。

「今、行ってしまったら、二度とハクア様に会えない気がするんです」

「縁起悪いこと言っな。大丈夫だよ。戻ってきたら、お前を抱く。約束する。だが、今はその時じゃねえ」

お為ごかしの言葉。縁を抱くつもりなどなかった。

「いつです?」

再び毅然とした、怒りを伴う表情に戻る縁。

「いつ、ハクア様は私を抱いてくださいますか」

答えられない。真実がどこにも混ざらない嘘が、この場で通用するはずもなかった。

「明日ですか? 明後日ですか? 未来を断定出来ないなら、私はハクア様の言葉を信じる事が出来ません」

なら、俺はどうすればいいー。

「私達に保証されている時間は、今、この瞬間しかないんです。私達が愛し合えるのは、この瞬間だけなんです」

強い口調。この瞬間だけー体中がざわついた。

「愛してください。ハクア様の種を、私に宿して行ってください。私が望むのは、永遠の孤独よりも、刹那の情熱です」

絶望と希望がハクアに入り混じった。狂おしい想い。刹那の今しか信じられない現実。未来が闇に塗りつぶされている現状。

打破ー出来ない己の無力。それでも求められる愛情。

「愛してる」

縁が言う。

「愛してる」

ハクアが言う。

ハクアは上体を起こし、縁を押し倒し、覆い被さる。

性交――緊張はなかった。肌と肌が直接触れ合う事の心地よさ。これほどの充足がある事を知らなかった。

女性器――暖かかった。生命が宿され、誕生する肉の大地。ハクアは挿入する。さらに暖かさが全身に駆け巡る。肉の弛緩。大地に護られている気さえした。ハクアの性器もまた膨張し、先端から熱に似た別の衝撃が駆け巡る。

射精――幾度も腰を振り、幾度も熱を迸らせた。生命の種が熱によって先端よりその存在を明確にする。生命はハクアの性器を通り、やがて縁の子宮への道を歩き始めた。

森。深夜。獣の鳴き声も、息遣いも感じさせない程の静寂。

森の中央が金色に光る。ハクアの魔性が闇を照らした。

「行ってくる」

「ええ。父と共に待っています」

「俺はよ、楽園を創ろうと思ってた」

「楽園？」

「俺やお前が、誰にも邪魔されねえで幸せに暮らせる楽園さ」

「素敵ですね」

「ああ。でもよ、そんなものはまやかした。限定された楽園なんて、世界に生きてる限りありやしねえ。例え、ドラキュラを殺したとしても」

「では、ハクア様は何をお創りに？」

「信じられる未来さ」

沈黙。重苦しくはない。

「大丈夫。ハクア様なら、きっと創れます」

「ああ」

「私の血を吸ってってください」

「そうすりゃ、確かに俺は強くなれるな。でも、駄目だ」

「何故です？」

「血の力じゃ、未来は創れねえ。吸血鬼が人の血を欲さない、戦争の無い未来は、創れっこねえんだ」

「ハクア様……」

「じゃあな。俺の創った未来で、また会おうぜ」

口づけー想いが集約される。別れは金色の光と共にあった。

ハクアは飛び立つ。縁は見送る。ハクアは一度も振り返らない。縁はハクアの姿から眼を逸らさない。

この日、日本国に存在した全ての吸血鬼が塵と化した。その数は第三世代の約八割に登る。

ソウクは、父の記憶が終焉に向かっていている事を悟った。これより先の情景は、目まぐるしく暗転される。

16、追憶の終わり　ハクアからソウクへ

情景は再びワラキアに移る。

連戦に次ぐ連戦でさすがのハクアの魔性も切れかかってきたが、ひとまず日本が完全に吸血鬼の支配に落ちる事だけは回避できた。後は父ブラドと、ドラキュラを排除するのみ――。

ドラキュラ城のすぐ南、ワラキア湖畔のほとりにハクアは佇んでいた。左右に見える石造りの塔から、喘ぎに似た女の悲鳴が夜にこだましている。それを嘲笑うかのように、満月が波紋のない湖にくつきりと浮かび上がっていた。

「とんでもない事をしてくれたな。ハクアよ」

背後からブラドの気配がした。

「伯爵様がお怒りだ」

振り向く。両手を後ろに回して、無表情のブラドがハクアを見つめていた。

「何がしたいんだ、お前は」

「あんたらの操り人形でいるのに嫌気が差したただけだ」

「それだけではあるまい」

空虚なブラドの朱い瞳。何もかもを見透かしているようにも、何

も見えていないようにも見えた。

「人間ってのは、犯すか殺すか以外の使い道はねえ。親父。あんたはそう言ったな」

ブラドはゆっくり頷いた。

「俺にはそうでもなかった。それだけの話だよ」

「まさか、人間を愛したなどとは言うまいな？」

ハクアは笑った。それだけで全ては伝わった。

「計画を変更せねばなるまい」

「その必要はねえよ。あんたもドラキュラも、この場で俺が殺してやる」

残された魔性を解放する。余波で湖に波が立ち、満月の姿を歪めた。

「ヘンスンを教育係にしてくれた事には感謝してるぜ。ヘンスンのおかげで、俺はあいつに出会う事が出来たんだ」

「無能のヘンスンか。今頃は地下牢で苦しんでおるだろうな」

魔性の解放を中断する。動揺――ヘンスンの身を案じた。

「奴はお前の謀反の責任を、その命で償う事になっておる」

舌打ち。塔の女とヘンスン。助けるべき者が増えた。

「どこまで腐ってやがる」

「伯爵様から伝言だ。ヘンスンを助けたくば、ワラキアを去れ。愛すべき直径の子孫として、命までは取らないでおく」

それが慈悲によるものか、それともハクアの魔性力を恐れての提案なのか、ハクアには判断出来なかった。

「くそくらえって伝えとけ」

暗転――。

ドラキュラ城地下牢。鉄柵が張り巡らされているいくつもの小部屋が並んでいた。ヘンスンは手前――死刑を間近に控えた者の部屋にいた。

柵越しの会話。

「ハクア様、どうして戻ってきなすった？」

「すまねえなヘンスン。俺のせいで厄介事に巻き込んだしまった」

「そんなもの……」

「今すぐ助ける」

腕を剣に変え、柵を斬る――弾かれた。

「無駄じゃ。この柵に魔性は通じんよ。通じればとつくに逃げ出してる」

「何か、方法はねえのか」

「ハクア様よ。老いぼれの命など気にするな。それより、話を聞かせておくれ」

「話？」

「ハクア様が旅したこの三年間、何を見、何を学んだのか」

「後にするぜ。今は時間がねえ」

「今しか時間はないんじゃない。僭越ながら、私はハクア様に親心にも似た気持ちを持つとる。ハクア様がいかに成長したのか、この耳で聞いておきたいんじゃない」

鉄柵を握り締め、強い口調で言うヘンスンを否定する事が出来なかった。ハクアは話す。三年間。日本を旅した。縁を助け、共に過ごした。縁を愛した。縁の為に、ドラキュラに牙を剥いた。未来の為に、二度と血を啜らない決意を固めた――。

「そうか。ハクア様は、愛を知ったのじゃな」

「さあな。ただ、縁と縁の住む世界を守りてえ。だから俺は、戦う事にした」

「よもや後悔はない。私は喜んで逝けるよ」

穏やかな表情だった。ヘンスンは満足そうに頷き、牢の奥へと足を進める。

「ヘンスンには感謝してるぜ。生物の価値は、直に見て決める。その通りだった」

ヘンスノー父ブラドより、ハクアにとって父親だった。死なすわけにはいかない。

「ドラキュラに交渉する。俺はワラキアを出る」

「ハクア様……」

「いいんだよ。奴とはいずれケリをつける。今は、救える命を無駄にしたくねえんだ」

ハクアは振り向き、ドラキュラの気配を探る。いる。奴はホールに座している。

ハクアは歩き出す。

「ハクア様」

「何だよ」

「ハクア様の誓い、私にも分け与えてくだされ」

「どういう意味だ？」

「私も二度と、人間の血は啜るまいと、心に決めましたじゃ。ハクア様の愛した者から、そのような事は出来ずまい」

ハクアは振り返らなかった。返事の代わりに、右拳を上にかざした。

暗転――。

夜、海。ヘンスンの命を条件に、ドラキュラへの挑戦を諦めたハクアは日本を目指して飛翔していた。ドラキュラは日本と休戦協定を結ぶと言っていた。さらに、新しい世代の吸血鬼を日本に送り込み、人間に対する憎悪を徹底的に植え付けるとも。

当てつけ――それだけではないだろう。とにかく、ドラキュラはハクアのような吸血鬼が再び現れる事を恐れていた。ハクアは確かに見たのだ。あのドラキュラの表情に、一瞬ではあるが動揺が浮き出てくる様を。

縁と別れてからすでに五日が経っている――。暗転。

森についた。縁はいない。縁を捜した。暗転――。

丸二日、縁を捜した。見当たらない。焦りと不安がハクアを蝕んだ。暗転――。

廃墟となった縁の街。縁の家は辛うじて無事だった。さらに一週

間が過ぎて、思いたったようにハクアは足を運んだ。

縁の姿はないー！。しかし、居間の丸机の上に、一枚の手紙を見つけた。縁の残したものである事は一目で解った。駆け寄り、読むたのですね。縁は嬉しく思います。

「この手紙を読んでいるという事は、ハクア様がついに念願を達成されたという事です。信じられる未来を、ついにお創りになられたのですね。縁は嬉しく思います。

あの後すぐに、私は妊娠を察知しました。ハクア様は吸血鬼の受精率は低いと仰っていました。にもかかわず、たった一度交わっただけで授かった事を、縁は嬉しく想っています。

後悔はしていません。あの晩、私達は初めてお互いの全てを尽くして愛し合う事が出来ました。たった一度だけでも、それがどれだけ短い時間であったとしても、私にとっては永遠よりも価値のある、かけがえのないものになっているのです。

もう一度ハクア様に会いたいと思いました。けれど、愛する人に死に顔を見られたくないという気持ちが勝ってしまったのです。ごめんなさい。

縁は今でも、ハクア様と過ごした時の一つ一つを、鮮明に思い出す事が出来ます。幸せでした。人生で一番満ち足りた時を、ハクア様から頂きました。

ありがとうございます。私達の愛情を、生まれてくる新しい命に託そうと、心に決めました。

子供の名前は、ソウクがいいと思っています。ハクア様の創った

未来を、だれよりも《早》足で《駆》けれるように。

心残りと言えば、ソウクの顔が見られない事です。ハクア様、どうか、私達の子供を、立派に育てていてくださいませ。

追伸――縁の亡骸は捜さないでください。醜い姿を、ハクア様に見られたくはありません。

最後にもう一言だけ添えて、終わらせたいと思います。

愛しています。世界中の誰よりも。

小田桐縁

目の奥に熱。感情の波が後頭部から押し寄せる。涙を流した。涙を流したのは初めてだった。

縁もまた泣いていた。したためられたこの手紙の至る所に、水滴で滲んだ後がある。

馬鹿野郎、つれえなら一人で背負いこむんじゃねえー。

縁を捜そうと、家を出た瞬間――。

声が聞こえた。頭の中から、魔性炉からハクアの耳に産声が響いた。

産まれた――ハクアは悟る。縁の死も同時に。

ハクアはひれ伏し、声を上げて泣いた。産声とハクアの泣き声が

大地に染み渡っていった。

暗転――。

「随分立派になったじゃねえか。ソウク」

ハクアの目の前にはソウクがいた。父と子の記憶は、ここでついに交差した。

「これで思い残す事はねえな」

ソウクは父の眼から、幼い頃――とはいっても容姿は今と変わらないが――の自分を見つめる。朝の森だった。

「本当に、行くのか親父」

「ああ。母さんとの約束を果たせてねえからな」

約束――あの時はそれが何を意味する言葉なのかソウクには理解できなかった。

約束――今なら解る。ハクアは、縁が切望した信じられる未来を創りあげようとしていたのだ。

「お前よ。この国好きか？」

「解らない。何故そんな事を聞くんだ？」

「いいから答える。イエスかノーでだ」

ソウクは腕を組んで、唸りながら眼を閉じた。やがて、口を開く。

「イエスと言っておく。俺はこの国しか知らない。人間達は吸血鬼を蔑むが、それでも俺は、親父と、この国の大地に育まれてきた」

ハクアは歯を剥き出して笑い、ソウクの頭を撫でるように軽く叩いた。

「ガキにしちゃ、いい答えだ。安心して任せられるぜ」

「何を？」

「俺のいない場合の未来さ」

ハクアの表情が変わっていく。強い決意。そこには一切の迷いが
ない。

「約束、覚えてるな？」

「ああ。人間の血は吸わない、だろ」

「よし。行くとするかな」

「親父」

「なんだ」

ハクアの中のソウクは思い出す。この瞬間、自分が何を言ったのか。今まで忘れていた。忘れていなければ、あるいはアズサを失う

事はなかったかもしれない。必定――後悔は間に合わないからするものだ。

暗転――。

ワラキア。ドラキュラ城上空。

「愚かなり――」

追憶に終わりが迫った。ソウクは記憶の始まりに、すなわちハクアの人生の終焉に帰ってきたのだ。

ソウクは悟っていた。全ては父の走馬灯だったのだ。ドラキュラに貫かれ、今、ハクアは闇を落下している。

全ての魔性炉は繋がっている――。

誰かの声が響いた。誰であるかは解らないままだった。

ドラキュラの顔が月に照らされている。信じられない事に、その表情は憂いでいた。まるで、ハクアを手にかけて事に自責の念を抱いたとでもいうように。

ハクアの声が聞こえる。

よう。お前ソウクだろう。少し前から気付いてたぜ。全ての魔性炉は繋がってるらしいじゃねえか。どうやら、時間すら飛び越えてよ。

悪いが、俺には無理だった。だから、お前に全部託すぜ。俺と縁が望んだ未来を。

俺も無駄死にじゃねえ。確信が一つだけある。ドラキュラは闇と共にある。闇の中においてあいつは無敵だ。だからよ、言いたい事、解るよな？

ソウクは頷いた。肯定が伝わるかさえ解らないが、確かにソウクは頷いた。

それじゃ、また、いつかどこかの未来で会おうぜー！。

消え入りそうな父の声。完全な闇に染まる直前の視界。

ソウクにそれを言う資格はもはやない。それでも、あの時、父との別れ際に言ったあの言葉を、もう一度、ソウクは叫ぶようにして言った。

あんたの息子で、良かったよー！。

瞬間、ソウクの意識がハクアを離れる。闇の中、確かに父の笑顔が見えた。

17、ソウク対ドラキュラ

眼を空けると、亡霊の渦巻きはすでに消え、夜の海底の心地良い闇が広がっているだけだった。

今のは、幻だったのかー！。

ソウクの疑問を打ち消すように、魔性炉からアズサの声が聞こえてくる。

『あんたのお父さん、立派な人だったんだね』

『お前にも、見えていたのか』

全ての魔性炉は繋がっているー幻ではなかった。

『見たよ。あんな立派な人の息子が、あんたみたいな糞野郎だった事が信じられない』

アズサの言う通りだった。父と交わした約束。吸血鬼と人間の未来の為に、血を吸わない事ー吸ってしまった。それどころか、アズサの命を陵辱と共に奪い、関係のない人間を己が力の糧とした。

取り返しなど、つくはずもない。

『だからさ、死んじやいなよ。誰もいないこの海底で、一人ぼっちで、あんたが殺した全ての人間と吸血鬼に罵られながら、地獄に堕ちなよ』

この海底が、すでにソウクにとって地獄と変わらない場所だった。これ以上、どこに堕ちれば俺は許されるのだろうーアズサの答えはなかった。

『死ね』

アズサは死にたがっている。ソウクに殺された瞬間、アズサの体内の魔性炉がソウクに還り、全てが終わるはずだった。

終わらなかった。皮肉にも、ソウクの魔性力の高さが、肉を失ってもなお、アズサの意識を具現し続けてしまったのだ。

全ての力を取り戻したソウクは、魔性を暴走させ、産卵の塔を破壊し、ワラキア湖に潜り、その身を隠し続けてきた。

幾度も消してとアズサに言われた。消す術をソウクは知らなかった。肉体の一部を具現するのとは訳が違う。

『アズサ』

『何よ』

『今夜はクリスマスだ』

『はっ?』

『奇跡を起こすには、ふさわしい夜だと思わないか』

『何ふざけた事言ってるのよ、死ねよ』

『あと、数時間だけ付き合ってくれ』

ソウクは魔性を解放した。先程より、何もかもが洗練されているのが自分で解る。父に重なった事が原因か、あるいは他の何か――。暗い海底が、金色の光に照らされていた。

ドラキュラは上空から、海の底より立ち登った金色の光を見つめていた。その光は上昇を続け、ついには天にまで届いたのだ。

「やはり、ヤマシの爪は甘いな」

ドラキュラもまた魔性を解放する。浮遊する彼の周囲に、八本の杭が具現された。海面に向けて手をかざすと、杭は一本ずつ、凄まじいスピードで海に吸いこまれていく。

ドラキュラの魔性を感じ取る。物理法則を無視して、彼から放たれた杭の一本が水中の抵抗力に削がれる事なくソウクに迫っていた。

ソウクは翼を具現した。やはり、金色に光輝いていた。

起き上がり、足に地を掛け、飛ぶ。ソウクにも水の抵抗力は働かない。

杭――ソウクの眼前で消滅した。金色の光がドラキュラの魔性を無力化しているようだ。続けざまに七本――やはり無意味。

瞬く間に浮上した。闇の空に、ドラキュラが見えた――。

「ようやく、二人きりになれたな」

「汝はそれを望んでいたのか」

「ああ。ずつとな」

「それほどまでに、我が憎いか」

ソウクの右腕がブレードに変貌していく。これもまた金色だった。

「当たり前な事を聞くなよ」

大気の振動。ドラキュラが何かを具現しようとしている。

斬りかかった。

金色の残影が夜の闇に弧を描く。ドラキュラの肩に振り降ろされたブレード。金属音――肩とブレードの間に、不可視の何かがある。

背後から魔性のカー―先程と同じ杭が真っ直ぐソウクの背中を狙っていた。

ドラキュラは《何》を杭に具現化してるんだー。

振り向き、斬り落とす。上と下から杭。これは後退してかわした。両の杭の先端同士がぶつかり、互いに吸い込まれるように消えていった。

「汝では、我を殺す事は出来ん」

「誰なら出来る」

「神」

雲に隠れていた月が、ドラキュラの頭上に現れた。月光に照らされたその姿は、蒼白を通り越して純白だった。

「我は神の意志に従っている。神が死ねと仰るなら、それだけで我は己が命を断つ」

ドラキュラはマントを広げた。マントに隠されていた、本来胸があるべきその部位は、腹の辺りから真円の奈落となっていた。吸い込まれそうな錯覚を覚える。ブラックホールに似ていなくもない。

「あんたは、一体何者なんだ」

「我は神の使い。世界を管理する役目を賜っている」

ソウクは鼻を鳴らした。

「だから、全ての魔性炉が繋がっているとでも言うのか。あんたが、同胞を監視しやすいように」

「神の声を聞いたのか」

ドラキュラの表情が揺らぐ。大切なものを喪失したかのような、圧倒的な不安が伺えた。

「誰の声なのかは知らない。だが、あの海の底で、何度もこのフレーズが魔性炉に響いた」

「私の使命が終わるといえるのか？」

空を見上げるドラキュラ。問いはソウクに対してではなかった。

「俺にはさっぱりだが」

左腕――炎に変えた。

「どちらにせよ、あんたはここで終わりだ」

イメージー灼き尽くせから、喰らい尽くせに変える。左腕の炎はみるみるうちに巨大になり、やがてその姿をドラゴンへと昇華した。

ドラゴンが獰猛な口を開き、ドラキュラを頭から食らった。ソウクはさらに、自ら放ったドラゴンをブレードで二分割する。

手応え――あった。だが、それは自身の左腕を斬った感触でしかない。

ドラキュラはどこだ――下。

空間を跳躍出来るともいえるのだろうか。ドラキュラは海面に《立っていた》。

闇の中においてあいつは無敵だ――父の言葉のリフレイン。朝を待つしかないのか。しかし、日の出までにはあと六時間以上ある。

結論――別の光を探せ。

体で十字架を象るドラキュラ。凄まじい魔性力。海が渦巻きではなく、津波の如く舞い上がる。

「もはや、私の時代は終わったか」

ひとりごちた。そこから感情を読み取る事は出来なかった。

津波がドラキュラをさらうと、辺りに静寂が取り戻された。

ドラキュラの姿は消えていた。ソウクは魔性の力でドラキュラの気配を探り、追うようにして彼方へと飛び去っていった。

18、谷口救出、死臭病院

食い散らかされた死体。そこら中から聞こえる銃声、悲鳴。

リ力は後部座席で矢部の手を握っていた。手を通して、矢部にリ力の振動が伝わる。窓の外を流れていく地獄絵図、同僚達の呪詛が恐怖の触手となって彼女を蝕んでいく。

弾くような音が聞こえた。窓に警官の首が飛んでくる。矢部はリ力の手をきつく握り締めた。

「大丈夫かい？」

リ力はうつむいたまま答えない。気遣いの言葉など、この惨状にあつてなんの効力も発生しなかった。

渋谷からかなり迂回していた。本来十分強で辿り着くはずの距離を、一時間以上かけて走行していた。空を吸血鬼が覆い、地上は死体で埋め尽くされている。新宿区に入っても、その光景はまったく変わる事がなかった。

まるで、無間地獄。

「しかし、よく襲われませんか、俺達」

運転席の柳沢に尋ねた。矢部の声は震えていた。

「一応、私が吸血鬼ですからね。人間を乗せても、何らかしらの勅命を受けているように思われてるんでしょう。ありがたい誤解で

す」

甲州街道に、柳沢が運転している以外の車は走っていない。全て平べったい鉄屑と化し、道路の上に転がっている。その鉄屑は大体において血溜まりを作っていた。当然、流れているのはオイルではなく、乗車していた人間の血だ。

銃声と悲鳴に、爆発音が混ざる。左手のビルが炎上していた。柳沢の車目掛けて倒壊してくる。

柳沢は思い切りアクセルを踏みつけた。

「危なかったですね」

「まったく……」

すすり泣くような声——リカのものだった。矢部は彼女の肩に腕をかける——か、迷った。彼女に触れる資格を、俺は持っているのだろうか？

リカの肌は、まだまだ、矢部には遠かった。

谷口が入院している病院は笹塚にある。柳沢は車を病院の裏口に面する路肩に止めた。この辺りに、吸血鬼の姿はない。

「参りますか。谷口さんの無事を祈って」

この状況下で、病院がどのように機能しているのだろうか。吸血鬼達は病人すら食らうというのか——。

頭に響く疑問の言葉を、ひとまず矢部は打ち消し、リカの手をとったまま車を降りた。

小さな裏口を開けると、大きな待合室の後方に出た。電気は点いていない。それは単に時間帯によるものなのか、あるいは他の原因があるのか――。

恐らくは後者であった。

血の匂い。ヴィーナスや渋谷の街で嗅ぎ飽きた死臭が院内に漂っている。矢部にも吐き気が込み上げてきた。先に吐いたのはリカだった。

矢部がリカの背中を優しくさする。もう嫌です――涙ながらにリカが言った。無理もない。完全な絶望が先程まで目の前で展開されていたのだ。恐怖が吐き気すら凍り付かせていたのだろうが、そろそろ緊張の糸が切れる頃だった。

「我慢してください、リカさん」

柳沢は待合室を見回している。薄暗くて矢部やリカにはほとんど何も見えないが、柳沢の瞳には隅々までクリアに映っているらしい。

「受付のカウンターの奥で、ナースが数人死んでいるようですが、幸いここから死体は見えません。それより、注意してください。上の階に、恐らく一体の吸血鬼が徘徊しています」

矢部は天井を見上げた。

「柳沢さん、勝てます?」

「不意打ちならね。正面きつたらまず無理です」

自嘲ではなく、客観的な事実をありのままに語っているのが伝わり、矢部は肩を落とした。

「社長はどこに?」

「事前調査によれば、303号室に入院しています。六人部屋でしたね」

カウンターを左に辿ると、細長い廊下が見えた。その奥にエレベーターが二基。さらに奥に上下への階段。

「やっぱり、エレベーターはまずいですよね」

「当然です。階段で行きましょう」

しゃがみ込んでいるリカの顔を矢部が覗き込んだ。目は次第に慣れてきている。薄暗くとも、リカの表情ははつきり解った。

虚無――生に対する諦め。あるいは愛子の死顔だった。

矢部の胸が苦しくなる。結局、俺はこの娘を救えないのか――。

「リカちゃん」

肩を叩いた。さらにリカが俯くだけだ。

「もう少しだけ頑張ろう。きっと助かるから」

「嫌です」

リカが顔を上げた。暗闇と表情が同化し始めていた。

「もう、歩けません」

「そっか」

俺はこの娘を救えないのか――救ってみせる。決意が金剛石に硬度を上げていった。

矢部は背中を差し出した。

「歩かなくていい。俺に捕まるんだ」

「どうして？ どうして矢部さんはそこまで私に？ 私が矢部さんの奥様に似ていたから？」

その通りだった――しかしそれだけではない。

「さっき言っただろ。俺はリカちゃんが好きなんだよ。似てるものもあるけど、似てるからって理由だけじゃない」

「じゃあ、何故？」

「わかんないんだよ。俺にはわからない。でもさ、好きって大体そういう事だろう？」

肩にリカの手がかかった。矢部はリカを背負い、柳沢と共に階段の方へ歩き出した。ありがとう、ごめんなさいー耳元でリカが囁いた。

エレベーターを横切る。柳沢が足を止めた。

「どうしたんでー」

柳沢が唇に人差し指をあてがえ、エレベーターに視線を運んだので、矢部は言葉を噛み殺した。

階数表示のパネルが、六階から下へ順番に点滅し、こちらに近付いてきている。

息を飲む。いや、息を殺せ。柳沢は視線で矢部とリカに促し、階段の方に顎をしゃくった。

忍び足で、しかし迅速に階段を登る。エレベーターの電子音が下方から聞こえた。一階と二階の間にある踊場で、三人は完全に息を止めた。

大きな足音が聞こえる。やはり人間ではない。弱肉強食の世界において、足音をたてる事が許されるのは、その領域で最強を自負する事の出来る生物だけだ。

足音は一度こちらに近付いてきたが、階段を登る前に、待合室の方へ遠ざかっていった。

矢部と柳沢は頷き合った後に、上を目指した。

三階に死臭はしなかった。僅かな安堵が矢部の胸を撫で下ろす。廊下は十メートル程細長く続き、その奥はナースステーションがあるらしく、円形に開けていた。

谷口がいるであろう303号室への扉は、左手の壁、手前から二番目にあつた。

柳沢が先頭に立ち、扉を開ける。風が吹いていた。窓が開かれたままらしい。ベッドに設置されているカーテンがたなびいているのが見える。

「六人部屋ですが、ここに入っているのは谷口さん一人のはずです」

谷口を探す。

一つ目――いない。

二つ目――いない。

三つ目――いた。

窓側のベッドで、谷口が寝息を立てている。額に巻かれた包帯が痛々しく見えた。

「私が担ぎましょう」

リカを矢部が背負っているのだから、柳沢の言葉は当然だった。

柳沢が丁寧に谷口の頭と脚を両腕で抱える。やはり、吸血鬼の腕

力は伊達ではないと矢部は思った。谷口の体重は九十キロを超えている。

柳沢――吸血鬼の端くれ。見た目は人間と変わらない。何者なんだ？

車に戻ったらまずそれを尋ねようと思った。しかし――。

三階のエレベーターの電子音が聞こえた。矢部は戦慄した。リカの腕が、再びかたかたと震え始めた。

19、ヤマシの野望と暇潰し

ヤマシは病院でソウクを待っていた。奴がああ程度で死ぬ訳がない。そんな事は初めから解っている。

ドラキュラに対する虚偽の報告ーバレれば俺は殺されるだろう。まったく、大それた事を考えたもんだぜー。

ヤマシはソウクを騙し続けてきた。偽りの言葉、偽りの援助、偽りの友情。それでも、一度だけ本音を語った事がある。

『ー今更ジジイ世代が創る世界なんざ興味はねえー』

元来、ヤマシは誰かの下に仕える事を由とするタイプの男ではなかった。隙あらば、王の座をかすめ取ってやるー。

ドラキュラに隙はなかった。ヤマシは自分をも騙し続け、親衛隊長という地位に甘んじた。

だが、ソウクを使えばどうだ？

メンタル面が脆いのは先の戦闘でも明らかだが、それでもあの魔性力はドラキュラに対抗出来る唯一の可能性だった。

嘘を付くには自信がある。出来ればあの場で丸め込みたかったが、ドラキュラに悟られる恐れがあったので、ヤマシはソウクを海に《隠す》事にしたのだ。

浮上したソウクは、恐らくここへやってくるだろう。いかに心を

捨てたといえど、本質的な甘さはそう簡単に塗り替えられるものではない。意識の内に在るアズサの為にも、最後の戦いの前には、必ずここに訪れるはずだ。金井アズサの恋人、谷口が入院しているこの場所へ。

「しかしおせえな」

思わず言葉に出てしまう。統率の任をドラキュラから預かっているのだ。気付かれたら厄介な事になる。

ヤマシは六階の廊下の奥で、自動販売機を破壊し、缶コーヒーを啜って、焦燥を誤魔化そうとしていた。

糞、いつまで待たせやがるんだー！。

いてもたってもいられず、エレベーターで一階に降りる。高い所はなるべく避けたかった。気休めにしか過ぎないが、万が一何もかもがバレた場合に、ドラキュラの搜索を逃れる為に。

一階に降りたー！微量だが同胞の気配がした。左手、階段の上からだ。

誰だ？こんな所に何しにきやがったー！。

まさか、もう俺の裏切りがバレたってのか？いや、そんな筈はねえ。追跡者ならこんな弱つちい奴をよこして何の意味があるー！。

鼻をすすった。同胞と、人間が二人。組み合わせが不可解だ。ヤマシは迷った。ここで殺すか、様子を見るか。

暇つぶしにはなるかもしれない――後者を選んだ。

神経を研ぎ澄まし、連中の行方を探った。相手は息を殺している――それで俺から逃げたつもりか？

三階で三人は止まった。真っ直ぐ303号室へ歩いていく。303号室――谷口の寝所。

奴ら、あのデブに何のようだ？

思考を高速回転させる。この状況下でわざわざ見舞にくるお人好しがいるはずもない。

ソウクの協力者、もしくは関係者である事は間違いないだろう。ヤマシはにやりと笑った。

いいぜ、風向きが俺に向いてきやがった――。

再びエレベーターに乗る。303号室へ歩いた。歩きながら、大量の殺気を撒き散らす。相手がどう出てくるか気になった。

ある程度、根性据わつてると面白いんだがな――。

303号室の扉を開けた。静まり返っている。開け放たれた窓から夜風が吹いて、ヤマシの体を適度に冷却した。

視界には誰も映らない。隠れている――見え見えだった。頭隠して気配隠せず。ヤマシレベルの吸血鬼を欺く事は容易ではない。

窓側のベッドの下。左に一人、右に一人。

ちょっと驚かしてやるか。ソウクを上手く丸め込む為にも、なるべく殺さねえようにー。

左のベッドの前。息を吸い、唾液を口内に溜めた。爆竹のイメージを込め、吐き出す。

ベッドの上で破裂音ーーすぐ後に甲高い声の悲鳴。隠れているのは女だった。

都合がいい。ヤマシはそう思った。ソウクは女に弱い。利用出来るーーついでに血も頂ける。

「ようよう、無駄だぜ姉ちゃん。悪いようにしねえから出て来な」

もう片方のベッドに動きー男が這いずり出てきた。

「お、姉ちゃんの連れか？」

「その子に手を出すんじゃない」

立ち上がった男は拳を握り締めていた。その拳は震えていたが、単にヤマシを恐怖しているからという訳ではなさそうだ。

固い決意が見受けられるー根性が据わっている。

「何だよ。やるつてのか？」

面白そうにヤマシが言う。頭から足まで、見定めるように男を眺めてみた。どこかで、会った事があるような気がする。

「ここから出ていけ。俺達に構うな」

「あ？お前、誰にモノ言ってるか解ってるのか」

言外の意味――さあ、面白い答えを聞かせてくれ。

「お前が誰かなんて、俺には関係ないんだよ。この娘に危害を加える奴は、誰であろうとぶちのめしてやる」

答え――面白かった。

「ほお、粹がるなあ人間風情が。どうやってぶちのめしてくれるんだ？」

男の視線が僅かに動いた。入口の方向。微かな魔性の力を感じた。

そういえば、最初に感じた気配は三人。もう一人は？

刹那、ヤマシの側頭部を狙って魔性の針が高速で伸びた。かわす――窓ガラスの割れる音がした。

ヤマシが開けた扉の死角に、初老の男が立っていた。恐らくは吸血鬼。

「へえ、奇襲かよ。人間に手を貸す吸血鬼がソウク以外にいたとは驚きだぜ」

針がその男の指へと戻る。

「矢部さん」

面白そうな男の名は矢部だった。

「逃げてください。申し訳ないが、この吸血鬼は規格外です」

矢部が動く。ヤマシの脚を狙って体ごとぶつかってきた。ヤマシが動く事はない。

「やめなさ」

初老の男に唾を吐いた。先程よりもやや強力な爆竹のイメージが込められている。男の右腕が砕け散った。男は苦痛に顔を歪め、傷口の断面を左手で押さえた。

「吸血鬼にしちゃ、ヤワだな」

脚がくすぐつたい。矢部が何とかヤマシを倒そうと、両腕でヤマシの脚を抱き、もがいていた。

軽く顎を、膝で蹴り上げた。矢部はベッドの上に吹き飛んだ。

「矢部さん！」

「リカちゃん、駄目だ！」

女の名はリカ。軽くとはいえ、膝蹴りを顎に食らった直後に起き上がるとする矢部もまた、ヤマシにとって規格外の人間だった。

「てめえ、小田桐を、知ってるのか」

息も絶え絶え矢部は言う。両肘をベッドに突き立てる事で、ようやく上体を起こし、ヤマシを睨みつけた。

「小田桐？ああ、ソウクの事だな。おめえこそ、やっぱりあいつの知り合いかよ」

「あいつは、どこだ」

「焦んなくても、もうすぐ会える筈だよ。そんな事より、今考えんのは別の事だろう」

ソウクが来るまでの暇潰し――死なない程度に痛めつける。

中指を親指で押さえ、弾いた。矢部の額が割れる。指弾ではなく、ヤマシの中指が瞬間的に伸びたのだ。谷口を蹴散らした時にも同じ手を使った。

矢部が悶え、呻いた。意識が飛ばないように手加減するのが難しかった。

視界を何かがよぎる。初老の吸血鬼――跳んでいた。一回転し、窓の縁に足を掛け、その反動でヤマシに斬りかかった。左手が鉤爪のようなものに変えられている。距離は限りなく零に近い。

「お前はつまんねえ。レッドカードだ」

カウンター。軽やかに男の斬撃をかわし、鼻柱に右フックを叩き込む。男が飛んだ。背中から窓の外へ落ちる。ガラス片が闇に舞った。

鈍い音。ここは三階だ。普通の吸血鬼ならなんという事のない高さ。しかし、あの男は通常の吸血鬼より遥かに弱い。

「柳沢、さん……！」

初老の男――名は柳沢。

「柳沢って、あの吸血鬼批判の親父か？あいつ、吸血鬼だったのかよ？」

この面子はどのように結成されたのだろう。ヤマシの興味が膨れ上がった。

矢部の頭を片手で掴み、持ち上げた。矢部の体はだらんとしていたが、それでも拳は握ったままだった。

「本当に根性あるじゃねえか。気に入ったぜ」

「うる、せえ」

「ソウクが来るまで、せいぜい楽しませてくれよ」

「小田桐が、くんのか」

「ああ、来るぜ。あいつは来るよ。間違いねえな」

そして、俺はこいつらを使ってソウクを丸め込み、吸血鬼の天下を取る――。

「てめえ、なんざ、小田桐が来たら、いちころ……」

最小限に威力を絞ったリバーブロー。矢部の肝臓が抉れた。うめき声と共に口から泡の唾液が漏れる。

「大分あいつを買ってるじゃねえか」

「やめて!」

リカの声で振り返るヤマシ。リカは歯をカタカタと鳴らしながらも、毅然と立ち上がっていた。

どこかで見た事が《確実》にある。どこだったっけか——記憶を辿り、思い出した。

「あ、お前、昔俺に殺されなかった? そうだよ、三年くらい前に、俺が殺した女にそっくりなんだ」

矢部の中の何かが、はつきりと音をたてて千切れた――。

20、ヤマシの油断

先の見えない絶望の渦中にあつてなお、矢部に一切の恐怖心はなかった。先程までとは決定的に違う。

この吸血鬼が愛子を殺したのだ。間違いない。リカは愛子と瓜二つ。三年前という時期も一致する。偶然と考えられる余地はどこにもなかった。

ついに、見つけた――三年前から矢部の中で蠢いていた拡散的な黒い憎悪が、ようやく目の前の吸血鬼、ヤマシ一人に集約された。

「お前が、殺したのか」

リカを見ていたヤマシが、小首を傾けながら振り返った。

「ああ？」

「お前が、愛子を殺したのか」

ヤマシは矢部の頭を離れた。ベッドに腰から落ちてても、矢部は憎悪の視線をヤマシに送り続けていた。

何かを思い出すような表情のヤマシ。唐突に笑みがこぼれた。

「あー、そうか。お前、あの女の旦那だな？ いやよ、どつかで見た事あると思っただんだよ。そうだそうだ。愛子って言ってたな、確かに」

はちきれんばかりの理性――はちきらささない必要がどこにある？

残りの力を振り絞り、矢部はベッドから飛び上がってヤマシの顔を殴りつけた。よろめく事もなく、ヤマシは笑い続けている。胸ぐらを掴み、さらに二発。拳から血が出た。拳を掴まれた。

「時々よ、吸いたくて仕方なくなる時があるんだ。一年に二、三回な。俺もまあまあ我慢強い方だったんだがよ、たまたまあの女が通りかかってな。つつい襲っちまったんだ」

拳に力を――入らない。心に憎悪を――みなぎっている。

「なかなか気が強い女でさ、それが一層そそったな。普段なら殺して吸ってはいおしまい、なんだがよ、あいつばかりは犯させてもらったよ」

拳に力を――入った。振り解き、再び殴る。鼻を、目を、口を殴りつけた。ヤマシは口を大きく開けて、矢部の拳を食らった。噛んだ。血を吸い、吐きだした。

矢部の拳にヤマシの歯形。激痛が走る。それでも堪える事なく、矢部は拳を強く握り締め、殴り続けた。

「ははは。犯してる間よ、あの女、泣きもしねえで、ヒロアキ、ヒロアキとか言いながら俺を睨み続けてやがった。殺したらとんずらがセオリーなんだが、あん時ばかりはこの女の男を見てみたいと思っでさ、遠くからお前を眺め続けてたんだよ」

歪みきったヤマシの高笑い。消してやる――いくら殴っても消える事はなかった。矢部の拳はすでに感覚を無くし始めている。

「お前、泣いてたな。わんわん泣き喚いてた。なんだ、しょつぺえってあの時は落胆しただよ、お前、大分強くなったじゃねえか」

「殺してやる……！」

殴る。拳からスピードは失われていた。

「まあまあ。いいじゃねえか。そっくりの女見つけたんだからよ。どうだ？この女、あっちの方はやっぱ上手いか」

リカが泣き崩れるのが見えた。愛子が泣き叫ぶのが見えた。

腕を掴まれ、そのまま上に投げつけられた。天井に背中を打ち、腹から床に落下した。

這いつくばる。しかし、顔はヤマシを見上げている。

「お前、マジでいいぜ。全然目が死んでねえ。生身の人間のくせにタフだしよ。吸血鬼だったら相当使えたのにな。残念だぜ」

生身の人間――吸血鬼の力の前で、体は簡単に砕け散る。

決意は金剛石――砕け散るはずがない。

両手で顔を押さえ、しゃがみ込んでいるリカにヤマシが近付いていく。彼女の髪を引っ張って、矢部の傍らに放った。

「リカちゃん」

「矢部さん」

リカは矢部の頬を撫でるように触った。

「もう、やめてください」

リカの涙が、矢部の決意を反比例させていく。

決意は金剛石――あるいは、金剛石より固く、故に頑な。

愛子の仇を取る。リカを救う。決意は二倍。もしくは二乗。

だから、矢部は立ち上がる。

「膝が笑ってるのに、まだくのか」

ヤマシは半ば呆れ顔で笑った。矢部は殴りかかる。もはや、蚊も殺せない威力の拳打。ヤマシの一息で止まってしまふ。

「まいったな。別にお前を殺すつもりはねえんだよ」

ソウクを丸め込む為にも、人質が必要だった。他人なら殺せるくらの冷酷さは備わったものの、知り合いを見殺しには出来ないだろう。

「あんまし面倒だと、気が変わるぜ、俺も」

愚直なまでに殴りかかってくる矢部の足を払った。矢部は倒れる。立ち上がる。ヤマシは溜め息をついた。

「趣向、変えるか」

ヤマシは極小の魔性で両脚を金属に変え、矢部の膝を蹴りつけた。骨が碎ける音。絶叫とともに矢部が倒れる。今度は立ち上がれなかった。

リカが、ヤマシに駆け寄った。

「なんで、こんな酷い事が出来るんですか」

怒りと嘆きが声を震わせた。構わずヤマシは笑い続ける。

「暇なんだよ、俺は」

ドレスの胸元に両手をかけて、破いた。リカの乳房が露出した。

「やめろ」

矢部の懇願は無意味。足は役に立たない。手で這え、肘で這え――自分自身に言い聞かす。

リカは抵抗しなかった。彼女の心も、どこかで吹っ切れてしまったようだ。

ヤマシはリカの胸を揉みしだく。恥辱すら表情に出ない。あるのはヤマシに対する侮蔑のみ。

「とことん、あの女に似てやがる。突っ込んだら、もつといい顔するんだろうな」

「やめろお」

肘で這う矢部。リ力を助ける。愛子の仇を取れ。意志が彼を動かしていた。だが、リ力とヤマシは永遠より遠い三メートルの先にいる。届かなかった。

「ここで三年前の再現といくぜ。大丈夫だ。お前らどっちも殺さねえよ。だから安心して泣き叫べや」

殺さないー救われるという意味ではなかった。

ヤマシはリ力の体を反転させ、背後から羽交い締めにした。矢部に見せ付けるように、荒々しくリ力の胸を揉んでいく。

「喘いでもいいぜ、姉ちゃん」

吐息を殺すように、リ力は唇を噛み締めた。目をキツく瞑る。矢部は見上げる。憎しみが破裂した。

「殺してやるう！！！」

「やってみな」

リ力の首筋に牙を突き立てた。小さな痛みと虚脱感がリ力を支配する。さらに唇を強く噛んだ。唇から血が流れた。

「みなぎるぜえ、おい」

ヤマシの魔性力が矢部の呪いに比例して上昇していく。矢部は頭を床に打ち付けた。何度も何度も打ち付けた。

畜生、畜生、畜生――！

「今なら俺を殺せるぜ。知ってるかもしれないねえが、俺達は血を吸ってる間無防備だ。お前が立ち上がる事さえ出来れば、簡単にあの女の仇を取れる。さあ、やってみろよ」

どれほどの意志を持っても、矢部が立ち上がる事は不可能だった。矢部は泣いた。自身の余りの無力を嘆き、リ力を巻き込んだ自分を責め立てるように泣いた。

ヤマシは恍惚としていた。弱者をいたぶる快感と、血の魔力に酔いしれていた。それらはヤマシから判断力を徐々に削りとっていく。本来の目的を忘れ始めていた。

結論から言えば、ヤマシは調子に乗りすぎた。

ヤマシの全身を悪寒が駆け巡る。肌が警鐘を鳴らしていた。即刻、吸血を中止しろ、取り返しのつかない事になってしまう――！。

なんだ、俺は何にびびってる――！。

判断の遅れが、結果としてヤマシの致命傷になった。矢部の瞳の中に映った男の姿を確認する事で、ヤマシはようやくそれを自覚する。

背後の割れた窓の外――闇に朱色が浮かんでいた。

「そこまでだな、ヤマシ」

朱色の名は、小田桐ソウキー！。

21、ヤマシの最後

0.05秒。ヤマシが魔性を解放する為の所要時間だった。正確には、吸血を中止する為の時間が加わるのもう少しかかる。

状況を打破するには遅すぎた。

「動くな」

ソウクは魔性の解放を終えていた。詰まるところ、今の二人の力関係は先程までのヤマシと矢部に変わりない。

ソウクが来るまでに、二人を人質にする――完全に失敗した。完全に自分のミスだった。

ソウクが室内に入ってくる。薄暗い部屋が金色の光に照らされた。

矢部はソウクを見上げた。涙が洪水となった。

ヤマシの背後に、ソウクが立つ。

「よう、遅かったじゃねえか」

「お前のお陰でな」

振り返る事すら、ヤマシには出来なかった。僅かにでも体を動かせば、ソウクは躊躇なくヤマシを殺す。

「へへ、やっぱ、来やがったか。あのデブが気になったんだろう」

強がってみたものの、ヤマシの声は上擦っている。

「まずは、その女を離せ」

命令口調。ヤマシは逆らう事なく、リカを離れた。リカは床に倒れ込み、破かれたドレスを手繰り寄せて胸を隠した。そして、這いつくばっている矢部の顔を胸元に抱き締めた。

「くそ、感動巨編にするつもりはなかったんだがな」

言葉を吐きながら、ヤマシは必死に嘘を考え続けていた。この状況でなお、ソウクがヤマシに付く理由を作る。難しい嘘。

誤魔化し、丸め込めー！。

ヤマシの頭にはそれだけしかなかった。

「なあ、俺がどうしてお前に止めを刺さなかったか解るか」

問いー背後のソウクは答えない。ヤマシにソウクの表情は見えない。

「ダチだからよ。ドラキュラの命令で、お前を騙し続けてきたが、俺にも情はあるんだ。あれだけ一緒にいりゃあよ、やっぱし、おめえは俺にとって特別な存在だよ。お前を罵る事で、自分に言い聞かせてたんだ。ドラキュラに逆らう事は出来ねえ、だからこれは仕方ねえんだって」

滑るように嘘が出てくる。ソウクからの答えはまだない。

「だけど、やっぱ無理だ。おめえを殺すなんて俺には出来ねえよ。たった一人のダチなんだ。それだけじゃねえ。おめえと組めば、もしかしたらドラキュラを殺せるんじゃないかって。俺達の樂園を築けるんじゃないかって、そう思った。だからここでお前を待ってたんだ」

言葉を区切る事の沈黙。ソウクは俺になびき始めているーヤマシは思った。リカと矢部が蔑みと憎悪の視線を送ってきたが、それがヤマシの罪悪感をおもひよる事などありはしない。

「なあ、ソウク。俺達ならやれる。やらねえか。ドラキュラを殺して、それでー」

「俺に友人はいない」

思わずヤマシの体が震えた。ソウクの言葉が、ソウクの言霊がヤマシを完全に否定した為だった。

「かつてはいた。その友人はあの城の中で俺の心と共に死んだ」

「だからよ、それはー」

後頭部に肉の感触。肉としては、ソウクの掌は冷たすぎた。

「お前は勘違いしてるんだ、ヤマシ」

言いながら、ソウクは掌に魔性を込める。

死の予感ヤマシの鼓動を室内に響かせる。これほど緊張した事

はなかった。内臓が圧迫され、呼吸すら困難になる。ヤマシは恐怖していた。

「俺は社長に会いに来たんじゃない。お前を殺しに来たんだ」

死刑宣告――何故だ？

「お前は、これから俺が為そうとする事に、恐らく一番の障害になるんでな」

「なん、だと？」

「第三以降の世代において、最強の吸血鬼、アルカード・ヤマシ。生かしておくわけにはいかない」

ソウクが為そうとする事――ドラキュラを殺す事。

その最大の障害がヤマシ――第三世代以降で最強の吸血鬼。

ソウクを除いた吸血鬼中では三位の実力のヤマシ。二位のブラドは邪魔にならない？

――！

ヤマシはソウクが為そうとしている事の真相を悟った。

「まさか、おめえ……」

ソウクの掌が黒鉄の球体になった。球体が割れるように開く。中は無数の、やはり鉄の棘で埋め尽くされている。

「だったらなおさら、俺が必要だろう?! そりゃ、一人じゃ無理な話だ」

球体がヤマシの顔を包み込んだ。ゆっくりと、死が近付いてくる。さしずめ、簡易版鉄の処女。

「一度失った信頼は取り戻せない。どんな言葉で繕おうとも、俺がお前を信じる事は二度とない」

ソウク自身が、それを誰よりも理解していた。

ヤマシは嘘で生きてきた。最後は、嘘によって死ぬ事になる。

「それになヤマシ。楽園なんて、俺達には創れっこないんだ」

棘が頭に刺さった。

「俺達はいつでも、永劫の闇の中にいる。何をしたって覆せはしないんだ」

「待ってくれ!」

叫びーヤマシではなく、矢部のものだった。

リカの肩を借りて、矢部は何とか地に足を付けていた。歩く事はできない。よって、リカが矢部の足になった。

「小田桐……、お前にこんな事を頼む資格、俺にはねえけど、だけど、そいつは愛子の仇なんだ。俺の手で、こいつを殺したいんだ。」

頼む……」

切実な想い。ソウクの表情が揺らいだ。ソウクの心は死んでいる。それでも、ソウクの心が消えたわけではなかった。

ソウクはゆっくりと頷いた。

「 \wedge 」

ヤマシの声。吹っ切れていた。吹っ切れた上で狂っていた。

「人間に殺されるなんてよお、墜ちたな俺も」

ひやははははははははははは。は。

球体に顔を隠されても、ヤマシが不気味な表情をしている事は全員に解った。それを恐れる者はいなかった。

リカの力で矢部を支えるのは辛い。それでも、リカは倒れなかつた。ほとんど背負うようにして、ヤマシの元までの数歩を歩く。

何から何までが、協同作業となった。

「ありがとな、リカちゃん」

そして、二人はヤマシの元に至った。

「この球体をお前の手で閉めるんだ。俺が協力出来るのはそれだけだ」

「ああ。ありがとよ、小田桐」

まさか、矢部に礼を言われるとは思わなかった。変わったのはソウクだけではない。ソウクと矢部。片方は闇に、片方は光に進化していた。

「なあ、お前こいつを買ってたよな」

ソウクの球体に矢部が触れた瞬間、ヤマシが再び語り出した。

「いい事を教えてやるぜ。こいつはよ、あのデブの女寝取つただよ。しかも血の欲求に耐えられなくて殺しちまつたんだ。さらには開き直りやがってさ、今日なんか人間殺しまくつたらしいぜ」

ひゃはははははははははは。

矢部はソウクを見た。ソウクの表情が変わる事は無かった。

デタラメー そう思いたい。ソウク自身に否定して欲しかった。

ソウクは否定しなかった。

「あのデブに言っとけよ。お前は恩を仇で返されたってなあ」

手に力を――入らない。ヤマシを殴り続けた事によって、矢部の拳は壊れていた。

リカの手が、矢部の手の甲に添えられた。

リ力に視線を移す。目だけで彼女は頷いた。かつてなく、その表

情は愛子に似ていた。

ありがとうー。

ソウクの棘が魔性炉を貫くまで、ヤマシは笑い続けていた。

22、呪いの切望と柳沢の正体

窓の外には雪が降り始めていた。ホワイトクリスマスーいや、すでに日付は二十六日に変わっている。

落下した柳沢と、ヤマシによって膝を砕かれた矢部、そして意識不明の谷口の治療を終えたソウクは、窓から僅かに身を乗り出して、冬の冷気をその身に感じていた。

最後の夜に見れる景色としては、なかなか幻想的だった。クリスマスーの奇跡の残滓といえるかもしれない。

他の者達は皆、ベッドに腰掛けて、雪ではなくソウクの背中を見つめていた。矢部の隣に座るリカが寒さに身を震わせている。矢部は彼女を抱き寄せた。

「それでよ、何が起こってるんだい、こりゃ？」

沈黙に耐えかねたのか、谷口が口を開いた。彼は入口から一番近いベッドの上であぐらをかいている。

柳沢が、事の顛末を話した。

「信じらんねえ、日本はどうなっちまうんだ」

矢部とリカは俯いた。今までは目先の危機を回避する事で精一杯だったが、これからはある程度未来の事も考えなくてはならない。一夜にして地獄と化したこの国の行く末――果てしなく暗いもので

ある事は間違いなかった。

「そうだ。アズサは？アズサはどうなったんだ？」

重庄に似た言葉。矢部は死の直前のヤマシの嘲りを思い出した。

小田桐が社長の恋人を殺したー！。

「なあ、ソウちゃん。アズサは、アズサがどうなったか知らねえかい」

ソウクはゆっくりと振り向いた。白雪とソウクの肌は、どこか不釣り合いで、しかし共通する面もある。

どちらも、瞬間で消え入ってしまいそうに頼りなかった。

「アズサは……」

『言いなさいよ』

アズサの呪詛がソウクに響く。もう、心が乱される事もない。

『あんたが犯して、殺したって谷口さんに言いなさいよ。罵られて蔑まれて、どこまで行っても独りだって思い知らされればいい』

『ああ』

ソウクは谷口のベッドの前まで歩き、土下座した。

「おい、ソウちゃん？」

「社長。申し訳ありません。俺がアズサを殺しました」

重圧に似た――というより、今は言葉が重圧だった。

谷口の目が丸くなる。

「冗談だよな、ソウちゃん」

「いえ、本当です。アズサは、俺のせいでさらわれ、俺によって殺されました」

「小田桐！」

矢部がソウクに駆け寄った。しゃがみ込んで、ソウクの肩を揺らす。

「お前、嘘なんかつくんじゃないよ！社長の彼女は、お前が助けたんだろう？その彼女を何でお前が殺すんだよ」

「ドラキュラにはめられた。だが、殺したのは俺だ。俺は自分を律する事が出来なかったんだ」

「意味わかんねえよ。どついう事だ！」

振動で、床に体重がかかるのが伝わった。谷口がベッドから降りたのだ。

「ちょっと、どいてくんねえか、矢部」

「社長……」

谷口に促され、矢部はリカの隣に戻った。

「顔を、上げな」

「はい」

ソウクは谷口を見上げた。谷口の表情から何か強い感情を読み取る事は出来なかった。

「ソウちゃんとアズサが出来てたの、実はオイラ知ってたんだよ」
意外な言葉――さすがにソウクも動揺した。

「初めはソウちゃんが、『あの事』アズサにバラしたのかと思ってな。結構勘ぐってたんだが、どうも違うらしい。アズサは、ソウちゃんに惚れてた。嫉妬がないつつたら嘘になるけど、仕方ねえんだなって、そう思ってたんだ。別れようか考えたけど、そしたらソウちゃんに変な気を使わせちまうと思って、とりあえずは現状維持を続けてたんだ」

お人好し――傍目にはそんな言葉が似合う谷口だが、彼の声色を聞けば、その決断に至るまでに途方もない苦悩があった事は簡単に解る。そんな言葉で括る事など出来なかった。

「オイラ、ソウちゃんに何て言ったらいいかわかんねえよ。ソウちゃんはアズサの命を助けてくれた。だから、オイラにとってもソウちゃんは恩人なんだ。だけど、そのソウちゃんがアズサの命を奪ったってんなら、オイラ、何て言ったらいいかわかんねえ」

谷口の巨躯が震えた。体の大きさと相反してその姿は弱々しかった。

「ソウちゃんなら、いつか本当にアズサを渡してもいいと思ってた。それが二人にとって幸せなら、いいと思ってたんだ。でも、でもよ、わかんねえんだ。今、ソウちゃんに何て言ったらいいかわかんねえんだよ！」

崩れて泣いた。アズサに会いてえー繰り返される叫びが死んだはずのソウクの心を抉り始めた。

ソウクは罵られたかった。ありとあらゆる罵詈雑言を谷口から受けたかった。償いとは言わないまでも、谷口の憎しみを受ける事で、せめて谷口の負担を減らしたかった。

谷口はソウクを責めない。ただ、現実を嘆き、悲しむだけだ。ソウクは打ちひしがれていた。

アズサ、俺を呪えーせめて、お前の呪詛で社長の気持ちを代弁してやってくれー。

呪詛は聞こえない。沈黙が呪詛だった。

ひとしきり泣き終わると、谷口は部屋を出た。追おうとする矢部を、柳沢が制する。一人にしてあげなさいー現在、この部屋ではあらゆる伝達が無音で通じた。

ソウクは立ち上がる。矢部が呪ってくれる事を多少期待したが、無駄だった。ならばと、ソウクは思う。

この命が尽きるあと僅かな時間の間、俺が俺を呪い続けてやる――！。

馬鹿野郎――父の声が聞こえた。

悔恨懺悔は後にしやがれ。そんな気持ちはいらねえんだよ。取り返しの付かねえ事したんなら、別の事で取り返せ。許されなくてもいいからな、お前はお前にしか出来ねえ事を精一杯やり尽くせ――！。

「さて、これからどうしますか」

沈黙を破ったのは柳沢だった。

「ここで息を潜め、全てが終わるのを待つか、小さいながらに抗ってみるか。小田桐さん、あなたの考えを聞きたいですね」

壁際でソウクは腕を組んでいた。為すべき事は決まっている。

「あんた、テレビでよく見かけたな。吸血鬼だとは知らなかった」

「そうだよ、柳沢さん、とりあえず、正体教えてくださいよ」

矢部は取り憑かれたようにまくしたてた。話題を谷口から遠ざけようと必死なのだろう。それを察したり力が矢部の手を優しく握った。

「そうですね。最後になるかもしれませんが、今のうちに答えをおきましようか」

ベッドから立ち上がると、柳沢は部屋の中心に移動した。

「ある意味で、私は今回の戦争の答えと言うべき存在でしょうな」

ソウクは怪訝そうな表情で柳沢を眺めた。リカが矢部に

「どついう事です？」

と囁いたが、矢部は首を振るだけだった。

「私は、第五世代の吸血鬼です」

23、真相

柳沢の告白はソウクの不信を煽った。第五世代の吸血鬼――そんな者がいたなどという話は聞いた事がない。

それが本当に今回の戦争の理由の一つであるとしたら、その意味とは何だ？

現在、この部屋における伝達の全ては無音で通じる――柳沢は静かに語り出した。

「先の戦争の理由は、リカさんだつてご存知でしょう」

リカは頷いた。

「歴史の授業で、何度も聞きました。吸血鬼の子孫繁栄、ですよね」

「その通りです。当時、その為に多くの女性がワラキアに連れ去られ、そして彼等の子供を宿した。それが小田桐さんを始めとする第四世代の吸血鬼の出生でした」

柳沢の視線がソウクに移った。正確に言えば縁の息子であるソウクはその範疇から外れるが、ソウクは無言で次の言葉を待っていた。

「さて、ここで一つ不可解な点が出てきます。皆さん。今回と前回の戦争では、決定的な違いがあると思いませんか」

掌に拳を乗せ、はつとした顔で矢部が問いに答える。

「そうか。今回は吸血鬼の奴ら、男も女も見境なく殺してる」

「そうです。ただでさえ生殖能力の低い彼等が、そんな事をするメリットとは何でしょう。まして前戦争よりも人員は増大されている。その気になれば女性をワラキアにさらう事など、前回より遥かに容易なはずなのに」

確かにその通りだとソウクは思う。世界侵攻に何よりも必要である数の増大を、今回ドラキュラ達はまったく計ろうとしていない。

「答えは簡単です。意味が無いんですよ」

「意味がない？」

あっけらかんとして矢部が復唱した。

「これ以上増やしても、強い吸血鬼は生まれないという事です」

「それって、もしかして……」

柳沢は頷いた。

「小田桐さんならすぐ解るでしょう。私がいかに貧弱な吸血鬼であるかという事が。私もある程度魔性を操る事が出来ますが、せいぜい指先を針に変えるのが精一杯です」

ソウクは目を細めて柳沢の脳内を覗いた。言葉通り、内在している魔性炉はかなり小さい。

「私は五十七歳です。相応な外見をしているでしょう。第五世代の吸血鬼は人間とほとんど相違ないんですよ。胎内で急速な成長をする事もなく、普通の赤子として生まれてきます。故に母は健在ですよ。もっとも年のせいかな最近体調はかんばしくありませんでしたがね。さらには血液に対する欲求も皆無なんです」

人間と相違ないというより、僅かな魔性を操れる《人間》と言った方が近い気さえした。柳沢から吸血鬼らしさは微塵にも感じられない。ソウクは複雑な心境になった。

「ようは、人間の血が混ざり過ぎたのが原因でしょうな。つまり、吸血鬼は小田桐さんの代でその進化をピークにまで登りつめていたのです。後は、衰退しか残っていません」

「あんたは、どうやって生まれたんだ」

「母から聞かされた話ですが、極僅かな地方では、休戦の後も何人かの女性がワラキアに連れ去られているそうです。母もその内の一人ですね。目的は言うまでもないでしょう。これは推測ですが、恐らくは当時の政府も協力していたんでしょうね」

矢部とリカは互いに顔を見合わせて不可解そうに小首を傾げた。

この二人は休戦協定の真相を知らないのだから当然の反応であるが、ソウクも柳沢もそれについて説明している時間はないと判断していた。

「小田桐さんが第五世代を知らないのも無理はありません。ドラキュラは私達の存在をトップシークレットにしていますから。当然ですね。一族に未来が閉ざされている事を隠したかったんでしょう」

さすがにこの情報はヘンスンにすら行き届いていないだろう。恐らく知っているのはドラキュラと爺さんだけだーソウクの心中。

「幸いにも、お役御免で私達親子が殺される事はありませんでしたよ。母の出産が終わると、日本に送り届けられたそうです」

ソウクは、いつかのヘンスンの言葉を思い出した。

『……あの方にも温情がある……』

まさか、これがその片鱗だとも言うのだろうか。

「成長して、出生の秘密を知った私は絶望しましたよ。幼少から不思議な力がある事は解っていましたが、それがまさか吸血鬼の血統によるものだとはね。ひたすら怯えました。いつか私が吸血鬼だという事がばれて、保護法の元労働所送りにされるんじゃないかってね」

人生において溜められてきた忌まわしき鬱憤を吐き出すように、饒舌な語り口で柳沢は続けた。

正体を隠す為に、もっとも安全な地位を模索し、結果として吸血鬼批判の第一任者になった事。しかしながら、内にある吸血鬼への同族意識に悩まされ、やがてそれが保護法の改正を訴えるという手段に転化されていった事。そして、誰もが吸血鬼を蔑まない社会を創る為に、小田桐ソウクを主人公としたドキュメンタリーを出版しようと思いついた事。

動機はどうあれ、柳沢の為そうとしている事はハクアに通じた。

「残念だが、俺はあんたの考えているような吸血鬼じゃない」

アズサを殺し、人間達を殺した。誰よりも蔑まれるべきは俺自信の筈なのだ――。

「ええ。そうかもしれません。でもね、真実なんてどうでもいいんですよ」

柳沢は柔らかな声で断言した。

「人も吸血鬼も、自分が信じたものに縋って生きている。たとえ虚像の英雄だって、あなたは矢部さんの印象を覆したんだ。この国に生きる人間の誰しもが持つ、吸血鬼への猜疑心をね。それだけで充分なんです。真実が混ざった嘘は、真実にすら勝るんですよ」

ソウクは矢部を見つめた。照れているのか、矢部は視線を逸らしてしまった。

俺が矢部の何を変えたというんだ？

「出来れば、戦争が始まる前に完成させたかったんですがね。どうやら、出版は困難になりそうだ」

「いつ、この戦争が始まるのを知ったんだ」

ソウクの問いに、矢部も興味深そうにベッドから柳沢の方へ身を乗り出した。

「通達があつたでしょう。私達五世代にも一応届けられていたんですよ。極秘裏にね」

恐らく、それは戦争に参加しろという意味合いではなく、姿を隠せというメッセージだったのだろっ、と柳沢は付け加えた。人間に溶け込んで生きている吸血鬼が、僅かにでも戦争に抗おうとしてしまったら、第五世代の存在が全ての同胞に明るみになってしまっただ。

「さあ、このくらいにして、本題に戻りましょう。私達はこの先、彼等を相手にどう立ち回るのか。それを考えなければいけません」

急に現実に取り戻されたせいか、矢部とリカの表情は暗くなる。

「安心しろ」

ソウクは言った。

「俺が、ドラキュラを殺す。恐らく、この方法で間違いなく奴をこの世から葬り去る事が出来るはずだ」

全ての視線がソウクに集まった。柳沢が代表して口を開く。

「その方法とは？」

「あんた達の協力と、俺の命が必要になる」

ソウクは方法について説明した。語り終わった後で、矢部から向けられた眼差しは、ソウクの生涯が終わる瞬間まで、その胸に焼き付けられる事になる。

24、それぞれの絆、それぞれの別れ

高層ビルや家屋が、殺された人間達の怨みの炎となって猛り狂っていた。降りしきる雪がそれを憂うようにして、徐々に怨みをなだめていく。吹雪でもないのに、全てが鎮火されるまで、時間はあまりかからなかった。

「雪をお降らせになったのですね」

ブラドが言った。眼前にドラキュラ。祈るようにして、天を仰いでいる。

「我は、間違っていたのかもしれぬ」

すでに都市部に人間の姿はなかった。配下の吸血鬼達も、各々地方へ魔手を伸ばし始めている。月は相変わらず、その存在を世界に知らしめるようにして、闇の空に浮かんでいた。

雲一つない天候。それでも、雪は舞い落ちる。

「伯爵様の行いに、間違いなど……」

「小田桐ソウクが、神の声を聞いた」

混沌はすでに終わっている。ドラキュラの声は静寂の中、物悲しげに響いた。

「では……」

「私の役目は終わろうとしているのかもしれない」

「不肖の孫に、伯爵様の代わりが務まるとは思えません。何かの間違いでは」

「いや」

ドラキュラは街を見下ろした。文明――人間達が知恵を振り絞って築き上げてきたもの。その残滓が、ドラキュラの失敗を証明していた。

「我が神から賜った任は、この世界の持続だ。我はこの世界に発生した当時から、イエスと度重なる議論を重ねてきた。あの男は、人間との共存を訴え、我は人間の廃絶を訴えた。イエスは我に時間を求めた。人間を導く為の時間をな。神から遣わされた男だ。志は違えど、我もあれの事は認めている。我はイエスの意志を尊重する事に決めたのだ」

「しかし、結果としてメシアは……」

「神の反逆者として磔られた。先代のキリストと同じように。あの男は、自ら魔性炉を人間に貫かせたのだ。我はそれが理解出来なかった。イエス程の男だ。あれの持つ魔性炉がどれほど重要な意味を持っているのか、解らなかったはずはない」

「メシアに何が？」

「あれは恐らく、伝道の途中で神の計画に見切りをつけたのだ。共存を切に願っていたからこそ、あれは人間を熱心に研究していたそれが結果として、あれに人間の愚かな本質を見抜かせてしまった

のだろう。計画の本筋通り、イエスの死を回避出来たとしても、結局、人間は自らこの世界を破滅に導く事になる。あれは、何もかもが無意味だと悟ったのだ」

「ですが、それならば伯爵様と共に人間の廃絶を慣行すればよろしかったのでは」

「吸血鬼と人間は、結局のところ共に歩まねばならぬ宿命にあつたのかもしれん。我等が血を求め、きやつらが無意識の内に存続を求める。それらは伴つてこの世界を構築している。どちらを欠いても、破滅するのだ。イエスが言いたかったのはそういう事だろう」

「伯爵様……」

鈍痛がドラキュラの脳内を刺激した。頭を抱え、よろける。ブラドはドラキュラを支えた。

「いかがなさいました？」

「ヤマシが死んだ」

悲痛な表情でドラキュラは言った。

「まさか、ソウクが……」

「一刻の猶予もならん。これ以上の魔性炉が失われる前に、全てを終わらせなければならぬ」

ドラキュラは考える。それが神の意志であるのかどうか、解らなくなってきたしまっていた。神はソウクに自分の代わりを勤めさせ

ようとしている。しかし、ソウクがこれ以上同胞を殺すというのであれば、それもまた神の意志に反するのだ。

貫き通すしかない――今まで歩いてきた道を、頑なに貫き通すしか方法はなかった。

「プラトーよ」

「はい」

「この千年、よく仕えてくれた。感謝する」

「勿体無いお言葉です」

「私の決断を赦せ」

ブラドは深々と頭を垂れた。

「今のソウクは、私の力を遥かに凌駕しています。交戦になれば、私は間違いないで殺されるでしょう。ならば、伯爵様の内に還る事が現状で最良の手段である事は明白です。全吸血鬼を代表し、私が伯爵様の決断を肯定します」

安堵したように微笑むと、ドラキュラは遥か上空に飛昇した。みるみる内に世界が小さくなっていく。この小さき世界を守りたい。ドラキュラはただそれだけを願った。

「愛すべき我が子らよ。共に歩もう」

ドラキュラは両腕を掲げた。腹部に存在する深淵の奈落が、漆黒

を広げ、ドラキュラを包み込んでいく。やがて、月すら覆い隠す程に巨大な闇の塊となったドラキュラは、ブラドを始めとする全ての吸血鬼を、その内に吸い込んでいった。

唯一人、小田桐ソウクを除いて。

病院の裏口。柳沢とリカ、そして谷口はすでに車に乗車していた。

そこから少し離れた路上にある、電線が切れた電柱を背中越しに挟むようにして、ソウクと矢部が立っていた。二人の肩に雪が舞い落ちては溶け、溶けては舞い落ちる。アスファルトには積もり始めていた。

少しだけ、話しておきたい事があるんだー矢部はソウクに言った。

「なあ、覚えてるか。森林公園で猿みたいな吸血鬼に襲われた時の事をよ」

「ああ」

「びびったぜ、ありゃあ。猿もそうだけど、お前の、魔性だったっけか？なんてとんでもねえ力だって、そう思った」

あの夜から、ソウクの運命は破滅に向かって歩き始めた。せいぜい一月前の話だが、かつての記憶は、あるいはかつての自分は、何世紀もの過去のように遠く、映像は壊れかけたテレビジョンのように所々歪み、曖昧になっている。

「お前に殺されるんじゃないかと思っただぜ」

「何故だ」

矢部は小石を蹴った。雪のせいで、遠くまでは転がらなかった。

「お前にや随分、酷い事してきた。怨まれて当然と思った」

怨み――曖昧な記憶の中でも、矢部に対してそんなものを抱いていなかった事ははっきりと思い出せる。ソウクは電柱に背中をもたれた。

「でもよ、殺されるどころか、俺はお前に命を救われた。お前は体を張って、俺の命を助けてくれた」

「そんな事もあつたっけな」

へっ――矢部は鼻を鳴らした。

「あん時からな、変わったんだよ」

「何が」

「お前に対する、俺の印象の全てさ」

雪を踏みしめる音。矢部はすぐ左手に見える自動販売機で缶コーヒーを二つ購入した。ソウクの前まで歩いて、片方を軽く投げる。

「こんなになっても、缶コーヒーくらいは買えるもんだな」

掌がコーヒーの熱に温められる。ソウクは暖かいと思った。暖かいと思ったのは久しぶりだった。矢部は小さく笑う。

「人間じゃねえかよ、ってな。俺はお前にそう思った」

「人間？」

「誰かの為に命を張れるって、そんな奴は人間しかいねえって事よ」

矢部はコーヒーの栓を開けて、口元に運んだ。熱いのか、一瞬だけ顔をしかめる。

「お前は俺達人間と変わらないんだよ」

結局、お前は俺達の誰とも変わらなかった訳だ――友だと思っていたヤマシの言葉。

お前は俺達人間と変わらないんだよ――友とは程遠かった矢部の言葉。

「悪かったな、色々。本当に、悪かった」

頭を下げる矢部に、ソウクは困惑した。ドラキュラを殺す方法を話し終えた時に、胸に焼き付けられた矢部の視線を思い出す。

視線の意味は解らなかった。あんな視線を投げかけられた事は今までなかった。

「いつでもお前にあたってばっかで、憎まれて嫌われても当然なのに、そんな俺を助けてくれて、ありがとな」

矢部は頭を上げなかった。雪が、矢部の頭髪を白く染め上げていく。

「顔を上げてくれ」

「小田桐……」

「お前にされてきた事で、腹立たしく思う事は何度もあった。だが、それは大した事じゃない。吸血鬼がこの国で生きようとしたら、そついう事はいくらだって繰り返される。お前が気にする事じゃない」

「強いな、お前は」

顔を上げた矢部の表情――笑っていた。愉しくて笑っているのはなかった。

「俺は弱い。だから、血液の渴望に耐えきれず、アズサを殺し、人間達を殺した。お前が頭を下げる価値なんてどこにもない」

雪が強く降り始めた。矢部の顔は見えなくなった。

「本当なら、好きな女を殺した野郎なんて、糞だっと思うところだぜ」

恋人を殺された経験を持つ矢部だからこそ、言葉に重みが生まれた。

「だけど、てめえの命を救ってくれた恩人を、糞だなんて思える奴は人間じゃねえ」

恋人を殺された経験を持つ矢部の言葉だからこそ、真意と信じる事が出来た。

「俺達はお互いによ、ダチになる資格も、時間もないかもしれねえ。でもな、柄じゃねえけど、次の人生つてのがあつたら、お前とは親友になれる気がするぜ」

照れくさそうに言う矢部だが、目の奥は涙で滲んでいた。それが零れ落ちる事はなかった。

右手――ソウクに差し出される。

「あん時作つた借りは、こんなんでも返せる程小さくねえが、事態が事態なんぞな。コーヒーとこれで勘弁してくれ」

あの時の借り――《吸血鬼》に差し伸べられた手を振り払った。

差し伸べた手を振り払われた事は何度でもある。だが、手を差し伸べられた事はなかった。

ソウクは、ほんの一瞬、一秒にも満たない間であるが――。

「充分だ」

笑って、矢部の手を握った。

雪が、唐突に止んだ。クラクションー柳沢が窓から身を乗り出し、二人に叫んだ。

「空を見てください！」

空ー月が、巨大なブラックホールに変わっている。おびただし数の吸血鬼達が、次々とそれに吸い込まれていく。

「何だ、ありゃあ」

「時間のようだ。行ってくれ」

「小田桐……」

「頼んだぞ。最後はお前達にかかっている。それから、社長の事もな」

かつてない程に強大な魔性の力が膨れ上がっていく。空の闇さえ歪められているようだった。

矢部は小さく頷いた後、柳沢の車へ走り出した。助手席の扉を開けると、もう一度ソウクに振り返る。叫んだ。

「無理かもしれねえが、少しでも可能性があんなら、生き残れよ！」

親指を立て、ソウクに向けた。

「じゃあな」

扉が閉まり、エンジンが吹いた。柳沢の車はあっという間に見えなくなっていく。

ソウクは、矢部から受けたコーヒーを開ける。すでに冷え切っていたが、別の温もりは残っていた。

一口だけ啜ると、電柱の下にそっと置く。それにどんな意味があるのか、ソウク自身にも解らなかった。もしかしたら――ソウクは思う。

俺も、何かを残したかったのかもしれない――。

ソウクは最後の魔性の解放を始めた。金色の翼が具現されていく。

これで、何もかも終わりだ――。

――闇に飛んだ。

25、ソウク対ドラキュラ〜最終局面〜

円形の巨大な闇が歪に蠢き始めている。沸騰した湯のように膨れ上がり、弾け、膨れ上がっては弾けた。

やがて、円から丸みが失われる。下部に二本の脚――闇の柱が出来上がり、側面には腕と思われる部位が、伸縮を繰り返した後にその姿を現した。

最後に上部から首が発生する。顔が伺えるようになった。顔――常識で計れる顔ではない。顔面にあるのは、大きな朱い目玉一つ。瞼さえ存在しなかった。輪郭は常に陽炎の如く揺らいでいる為に、正解な形が判断出来ない。

闇の巨人の誕生である。

脚部が地に足を付けると、大地震が起こった。炭になった多くの高層ビルがドミノ倒しで倒壊していく。

新宿にかろうじて残ったのは都庁のみであった。その都庁ですら、巨人の膝元にも届かない。

もつとも、それを憂う人間が誰一人としてこの街にはいなかった。もはや、東京近郊はソウクとドラキュラに用意された即席の戦場に過ぎなかった。

ソウクは巨人の頭部まで上昇した。金色の光が地上から帯を描いてソウクに還る。

朱い目がソウクを捉えた。さらに朱みを増していく。光った。

朱い閃光がソウクに襲い掛かる。かわした。空が一瞬発光した。爆発音。背後から熱風がソウクをあおる。キノコ雲が彼方に見えた。凄まじい破壊力。核にすら相当するのではないだろうか。しかし、ソウクは恐れない。恐れるものなど何もありはしなかった。

ドラキュラであつた巨人の声が聞こえる。魔性炉に直接響いているようにも、この世界全体に響き渡っているようにも感じた。

我は、この世界を愛しているー！。

巨人の拳ー黒の塊が下方から突き上げられるようにしてソウクに迫る。応戦ーソウクもまた、全身全霊を込めた黄金の拳を黒塊に打ち込んだ。

イメージー堪える。ここで無駄な魔性を使うな。

ぶつかり合う拳と拳。強大な魔性が拮抗し、弾ける。火花が散り、周囲の空間が余波で歪んだ。互角……かに見えたが、直後ソウクの小さな拳は砕け散った。

瞬間の再生。二発目は上方から蠅を叩くように降り下ろされた。

両腕をクロスさせ、頭部に運ぶソウク。刹那に二つの腕が絡み合い、菱形の盾に変わる。

衝撃ー何とか堪えた。足裏を巨人の顔面に向け、機銃のイメージを込める。父の記憶のアレンジ。秒間に何百発もの金色の弾丸が

発射された。

全てが朱い目に命中する。いや、命中したかのように見えた。弾丸は全て、着弾の瞬間に蒸発してしまっていた。

核に匹敵する光線を撃ち出す朱い目。想像し難い高温で覆われているに違いない。

足裏のイメージをジェット噴射に切り替える。足が火を噴く。反動で後退した。支えを失った巨人の腕が、いくつかのビルを巻き込みながら勢いよく大地に堕ちる。地震の後、クレーターが出来上がった。

地獄と繋がっている？

違う。地獄は目の前にあった。

「世界を愛している割に、やる事は随分派手じゃないか」

我は世界を愛している。人間の築いたものを愛しているわけではないー。

「あんたはいつもそうだ。いつだって、あんたにしか解らない理論を何もかもに押し付ける」

両腕ー金色のブレード。どこまでも伸びるーどこまでも伸びた。巨人の腕と同じ大きさにまで発展する。

「だから、あんたは嫌われるんだ。恐らく、あんたがもっとも敬愛している、神とやらにすら、な」

二刀を掲げ、同時に降り下ろした。巨人の両腕が切断され、闇に消える。ブレードはそのまま大地に突き刺さった。

「お互い、嫌われるのには慣れてるはずだが」

ブレードを再び掲げた。

「そろそろ、潮時じゃないか」

朱い目に、斬りかかる。金属音が響いた。ブレードはやはり、巨人の頭部で止まった。

「無理……か」

ソウクは崩壊した街に目を凝らした。数キロメートル先に、柳沢の車が倒壊したビルを避けながらジグザグに走行しているのが見える。そのさらに先に巨大な瓦礫の山。完全に道路を塞いでいる。あれ以上は進めないだろう。

瓦礫の山が、ドラキュラの墓場になる。

巨人が欠損した腕を再生する。瞬く間に天上に掲げた。成層圏にすら届くのではないかと錯覚してしまう程、圧巻の光景だった。

空から魔性の気配――赤い光が墜ちてくる。隕石だった。大小様々な大きさの隕石が、ソウク一人に降り注ぐ。

「何を具現しているんだ、あんたは」

左のブレードのみ腕に戻し、右のブレードを頭上で回転させる。
遠心力が全ての隕石を消滅させた。一呼吸おいて、ブレードを右腕
に戻す。

ドラキュラは体の部位以外のものでも触媒として具現出来る。ど
う見積もってもソウクが不利。やはり、このままでは悪戯に魔性力
を消費してしまうだけだ。

ソウクは魔性炉に語りかけた。

『アズサ、聞こえるか』

『何』

『もうすぐ終わる』

『せいせいするわ』

『今回だけは、邪魔しないでもらえるな?』

『何偉そうな事言ってるのよ』

『すまない。だが、《あれ》は集中力を極限にまで高めなければ
具現出来ないんだ。だから、頼む』

『最後まで勝手だね。なんだか、あんたが不幸になりさえすれば、
生き地獄だって耐えられる気がしてきた』

『アズサ……』

『あんたを呪い続けるわ』

『構わない。この一瞬さえ、我慢してくれれば』

一瞬だけー恋人に戻って欲しかった。そうすれば無限の力を得られるような気がした。

『約束はしない。あんたが地獄に墜ちる保証がない限りはね』

『俺はどう見たって地獄行きだ。安心してくれ。呪いの続きは、地獄で聞く』

『最後くらい、守りなさいよ』

『ああ』

ソウクはさらなる高みへと登った。月を背にする。一陣の風が大空に吹いた。魔性炉に全魔性力を込める。全てのイメージと全ての生命力。それらが伴うと、魔性炉から凄まじいまでの熱が発生し、ソウクの体の隅々にまで行き渡った。金色に光るソウク。やがて金色に朱みがかかる。

巨人もまた、全エネルギーを朱い目に集約していた。先程よりさらに赤く、太い閃光が発射される。ソウクに命中した。

消滅したのは閃光の方だった。正確には吸収されたと言った方が近いかもしれない。

核すら凌ぐ熱とエネルギーを持つ存在。

ソウクは、太陽になりつつあった。

26、終焉直前

何のために戦っているんだー誰かの声が聞こえる。ソウク自身の声だった。

熱に体が焦がされていく。体自体が熱の塊になっていく。熱い、苦しいー何の為にこんな目に合う？

父と交わした約束の為にー違った。

人間の為にー違った。

ドラキュラに対する復讐の為にー今となっては解らなかった。

俺自身の為にー解らない。

ソウクには何も解らなかった。

アズサの為にーそんな資格はなかった。だが、ソウクが戦うとすれば理由はそれであるべきだった。

アズサの呪詛は聞こえない。視界には何も映らない。あるのは体中を駆け巡る灼熱の炎。熱い、苦しいーだが、それが何だというのだ？

さらに熱を、さらなる苦しみを俺によこせー！

意識の中でソウクは叫ぶ。血液すら沸騰していた。

アズサに匹敵する苦痛を、与えた張本人である俺によこせー！

天変地異としか思えない光景であつた。真相を知る矢部達ですら、その太陽がソウクである事を思い出すのに少しばかり時間がかかる。肉眼では、月が太陽に変質したようにしか見えない。

朱い太陽だつた。完璧な円を描き、夜に太陽光を照らし出している。闇が朱く染まつていった。

闇の巨人は頭を抱え、膝を折る。

あううあああうー。

悲痛な叫びが大地に、振動と共に轟いた。両膝が地上に付く。衝撃で大地に亀裂が走つた。その亀裂は地球の中心へと続く地獄への蓋を開き、あらゆる建造物の残滓を飲み込んでいく。

「降りてください！」

運転席の柳沢が叫んだ。矢部は助手席の扉を蹴り開け、後部座席のリカと谷口を一瞥する。

「リカちゃん！」

思いの他リカは冷静である。慌てる事なくロックを外し、迅速に足を外へ出す。谷口は反対側へ。全員が降りたのを見届けると、最後に柳沢が運転席を出た。

亀裂――広がりながら柳沢の車へ迫ってくる。そして、飲み込んだ。

亀裂はその後、数十メートル先の瓦礫の山の手前まで伸びて止まる。瓦礫を中心に、左側に矢部とリカが、右側に柳沢と谷口が立っていた。対岸までの幅はおよそ七メートル。

「無事ですな」

安堵した柳沢が、瓦礫の山に目を向けた。様々な建造物が重なり合い、天を仰ぐようにそびえ立っている。まるで人類の墓標だった。

矢部とリカは、ソウクの創り出した太陽を見上げ、それが照らし出した世界を眺めた。

本来ならば、この辺りから見える景色は高層ビルの群れと、そこを蟻のように行き交う人間達の姿であるはずだった。

全ては変わった。

何もない世界。

誰もいない世界。

都が荒野のように開け、冷たい風が吹き荒び、闇の巨人が中心で悶え苦しんでいる。

それらは全て、朱色の光に包まれていた。闇と朱色のコントラスト。温度は急激に上昇していく。それでも、日中のような明るさはない。黄昏時に似ていなくもないが、それとも決定的に違った。これから夜が来るわけではない。今が夜であった。昼と夜を超越した時間軸に矢部達はある。世界の終わりを抽象画にしたような景色。

真実は違うのだろうが、矢部にはこの光景が世界中のどこまでに

も続いているように思えた。途方もない絶望感が彼を打ちひしごうとしている。

リカが矢部の手を握る。大丈夫ー呟くように言った。

打ちひしがる訳にはいかない。

闇の巨人は矢部達を目指して歩いてくる。正確には、矢部達の後ろ、瓦礫の山の向こうにある海を目指して。太陽光の届かない海底を目指して。

何もない世界において、それがいくら巨大な存在であろうと、距離感とは皆無だった。遙か遠方にいるようにも見えれば、手が届きそうな程近くにいるようにも見える。

巨人が一步を踏み出す事に地震が起こる。リカが体勢を崩す。矢部が背中を支えた。

「見てください！」

対岸の柳沢が巨人を指差した。光に晒された巨人の体が、徐々に小さくなっていく。巨人を覆う闇が、ソウクの光によって剥がされていった。

柳沢は指先に魔性を集約する。

「準備はいいですね、矢部さん？」

「決まっていますよ。やりましょう」

地震が小さくなる。巨人が小さくなる。それでも歩く。体を覆う闇を撒き散らしながら、一步一步、頑なに巨人は歩いていった。

悲痛な叫びー泣き声にすら聞こえた。

それでも容赦なく、太陽はギラギラと輝き、照りつけ、巨人をあぶる。巨人の闇から朱い蒸気が立ち上ってきた。うずくまり、ジタバタと足掻く巨人。そこからはどのような威厳も見いだせない。瓦礫と砂埃が舞うだけだった。

そして、巨人は碎け散った。

「あれ、もしかして、終わりました？」

巨人の爆発の反動で砂嵐が発生していた。矢部は右腕で目を庇いながら、リカの肩を抱き寄せる。

「いえ、まだです！」

対岸はまったく見えなかったが、柳沢の声は返ってくる。安堵と不安が入り混じった。

まだですー巨人は、ドラキュラは生きている。

「矢部さん、そっちだ！」

「え……？」

砂嵐の向こうに、人影が見えた。

「矢部さん……来ます」

リカの声は近い。大丈夫だ、恐れるな――矢部は言い聞かす。

全裸のドラキュラが向かってきた。膝が震え、肌中が黒い斑点に浸食されている。恐らく、これが皮膚の癌化なのだろう。今宵、大きな修羅場をいくつも乗り越えてきた矢部ですら目を背けたくなくなるほど、ドラキュラの体色は悲惨だった。

頭を抱え、呻くドラキュラ。崩れるように倒れた。それでも這う。這った。遙か遠けき海を目指して。海底がもたらす暗黒を目指して。

ゆっくりと、しかし確実に矢部の元へ近付いてくるドラキュラ。矢部の背後には巨大な瓦礫の山がある。今のドラキュラに、越えられるとは思えない。

憐れみが芽生えた――打ち消せ。

「柳沢さん、やれます……やりましょう!」

砂嵐の向こう側から息遣いが聞こえたような気がした。さすがの柳沢も、この状況には緊張を隠せないようだった。

ドラキュラは這う。ドラキュラは思う。我は死ぬわけにはいかない。

ドラキュラは足掻く。

矢部は、走り出していた。

27、正真正銘の最後へ

それはある種の興奮だった。目の前で元の姿に戻ったドラキュラが這いつくばっている。体を蝕む黒い斑点は次第に増殖し、間隔を狭める。やがてドラキュラは黒の塊になっていった。砂嵐程度では遮れないソウクの太陽が黒を朱く光らせた。

人間を蟻のように扱うドラキュラ。ドラキュラに蟻のように扱われた人間。今、双方の立場は逆転した。

俺達が全てにケリをつける――力がみなぎる。筋肉がほぐれる。全ての動作がしなやかになる。英雄に似た気持ち。

矢部はドラキュラを飛び越え、背後から乗り掛かった。両手でしっかりとドラキュラの頭部を押さえる。強引に上げさせた。

周囲は砂嵐。見えない。何も見えない。リカすらどこにいるのか判らなかった。

「柳沢さん、ここです！」

がむしやりに叫んだ。ドラキュラが手の中で蠢いている。こめかみの感触がダイレクトに伝わってきた。しなびたゴムのようだ。悪寒が走る――悪寒は消せる。

「我の、邪魔を、するな」

両手に力を込める。ここまで疲弊していても、さすがは吸血鬼の王。僅かにでも気を緩めれば簡単に振り解かれそうだった。

「我の邪魔をするな！」

限界――そんなものはないと想像しろ。矢部は自分に言い聞かせた。

手が痺れる――痺れも消せる。消せないものは何もなかった。

砂嵐が割れた。割れ目に影――柳沢が跳んでいた。先端に鋭さを集約させた指を魔性の力で変えた針。長く、力強かった。

上空からドラキュラの額を射程圏に入れる――入った。

矢部と柳沢の目が合う。終わりへの希望が、炎となって互いの瞳に宿っていた。

突き刺す――矢部の手が振り解かれる。

突き刺さった――ドラキュラの掌に。

信じられなかった。矢部は屍餅をつきながら、掌に針を刺したまま立ち上がるドラキュラの背中を見上げる。

柳沢は宙に浮いていた。針を指に戻そうとしたが、ドラキュラがそれを許さない。突き刺さった針を摘むようにして抑えている。

ドラキュラはそのまま、針を振り下ろした。大地に叩き付けられ、転がっていく柳沢。針は指に戻ったようだが、矢部の視界からは完全に消えた。

柳沢の安否が気になる。視界零の現状で方向感覚は失われていたが、近くには地獄に繋がる亀裂が生者を飲もうと待ち構えているのだ。矢部は柳沢の名を叫んだ――返事は返ってこなかった。

ドラキュラは膝に手をつきながらも、再びゆっくりと歩き出した。瓦礫の山へ、山の彼方にある海へ。

瓦礫の山へ――その前にはリカがいる。

柳沢は走った。何もかもが消えた。柳沢に対する心配も、終わりの希望も。

恐怖だけが矢部を動かしていた。恐怖も消せる――今宵、幾度も消してきた。今回は消せなかった。

疲弊しきっているドラキュラが、リカを見つけたら補給を行わない訳がない。

「リカちゃん、逃げる！」

走った。ドラキュラの背中が見えた。リカの悲鳴が聞こえた。

飛びかかった。ドラキュラを背中から抱き締めた。頬に痛み――肘鉄を食らった。離さなかった。脇腹に痛み――肘鉄を食らった。離さなかった。

「退かぬか、人間！」

鼻に痛み――後頭部で頭突きを食らった。離された。

鼻血が出る。息苦しい。厭わない。

飛びかかったー掴んだのは空気と砂だけだった。

「リカちゃん逃げろ!!」

細かい足音が聞こえる。リカが小走りで逃げている。

何処へー瓦礫の袋小路。亀裂の袋小路。

立ち上がれーリカを救い出せ、リカに期待するな、動けるのは俺だけだ。

悲鳴が大きくなる。走る。砂嵐の中に黒きドラキュラ。ドラキュラに肩を掴まれているリカ。その向こうに巨大な影ー瓦礫の山。

瓦礫の山から何本かの鉄パイプが突き出ている。先端が折れ、歪な棘を作り出していた。

武器を取れ、武器があればドラキュラを殺せる、リカを救えるー。
I。

今宵三度も目の前でリカが危険に晒されている。二度助けた。何度だって助けられる。矢部は走った。

鉄パイプを引き抜く。小さな瓦礫が反動で上から落ちてくる。ガラス片で腕を切った。

ドラキュラに構える。リカは必死に抵抗していた。まだ血液を吸われてはいない。

リカの背後に回る。ドラキュラの方が頭二つ分身長が高い。隠れ蓑はリカ。腹這いで近付く。蟻よりも速い腹這いだった。

リカの足元に到達――立ち上がる。突き刺す。

手応えはあった。しかし完璧ではない。黒き肉片が飛び散る。ドラキュラの左眼を貫いただけだった。ギリギリでかわされた。

ドラキュラはリカを突き飛ばし、矢部を殴りつけた。矢部は倒れる。勝機は完全に絶たれた。

左眼に刺さった鉄パイプをだらりと顔からぶら下げて、ドラキュラは残りの右眼で矢部に憎悪の視線を送る。

「邪魔を、するな」

最後は頑なさの勝負だった。矢部のリカに対する執着とドラキュラの生に対する執着――ドラキュラが勝っていた。

「ちくしょう、やっぱり、てめえ、バケモンだぜ」

力無く矢部は笑う。諦めが彼を支配した。リカの方に視線を移したが、砂嵐が彼女の存在を隠していた。

すまねえ、小田桐。お前の命、無駄にしちまった――。

矢部の懺悔に呼応するように、地上から叫び声に似た轟音が聴こえた。気温が上昇していく。砂嵐の向こうで液状の炎が猛っていた。亀裂から溶岩が吹き出している。

矢部の思った通りだった。地上と地獄は完全に繋がりは始めている。

ドラキュラは笑った。途方もない苦痛に苛まされているのは明白なのに、それを感じさせないほど高らかに笑った。

「私の勝ちだ。小田桐ソウク！」

ドラキュラは瓦礫を登り始めた。

上空――太陽の内。

熱い、苦しい――心地良い。

『熱いよ、苦しいよ』

消え入りそうに小さなアズサの声が、それでも明確に阿鼻叫喚と聞こえる。心地良くない。

『早く、終わらせて、早く、死んで』

言葉は呪詛、感情は苦痛。

いつになったら死ぬんだ、いつになったら消えられるんだ――ソウクは問うた。

全ての魔性炉は繋がっている――神の声が聞こえた。それがどうした――ソウクが答えた。

お前が神なら、早く終わらせてくれ。アズサを楽にしてやってくれー。

全ての魔性炉は繋がっているー。

黙れ。

何故だと思う？

黙れ。

答えはもう、目の前にあるー。

黙れ。

ドラキュラが瓦礫の山の頂上に登り詰めた瞬間、闇から朱色が消えた。ドラキュラは歓喜に打ち震えた。

完全なる勝利。太陽光の消失は、ソウクの命の消失に直結する。

遙か遠方に海が見えたが、もはやそんな事はどうでもよかった。

瓦礫の山の頂上。ここが全てのゴールになったのだ。体が徐々に蒼白さを取り戻していく。やはり、ほとんどの魔性を使い果たしている為か再生は遅いが、それも些細な事だ。

我は勝ったぞ、我が内に在る我が子らよー。

完全なる勝利の余韻。出来れば衣服を纏いたかったが、それを具現する魔性力が残っていなかった。

完全なる勝利の余韻――上空からの気配に吹き飛ばされる。

「なん、だと？」

声に出た。流星のような朱色の点がドラキュラの眼前に降ってくる。

瓦礫が巻き上げられた。

信じたくはない。現実を受け入れたくはない。これは死体だと思いたい。

ドラキュラは恐怖した。恐怖したのは初めてだった。

死体と期待した肉体は、瓦礫を掻き分けてゆつくりと立ち上がる。

肉体の名はソウクだった。やはり全裸。所々が黒く焦げ、灰色の煙を体から登らせている。

ソウクは言う。

「やはり、決着は俺達でつけるしかないようだ」

ドラキュラは言う。

「認めたくはないが、そのようだな」

ソウクは言う。

「お互い、魔性は残ってないが」

ドラキュラは言う。

「朽ち果てた肉体は残っている」

ソウクは頷く。

「これで、正真正銘の」

二人は言う。

「最後だ」

28、決着、長い夜明け

拳と拳が交錯していた。殴り、殴られ、殴り、殴る。

足場は悪かった。お互いに裸足。瓦礫に擦り切られ、時に貫かれる。

膝蹴りを腹に――拳が顔面に返ってくる。

拳を顔面に――膝蹴りが腹に返ってくる。

痛みの伴わない死闘。あるのは消耗だけ。どちらが先に倒れるか。単純なゼロサム。

しゃがみながら体を反転させる。ソウクの足払いがドラキュラの膝を挫く。ドラキュラは倒れない。ドラキュラの肘鉄がソウクの顎に命中する。ソウクは倒れない。

足は血だらけ――再生されない。そんな力は残っていない。

戦闘は頭突き of 応酬に発展する。頭突き、頭突かれ、頭突き返す。額から血が流れ、蒼白な顔を赤く塗り替える。倒れない。

足場が揺れる。瓦礫が揺れる。

眼下――砂嵐は消えていた。亀裂から噴き出した溶岩が山の麓を溶かしている。山の高度が少しずつ下がっていった。

気にする事は何もない。今に全てを――力は漲らず、命が漲って

いた。

頭突きの応酬――不意を付くようにドラキュラの掌打がソウクの胸を打った。バランスを崩す。

ドラキュラは畳み掛けた。右拳を左頬へ、左拳を脇腹に入れる。繰り返した。

「何故倒れん」

右拳を左頬へ――ソウクは左手で受け止める。

カウンターの右ストレート。ドラキュラの鼻孔を突いた。

よろける。倒れない。

「あんたこそ、何故だ」

追い討ちのコンボ。単純な拳の乱打。打つべし、撃つべし、討つべし。

ドラキュラは倒れない。

「我はこの世界の為に、我の存在意義の為に、我の愛する子供達の為に、倒れるわけにはいかないのだ」

ドラキュラの反撃。やはり乱打。堪えろ、耐えろ、挫けるな。

「小田桐ソウク。汝は何故、我を憎む」

乱打をかくぐり、右腕を取った。拉ぐ。骨の折れる音がした。

「あんたは俺から、俺の全てを奪ったんだ」

ソウクは乱打を再開する。かくぐられ、左腕を取られた。拉がれる。骨の折れる音がした。

「我が奪ったのではない」

ソウクの右腕とドラキュラの左腕が交錯した。お互いの頬に拳がめり込む。

離れる。乱打の応酬。殴り、殴られ、殴り返す。

「そうだ。直接奪ったのはあんたじゃない。俺自身だ。俺自身の弱さと浅はかさが、アズサを辱め、殺した」

片腕の乱打、乱打、乱打。どちらも、一歩たりとも引かなかった。

「ならば、何故」

「解ってないな」

ソウクは乱打に緩急を付ける。押されているふりをしろ、隙を見出せ、瞬きの間に勝負を決めろ。

隙を見出した。

「だから、余計に憎いんだ」

上体を反らす。ドラキュラの拳が鼻をかすった。

反動――この一撃に残された力の全てを託せ。

右ストレートを顔面にめり込ませる。ドラキュラの動きが止まった。それでもドラキュラは倒れなかった。

ソウクとドラキュラは肩で息をしていた。文字通り、お互いの全てを出し尽くしても決着は付かない。

下方から熱風が二人を煽った。溶岩がすぐそこまで近付いている。

「敬意を表そう、小田桐ソウク」

ドラキュラの声色から感情は見いだせなかった。

「我をここまで追い詰めた汝の力は、私の生涯で最大の驚嘆に値する」

ソウクは笑った。愉快で仕方なかった。

「あんたにそんな事を言われるとはな。愉しすぎて泣けてくる」

「汝の力はハクアすら凌駕していた」

「違うな。俺は親父程強くなかった。親父のように強ければ、アズサを失う事はなかった」

「ならば、その力は何処から沸くというのだ」

「魔性炉は繋がってるんだろう。親父の力が、今の俺に宿ってるだけだ」

ドラキュラは眼を閉じた。瞬間、時が止まったかのような錯覚を覚える。何が起こった――瞬時に悟った。

ドラキュラが解脱したのだ。魔性炉に頼らずとも、時として生身の肉体は奇跡を起こす。

悟りの境地――今更ドラキュラが何を悟るというのだ？

「そうか。ハクアもまた、神の声を聞いていたか」

瓦礫の隙間から蒸気が噴き出した。残された時間は限り無い。

「ならば、あの時から決まっていたのだな」

「何を言ってる？」

ドラキュラは跪く。膝を蒸気が溶かしていく。

「神よ。あなた様のご意向に、一度だけ背く我を赦したまえ」

立ち上がった。

「何を言ってるんだ」

「我は我が子らの命を背負っている。例え決められた宿命といえど、もはや諦めるわけにはいかぬのだ」

「最後まで、一人よがりか。あんたらしいぜ」

ソウクは構える。ドラキュラは構えない。

「我々は吸血鬼だ」

「だからなんだ」

「相応しい決着の付け方というものがある」

牙を指差すドラキュラ。ソウクは頷く。なるほどなー。

「確かに、このまま殴り合っても埒があかないな。しゃくだが、あんたの意向に乗る事にするか」

歩み寄る二人。踏みしめられた瓦礫から蒸気――いよいよ溶岩が混じってきた。

お互いの首筋を差し出す。

「一つだけ約束せよ」

「何をだ」

「汝が生き残った場合、我を継ぐのだ」

鼻で笑った。

「まっぴら御免だ」

「これは宿命なのだ、小田桐ソウク。我が倒れた場合、誰かが我を継がなければならぬ」

「継がなければどうなる」

「世界が滅ぶ」

「冗談のような言葉。ドラキュラが冗談を言うはずもなかった。

「何だと？」

「今こそ、世界の真実を悟れ」

お互いの牙が、突き立てられた。

視界が消え、音が消える。すべきは一つ。ドラキュラを吸い尽くせ。

ソウクは闇に放り込まれた。

刹那の空間で、二人は最後の言葉を交わす。

この世界は、私の魔性炉によって具現されている――。

ふざけるな、いくらあんでも、そんな事が出来る訳がない――。

その通りだ。だが、神の言葉を思い出してみよ――。

神の言葉――全ての魔性炉は繋がっている。

まさか――。

そう。魔性炉は世界を構築する為のネットワーク。我の魔性炉を核として、末端である汝ら我が子の無意識の内に、恒久的にこのメッセージを送っていた。世界を象れ――。

馬鹿な。それじゃ、あんたが再三に渡ってしようとしてきた事は――。

先刻言った通り。この世界を管理し、運営し続ける――。

何がどうなつてやがるんだ――。

神の世界もまた、この世界のように発展を繰り返し、栄華を極めていた。しかし、争いが生まれ、争いに変わり、やがて滅亡へと帰結した。残された神々はやり直す事にしたのだ。神の英知の頂点。魔性炉を使う事によって――。

神の英知？やり直す？それならば、もしや、神の正体とは――。

人間だ――。

視界が戻り、音が戻る。足元は溶岩に浸かっていた。

吸い続ける。吸われ続ける。

再び視界が消え、音が消える。

想像力を創造力に変える力、魔性炉の発明。世界を新約聖書の時代から、《新約聖書に習って》具現する計画。それが我とイエスの出生だった――。

この世界は、あんたの誕生と共に生まれたっていうのか――。

その通り。我が新約聖書の神の役目を。イエスが文字通りキリストの役目を背負った。この計画の最大の目的は、イエスを生かし続ける事に、すなわち、十字架の運命を回避する事にあつた――。

それにどんな意味がある――。

絶対的な神の存在。その実在を人間達に知らしめる――。

だから、それが何だっていうんだ――。

神の存在が明確ならば、この地上から争いが消える。恒久的な平和が訪れる――。

まやかした――。

いいや。神々の世界においても、争いの発端は結局のところ異なる神の信仰だった。絶対神が存在すれば、争う理由は消える――。

だったら、なんであんたは人間を殺す――。

イエスが早急に計画を見限ってしまった。自ら人間に殺されたのだ。あれの魔性炉もまた、我と同じく核となっていた。本来ならば、

我とイエスの魔性炉さえあれば、この世界を具現するには充分だったー。

イエスの魔性炉を補う為に、あんたは子孫を繁栄させたっていうのかー。

そうだ。我もまた、この時点で完全に人間を見限ったー。

あんたが世界を具現しているなら、もっと簡単に人間を滅ぼせたはずだろうー。

それが違うのだ。神は人間にも、極微小の魔性炉を与えている。こちらのネットワークに、我は介入出来ないようになってるー。

人間にも魔性炉が？そんな片鱗は見いだせないー。

単一では機能しない。人間の魔性炉は不特定多数が同じ想像を働かせる事で初めて機能するのだ。それが時として死者の魂を呼び、空に円盤を飛行させる。時には神に近い奇跡すら起こせる。だからこそ、我は人間が、人間が憎いのだー。

どういう事だ。あんたは何故、そんな理由で人を憎む？神は一体、何がしたいっていうんだー。

我を継げば、全てが明らかになるだろうー。

ドラキュラの声が小さくなる。

視界が戻り、音が戻る。

すでに腰まで溶岩に浸かっていた。ソウクはドラキュラを吸い続けた。もう、吸われる事はなかった。

「私の敗北は決まっていた」

ドラキュラは牙を抜いた。ソウクは吸い続けた。

「人間を、愛しているか」

解らなかった。愛したのはアズサ唯一人。今のソウクに愛すべき者はいない。今のソウクを愛する者はいなかった。

だが――。

「気付いているだろう、我を継げば、何が出来るか」

気付いていた。ドラキュラなら無から魔性を具現出来る。

「忠告しておく。私の魔性を、繰る為には、血は必要不可欠だ。血を絶てば、世界は崩壊する」

吸血鬼は血を求める。人間は無意識に生存を求める――ドラキュラからソウクに伝わった。

だからこそ、血が甘美なのだ。だからこそ、世界が成り立っていたのだ。

ドラキュラがあればほど同胞殺しを憎んだ理由――世界の為。世界

を構築する魔性炉を減らしてはならなかった。

ドラキュラがハクアに見せたあの表情――何もかも、世界の為。

ハクアが言った言葉――吸血鬼と人間の未来の為に、血液を絶て。

血は甘美だ。あるいは、血こそが人間と吸血鬼の呪われた絆なのかもしれない。

世界の為に、再び血を啜る吸血鬼となれ――違ふ。

ソウクはドラキュラを吸い終えた。牙を抜いた。

「血は甘美だ。血は力だ。けどな、俺はもつと美味くて、力強いものを見つけたんだよ。恐らくは、それが俺の勝因だ」

ドラキュラの表情――虚ろいでいた。

「何だ、それは」

「寒空の下で啜る、缶コーヒーさ」

ソウクはドラキュラを見つめた。推測にしか過ぎないが、恐らく、一瞬、ドラキュラは微笑んだ。

「さらばだ」

前のめりにドラキュラが倒れる。溶岩があつという間に彼の体を飲み込んでいった。

ソウクに魔性が漲っていた。飛び上がる。欠損した下半身が瞬く間に再生した。

彼方の海から、朝日が登るのが見えた。

エピソード アズサ 〓ワラキアで待つ〓
(前書き)

今回を入れて、あと三話で完結いたします。

エピソード アズサ くワラキアで待つ

金井アズサと谷口浩二の結婚式は再建された神の家で行われた。第二次吸血鬼戦争から七年、首都がようやくその機能の一端を取り戻した頃、アズサもまた、新しい人生の一步を踏み出す事が出来たのだ。

再建された神の家は、吸血鬼が運営していた頃に比べるとかなり質素な造りになっている。木造で奥行きもなく、かつては煌びやかに輝いていたキリストを模した巨大なステンドグラスも、小さな二つの天窓に変わっていた。

収容限界人数は二十名。もともと、あの戦争で親族や友人、同僚のほとんどを失った二人の結婚式に訪れたのは僅かに三名。狭いからこそ、アズサ達は神の家を選んだのだ。

祭壇の前に、ウェディングドレスに身を包んだアズサと、はちきれそうなタキシードを着た谷口が立っている。横目に谷口を見て、不謹慎とは思いつつもアズサは苦笑してしまう。サイズの合うタキシードを新調するのに大分時間がかかったのだ。何とか取り寄せられたのは昨日の話。それまでに、三着のタキシードが谷口の体型の犠牲になった。

ありふれた思い出が一つ増える。アズサは幸せを実感していた。

目の前で神父が神に祈っている。そして言う。汝ら、病める時も健やかなる時も、互いを敬い、助け合い、愛し合う事を誓いますか――。

「誓います」

二つの天窓から陽光が降り注ぐ。天然のスポットライトが、交差して二人を照らした。

『言っておかなきゃなんねえ事があるんだ』

一週間前の、谷口の言葉を思い出す。現在、二人は横須賀にアパートを借りていた。そこから徒歩で五分程の距離にある、海の見える公園。芝生に腰を下ろし、二人は手すりの向こうにある夜の海を眺めていた。

『ソウちゃんの事だ』

アズサが谷口と再会してからの七年、彼の口からソウクの名前が出たのは初めてだった。ほとんど条件反射のように、アズサは顔をしかめる。

『聞きたくないよ、そんな事』

『俺達は来週、夫婦になる。お前は谷口アズサになんだ。俺が隠し事してたままじゃ、お前に申し訳がたたねえし、神様に顔向けも出来ねえ』

谷口は無神論者だった。神に顔向けなどする必要はないのに、どこかで漠然と神の存在を信じている。そんな谷口がおかしくて、アズサは表情をほぐし、溜め息混じりに微笑んだ。

『聞いてあげる。神様に怒られたら谷口さんが可哀想だもんね』

嫌味を込めずに皮肉を言う。谷口の横顔は遠くを見つめていた。

『あの日、ソウちゃんがお前の命を助けた日を覚えてるか？』

忘れるはずがない。今から十年も前の話だが、全ての映像は鮮明に記憶の引き出しに入っている。

人生において、二度の死を体験したアズサ。一度目の死は、人間の手によってもたらされた。

谷口と知り合ったのはアズサが大学四年生――二十二の頃。すでに四月の時点で内定を取っていたアズサは、最後の学生生活のほとんどをアルバイトに捧げていた。

アルバイトパーラーの受付嬢。谷口はこの常連だった。先に目をかけたのは谷口。景品交換時にアズサに他愛もない話を振る繰り返し、日課にした。谷口の言葉には魔力があった。人を楽しませ、安心させる。一ヶ月で二人は恋仲に落ちた。

ある日、谷口のアパートで目を覚ますと、見知らぬ女がアズサを上から覗きこみ、睨みつけていた。女――三十代後半。谷口と同年代に見えた。手には包丁を握り締めている。

混乱――逃げなきゃ、ベッドから起きあがらなきゃ。

遅かった。腹を刺される。胸を刺される。首を刺される。痛みと熱にのたうちまわり、やがて痛みと熱と意識が消えた。

暗闇の中に、見知らぬ男が見える。その顔色から吸血鬼である事

はすぐに解った。男は無表情で手を差し伸べる。アズサは掴む。吸血鬼は冷血と聞いていたが、信じられない事に、掌を通して伝わってきたのは暖かい温もりだった。

彼は私を黄泉へ導く死神なのだろうかー。

アズサがそう思った瞬間、再び意識が遠のいた。

次に目が覚めると、谷口の心配そうな顔がぼやけて見えた。体を起こそうと思ったが、途方もない倦怠感に阻止される。ここはどこだろうー眼球を左右に移動させる。まだ視界は定まらないが、慣れた家具がそこら中に置かれている事から、谷口のアパートである事は推測できた。

壁際に、男が一人腕を組んで立っている。闇の中にいた男。谷口よりも、その男の存在がアズサに大きな安堵感をもたらした。睡魔が洪水のように瞼の上に降り注ぐ。アズサは安心して眼を閉じた。

『たまたまソウちゃんが隣の部屋に住んでよかった。お前の血の臭いを嗅ぎつけて、非常事態を悟ってくれた事もな』

ソウクが住んでいたのは、吸血鬼の襲撃で炭になったあのアパートの一室だった。

『お前を刺した、あの女は……』

『知ってるよ。谷口さんの奥さんでしょ』

『ああ。前妻だがな。オイラは元々女癖が悪くって、あいつとは

ソリが合わなかったんだ。オイラがほとんど無理矢理、離婚に漕ぎ着けちゃった』

谷口の前妻は独占欲の人一倍強い女だった。谷口に全てを捧げようとしていた。谷口にはそれが重かった。

あの後、奥さんはどうなったのーアズサは事件後何度も尋ねた。谷口はバツの悪そうな顔をするだけで、答えようとはしなかった。

『オイラが、あいつを殺したようなもんだ』

谷口は海を見つめたまま言った。アズサも海を見つめた。波音すら返事をしない。誰かが口を開かなければ、世界から音が失われるような錯覚さえ覚える沈黙だった。

『オイラとソウちゃんはほとんど同時に部屋に入った。部屋の中は地獄だったよ。あいつは死体になったお前を滅多刺しにした。壁っていう壁に血がとんでよ。吸血鬼じゃなくなつてその臭いが鼻につくんだ』

谷口は続ける。その後、女を取り押さえた谷口は、何度も女を殴りつけた。女は何故か微笑んでいたらしい。体中に穴の開いたアズサの死体を抱きかかえ、谷口はしばらく泣き叫んだ。女が立ち上がり、谷口の背中に包丁を向ける。谷口は気付かない。包丁が突き立てられる。ソウクが女を突き飛ばした。

『倒れたまま、あいつ笑い続けてた。オイラは怖くなったよ。自分のしてきた事のツケの大きさにそこで気が付いたんだ。一緒に死にましよう。あいつは笑いながら言い続けた』

谷口にソウクが耳打ちする。

ここにいと、血の匂いで気が狂いそうになる。あんたに聞いた。死んだ女に、会いたいカー。

泣きながら頷くと、ソウクは答える。

『あいつを殺せば、アズサを生き返らせる事が出来るってな』

海から視線を谷口の横顔へ戻す。谷口と目が合う。涙で滲んでいた。

『それって……』

『ソウちゃんはお前の命を具現するって言ってたよ。でもな、それには触媒が必要になる。生きている人間が必要になるってな』

ソウクはアズサの死体から血液を食った。その後、谷口の前妻の首筋に牙を突き立てる。こちらは吸血ではなく、魔性炉とアズサの血液をその女へ注ぎ込む為だった。

女の顔が変わっていく。皺が消え、艶を取り戻した。体から贅肉が消え、胴部にシャープなラインを作り出していくのが服の上からでも判る。

女は死に、アズサに生まれ変わった。

『その時のソウちゃんな、事情なんか知らなかったんだよ。とにかくその場の状況から、殺した奴と殺された奴を見分けてただけなんだ。あの時、全部事情を知ってたら、ソウちゃんがお前を助ける

事はなかったかもしれねえ』

あの時のソウクードラキュラにはめられ、アズサを殺す以前のソウクならば、確かにそうしたかもしれない。むしろ、ソウクが憐れんだのは谷口の妻の方だったかもしれない。

『私の体は、《二回目に死ぬ時まで》の私の体は、谷口さんの奥さんの……』

『そうだ。結果として、オイラはあいつとアズサの人生をめっちゃくちやにした。オイラがもっと誠実な男だったら、誰も苦しまなかったし、誰も死ななかった』

アズサは空を見上げた。谷口にどんな言葉をかけたらいいのかわからない。雄大な漆黒がアズサに答えを導く事はなかった。

もし、谷口と知り合わなければー。

ソウクを愛する事も、ソウクを憎む事もなかった。痛みにも苦しみにも苛まされる事はなかった。ありふれた人生が確かに保証されていた。

谷口にかける言葉は罵声であるべきだとアズサは思う。かつてソウクにしたように、罵り、蔑み、谷口の生を呪うべきだとアズサは思った。

けれど、出来ない。谷口を呪う事が出来ない。

その時、アズサは気付いた。

私は谷口さんを愛していないー。

ソウクをあれほどまでに呪えたのは、元々ソウクを愛していたからだった。ソウクの魔性炉が本来あるべき場所に戻りたがっていたから？

違う。今のアズサに魔性炉はない。だが、それでもソウクが呪わしかった。狂おしい程に憎んでいた。

そんなに、ショックだったの？私はあいつに裏切られて、そんなにショックだったのー。

『アズサ……』

横にいた谷口が、いつの間にか目の前にいた。芝生に頭をつけている。

『赦してくれとは言わない。結婚は破棄でいい。オイラを殺してくれて構わない』

泣き声ー声は夜に響き渡り、涙は大地に染み渡った。

赦すも赦さないもない。アズサはソウクしか憎めない。ソウクしか愛せなかった。

『顔を上げてよ、谷口さん』

顔は上がらない。頭を震わせるだけだった。

『私だって、あいつと浮気してたんだよ。おあいこでしょ』

おあいこのはずもない。そんな事は谷口も解っている。

『もし、本当に私に悪いと思ってるなら、奥さんに悪いと思ってるなら……』

アズサは谷口の背中をさすった。

『生きて、私を幸せにして。奥さんの体で生き続けた私を、誰よりも』

谷口は顔を上げた。アズサの胸に顔を埋めた。再び泣き叫んだ。アズサは、谷口を抱き締めた。大きな谷口――今は少年より小さい。包み込むのは簡単だった。

神に顔向け――出来る人間などおりはしない。そもそも、神が実在するはずがない。

この世界は狂っている。神が管理しているというのなら、誰もかれもが、あまりに狂いすぎていた。

谷口の腕を取り、ヴァージンロードを歩く。神の家の外へ。柔らかな空気。暖かな風が潮の香りを後方から運んできた。

拍手――矢部とリカが満面の笑顔で二人を祝福していた。

矢部とリカにとって、谷口は恩人である。あの溶岩から倒れた三人（柳沢含む）を救い出したのは、谷口なのだ。谷口自身も覚えてないのだが、体の底から得体の知れないエネルギーが沸いたらしい。

七メートルの亀裂を生身の人間が、まして谷口のような体型の人間が軽々飛び越えるとは信じがたいが、それは事実なのである。

矢部とリカがアズサ達に続いて教会を出ると、最後に柳沢が顔を出す。つい先日、念願の小田桐ソウクを主人公としたドキュメンタリーを出版したらしい。

「一度やってみたかったのよね」

「何をだ？」

アズサはブーケを天高く放った。もちろん、狙いは定めてある。ブーケはリカが受け取った。

アズサは最後のソウクの言葉を思い出す。七年間、苔のように耳にこびりついた言葉だった。

死にたくなったら、いつでも俺を殺しに来てくれ。ワラキアで待つー。

狂おしいほど、ソウクが呪わしかった。

エピローグ ソウク〜長い夢〜

夢を見る。永遠と錯覚するほどに長い夢を。

闇の中に、様々な顔が浮かんでは消え、消えては浮かぶ。矢部、社長、ヤマシ、クスカ、爺さん、親父、お袋、ドラキュラ。そして……。

いつも最後に浮かぶ顔は決まってる。

ヘンスンの遺体はワラキア湖に沈めた。血を絶ったまま、ヘンスンはあれから二十年の歳月を俺と共に過ごしてくれた。俺の目的を手伝い、俺が真に殺すべき存在の居所を突き止めてくれた。

あの夜、俺がドラキュラに監禁された後、ヘンスンはドラキュラに助けられたという。魔性炉を減らしてはならないーそれが温情であったかどうかは定かじゃないが、ヘンスンの言うとおり、ドラキュラにもやはり血族に対する何らかしらの愛はあったようだ。

ドラキュラ城のホールは朽ち果てていた。光り輝いていた大理石の床は至る所が黒く汚れ、豪華だったシャンデリアには蜘蛛の巣が張っている。

俺はドラキュラの肖像画を眺めた。鏡に映る自分の顔を眺めた。同じ顔をしていた。俺はドラキュラになっていた。

世界を具現し続ける。それがドラキュラの役目。神の声は絶え間なく魔性炉に響いている。

我らが降り立つその日までに、完全な平穏と恒久的な平和を創り出せー。

「うるさい」

俺はひとりごちる。くだらない事だらけだ。五世代を除けば世界に、もはや吸血鬼は俺一人しか存在しない。俺が死ねば、世界は消える。ドラキュラになった俺は血液無しでは生きていけない。血液無しでは魔性炉を機能させる事は出来ない。

俺は二度と血を啜らないだろう。果たせなかった約束。守れなかった誓い。そういうものを取り戻そうと思ったわけじゃない。今じゃ、それは神に対するささやかな反抗に過ぎなかった。

この世界は神を語る人間達が創り出した魔性炉によって具現された仮想世界だ。奴ら、神の世界はドラキュラの言葉通り、戦争によって荒れ果て、最悪の環境となっている。

戦争のない、完全な平和に基づいた世界。そこに《神》として降り立つ計画。先代のドラキュラは、神の意志に従いイエスと共にそれを築き上げようとしていた。

イエスが人間に見切りをつけ、ドラキュラは人間を見限った。イエスが何故人間に絶望したのかまでは解らなかったが、ドラキュラの事なら解る。奴が最後に言った言葉。それが全てだ。

人間にも魔性炉があるー。

そう。神は人間にも魔性炉を与えていた。神の計画は、人間と吸

血鬼が手を取り合う事で初めて実現されるのだ。

ドラキュラを神と認めた人間達が、皆一様に平和を望む。人間の魔性炉は不特定多数が同じ想像を働かせる事で機能する。簡単に世界は平和になる。

とんでもなくずさんな計画。人間が神を名乗る事の傲り。成功するはずがない。人間が考えるのはいつだって自分の事ばかりだ。それが悪いわけじゃない。そんな事に気付きもしない神の頭がいかにただけだ。神を名乗る人間の頭が。

ドラキュラは悩んだ末、子孫を繁栄させ人間を根絶する道を選んだ。平和が欲しければ人間を殺せばいい。神よりは、ドラキュラの思考はまともだったと言える。

もちろん、ドラキュラが人間を憎んだ理由はそれだけじゃない。

神と同じ肉体を持ちながら、神の言葉を聞き取らず、手前勝手に生きる人間達に、ドラキュラは嫉妬していた。

神は人間の繁栄を望んでいた。神と人間は同族なのだ。神が人間を優遇するのは当然だった。

然り、ドラキュラにも人間を慈しむ心がある。ドラキュラは葛藤した。滅ぼすのが躊躇われた。神の意志に背いているような自己嫌悪に襲われた。実のところ、ドラキュラが子孫の繁栄を求めたのはそれが一番の理由だったのかもしれない。

ドラキュラの子供達ードラキュラの分身だったのだ。一人では抱えきれない葛藤を、奴は子孫に託し、人間根絶を遂行する為の完全な意志を手に入れた。

ドラキュラが人間を憎む心が爺さんやヤマシ、クスカ、それに従う数万の吸血鬼を生み出し、人間を慈しむ心が、ヘンスンや親父、そして俺のように希有な吸血鬼を生み出した。親父があれほどの魔性を誇ったのには、そういう経緯があったようだ。

ドラキュラは神の意志に従った。神はドラキュラに見切りをつけた。ドラキュラでは神の望む世界は創れないー。

だからこそ、人間を慈しむ心を持つ《とされる》俺が新しく選ばれた。

城の地下には、牢の他にワイン貯蔵庫がある。ドラキュラが酒を嗜むとは知らなかったが、ヘンスン曰わく、かなりの酒豪だったらしい。解らなくもない。酒でも煽らなければ、やってられなかった。

巨大な樽がいくつも並ぶ部屋。鼠が入り浸っている。俺の足音に気付くと蜘蛛の子のように散っていった。この部屋だけはヘンスンが手入れを欠かさなかったが、亡き今、朽ちるのも時間の問題だろう。

樽からグラスにワインを注ぎ、飲み干した。悪くない味。いつかアズサのマンションで飲んだ赤ワインの味に似ていた。心地よい苦味が口に広がる。だが、それでも矢部に貰った缶コーヒーには劣っていた。

一度だけ、柳沢から手紙と書籍が送られてきた。

手紙ー近況報告。社長とアズサが結婚し、それに続いて矢部も

リカという女と再婚したらしい。

書籍――タイトルは『第二次吸血鬼戦争の真相』。著者はもちろん柳沢。俺について事細かに書かれていた。最後のページには遙かな昔、社長の工場で撮った写真が挿んであった。満面の笑顔の社長が中心に立ち、間抜け面の俺と仏頂面の矢部の肩を組んでいる。

柳沢の書籍はベストセラーになり、奴はその資金と貯蓄を元手に巨大な老人ホームを建てたらしい。運命に翻弄されてきた母に、最後くらいいい思いをさせたかったです――手紙の最後にしたためられていた。

俺はドラキュラの肖像画の上に、その写真を貼り付けた。

一人きりで、長い歳月を過ごした。ワラキアには誰も来ない。最後の吸血鬼が住む呪われた土地を訪れる者はいない。

夢を見る。永遠と錯覚するほどに長い夢を。闇にたくさんの顔が浮かび上がってくる。月日が経つ事に、浮かび上がる顔は限定されていく。

爺さんが消え、ヤマシが消え、クスカが消え、ドラキュラが消えた。

社長が消え、親父が消え、お袋が消えた。

残ったのは、矢部とアズサだけだった。

矢部――太陽になる事を説明した後で、俺に投げかけたあの視線

を送り続けてくる。視線の意味。『出来るだけ死ぬな』。死ぬな、よりおこがましくはなく、かといって投げやりでもない。俺が人生でついに得る事が出来なかった、親友が親友に送る視線。

アズサー憎悪の視線を送り続けてくる。視線の意味。『死ぬ』。あるいは『呪われる』。もしくは『消え去れ』。

俺は死ぬ。いつか必ず死ぬ。血液を断ち続ければ、遙か遠い未来の事であるとしても死ぬ。

俺はアズサに言った。

『死にたくなったらいつでも殺しに来てくれ。ワラキアで待つ』

アズサが死にたくなるまで俺は死なない。死ぬわけにはいかない。アズサの為に世界を具現し続ける。アズサが平穩の内に、幸福を見いだせる世界を具現し続ける。

『不器用だなおい』

親父の声が聞こえた。

『あんまり気負うな。お前はよくやったぜ。さすがに俺の息子なだけある』

あんたの息子で良かったよ。それがせめてもの救いだ。

『馬鹿言つな。お前が思ってるほど、俺の生涯は立派じゃねえよ。ま、お前の創り上げる未来を、縁と一緒に眺めてやるから……』

慌てなさんな、ゆっくりきやがれ。俺達はある世で待つてから
よー親父の声は消えた。

緩やかに時が過ぎていく。俺は膨大な時間を、時にはワラキア湖
のほとりに佇み、時にはドラキユラ城でワインを啜りながら過ごし
た。

ワインが切れたーする事が一つ減った。

血が欲しいー今でも時折渴望に苛まされる。俺はその度、アズ
サの名を思い出し、神を憎む。

神はいずれ、俺にも見切りをつけるだろう。構わない。だが、ア
ズサが生きている内は、生きる事を切望している内は認めない。

アズサはやがて、俺を殺しにやってくる。俺を殺せるのはアズサ
だけだ。俺を殺す資格があるのはアズサだけだ。

断じて神などにはない。

神の居所は知っている。アズサが来たら、話してみようと俺は思
う。あるいは、俺が神を殺すまで、俺を殺すのを待ってくれるかも
しれない。そうでなければ、それはそれで構わない。

どちらにせよ、もう世界は神の思う通りには動かない。

夢を見る。永遠と錯覚するほどに長い夢を。闇の中に浮かぶ顔は、
今ではアズサだけになった。

アズサの顔すら曖昧になり、やがて夢は完全な闇に塗り潰されて

いった。

アズサが俺の元を訪れたのは、夢が闇に浸食されてから三日目の夜の事だった。

レクイエム　　闇に二人がよく馴染む

ドラキユラ城ホール。踊場へ続く階段の中心に、俺は腰掛けている。赤い絨毯は染みだらけになっていた。

ホールの扉が無造作に開く。アズサが立っていた。

アズサは黒のスーツに身を包んでいた。喪服のように見える。顔も体も変わっていない。あの時のままだ。

「変わってないな」

「あんたは老けたわね」

俺は立ち上がった。腰が重い。年を食ったせいかな、それともアズサが目の前にいるせいなのか。

「楽しめたか」

「それなりにね」

アズサに表情はない。空虚な瞳が俺を見据えていた。俺はアズサに近寄った。

「旦那は、谷口は死んだわ。三年前に癌を患ってね。矢部君もすっかりお爺ちゃん」

社長が死んだ――社長の顔は思い出せない。

「変わってないのは私だけ。変わらないのは私だけよ。何もかもあんたのせいだね」

口調に変化はない。アズサは淡々と言ったのけた。

ドラキュラを継いだ瞬間、俺はアズサをこの世界に具現した。今のアズサは年を取らない。俺の魔性炉がアズサをあのかのまま具現しているからだ。アズサの命は俺と共にある。俺が死ななければ、アズサが棺桶に入る事もない。

「そろそろ、締めくくるのもいいかと思って。この世界には悪いけど」

アズサにだけは、この世界の真相を伝えていた。

扉が音もなく閉じる。シャンデリアが機能しないホールは、完全な暗闇に包まれた。それでも、アズサが俺から視線を外す事はなかった。

「見えてるのか」

「まあね。あれから私、ちょっと人間離れしてるから」

口調に若干の変化。皮肉らしい。

「随分、余裕があるみたいだな」

「何でそう思うの」

「俺が、素直に殺されると思ってるのか？二度と俺を信じないん

だろう」

アズサの唇が釣り上がった。

「なに？あれも嘘だったの？」

愉快でたまらない。そうとでも言いたげに、アズサは腹を押さえてケタケタと笑い出した。

「この期に及んで、そこまで往生際が悪いとは思ってなかったんだけど」

「ああ。もちろん冗談だ」

「あんたこそ、余裕あるじゃない」

確かに。俺はどうかしてる。アズサにかけるべきはこんなふざけた言葉じゃない。なのに、意志に反して滑らかに皮肉が口について出ていく。

「あるさ。こんな所でずっと一人きりだったんだ。今更、何を恐れればいい」

嘘だ。俺は怖くてたまらない。アズサに殺される事がー違う。俺が死んで今度こそアズサが完全に消えてしまう事が怖くてたまらない。

なんという弱さ。なんという情けなさ。どうしたんだ。俺は一体どうなってしまったんだ。

アズサの顔を見た瞬間、俺の中に閉じ込めたあらゆる感情を抑えつけていたダムが決壊した。かつての愛情がぶり返し、忘れ去られた罪悪感に押し潰されそうになっていた。

俺にはそんな資格はない。俺には泣き言を言う時間がない。そんなものは全て死んだはずだった。あの時、この場所で。

「寂しかったんでしょう」

あくまで面白そうにアズサが言う。

「寂しくてたまらなかったんでしょう。こんな所で、ずっと一人で世界を背負わされていたんだから」

寂しかったー馬鹿な。そんなはずがない。

「だからしつこく私の夢なんか見るのよ」

驚愕ー自分でどんな顔をしているか判らない。

「私はあんたの魔性炉で具現されてる。私とあんたは、結局繋がってるのよ」

アズサは自分の頭と俺の頭を交互に指差した。

「このこと、ここがね」

全てが見透かされている。俺は言葉を失い、立ち尽くした。

「本当に弱虫よね、あんた」

言葉が呪詛になる。呪詛が憐れみにすら聞こえた。

「あんたはいつもそう。一度決めた事も守れない癖に、口だけは達者なの。今だって寂しくてたまらないのに認めようもしない。あの時もそう。私が吸ってもいいって言った時に吸ってれば、あんな最悪の結末は迎えなくて済んだのよ」

憐れみが怒りに変わる。アズサの言葉には魔力があった。

俺は心をなぶられる。アズサの言う事は正しい。アズサの言う事には反論出来ない。俺にはその資格すらない。

アズサが憎かった。アズサが愛おしかった。神が憎かった。神が呪わしかった。

「酷い顔してるね。だけど、同情なんてしないから」

言葉からあらゆる感情が消えた。鋭さだけが残っていた。

「あんたは永劫に一人きり。無間地獄で悶え苦しめばいいのよ」

何か言え、アズサを黙らせる——言葉が生まれる事はない。

呼吸が乱れる。視界が乱れた。思考も乱れる。

「死ね」

何か言え——何を言う？

「死ね」

黙れ。

「死ね」

黙るな。俺を呪え。さらなる罵声で俺を否定し続ける。

「死ね」

支離滅裂な思考。どちらが本音なのかも解らない。俺は狂ってる。アズサに狂わされている。あるいは神に狂わされている。

足元が覚束ない。膝が折れた。俺はアズサにひれ伏した。

頭を踏みつけられる。何度も何度も踏みつけられた。

「早く死になよ、ねえ、早く」

痛みが欲しい。せめて痛みと共にありたい。そうすれば俺は狂わずにすむ。

顎を蹴られた。アズサの表情が一瞬伺える。恍惚としていた。俺をなぶる事が心底楽しい――そうでなければ出来ない表情をしていた。

「ねえ、私ね、あんたが、私を二度目に甦らせたあの日から、一度もしてないんだよ」

蹴られる――頬、顔面、頭。

「なんでだろう。濡れなくなっちゃったんだ。ねえ、私ってエッチ出来ない体なの」

そんな事はないー不老不死を除けば、アズサの体は生身の人間と変わらない。

声に出そうとしたが、その必要はなかった。俺とアズサは繋がっている。

「そうだよ、私、今、濡れてるもん」

髪を掴まれ、引き上げられる。頬を何度もはたかれる。

俺は勃起した。アズサの興奮が魔性炉を通じて俺の性器に押し寄せてきた。

「なに、あんた、マゾだったっけ」

いつか矢部に言った言葉ーマゾじゃないんだ。特に殴られたいもないのに、懇願なんて出来ないね。

「だったらなんで勃ってるのよ」

性器を握られる。怒張していた。

唇が重ねられる。アズサの舌が俺の口内を掻き回した。

魔性炉が伴って暴れる。ワラキア城が、俺が女子高生を救い出した渋谷のホテルに変わった。

有線が流れる。バラード。そぐわない。いつでも、俺の人生は俺にそぐわないものばかりで構成されている。

アズサはベッドに俺を押し倒した。いつの間にか、お互いに全裸になっていた。

アズサは俺に跨り、器用に性器を挿入させる。激しく腰を振った。

喘ぎの代わりに呪詛がこぼれる。

死ね、死ね、死ねー！。

規則正しいリズム。狂いきったリズム。アズサは俺の首を絞める。妖艶な眼差し。瞳の奥には憎悪の灯火。

腰を振る。呪詛を吐く。何もかもが不釣り合いだった。俺はどうなるー！知った事か。

憎め、呪え、蔑め。そうする事でお前の気が紛れるなら、それがせめてもの償いになる。

眼を閉じる。矢部がいた。悲しそうに笑っていた。

眼を開く。アズサがいた。愉しそうに笑っていた。

俺はアズサに触れる事さえできなかった。完全なる侵犯。アズサが俺にしているのはつまりそういう類のものだ。

かつて、俺がアズサにした事と全く同じだった。アズサは体の全てを使って俺を犯そうとしている。あるいは俺を侵そうとしている。

アズサが巨大な女性器に見えた。俺は包み込まれていく。

忘れるな――神に対する憎しみを。

忘れるな――俺がしでかした過ちを。

忘れる――過去の幸せを。

絶るな――ありもしない希望に。

俺の目の前には絶望が広がっているだけだ。

アズサが隣で寝息を立てている。子供のようにだった。憑き物が落ちたような、安堵に満ち足りた表情。

寝言――ソウク。俺の名前を呼んでいる。アズサの口から俺の名前が出たのは、あの塔の中以来だった。

赦されたわけではない。赦される事など永劫にない。それでも――
！。

その言葉を、無間地獄に連れて行く俺を赦してくれ。その言葉だけは、俺の心にしまわせておいてくれ。

眠っているアズサに触れたかった。俺は顔を振った。

アズサが眠っている内に、全てを終わらせよう。神の居所は判っている。ヘンスンと俺の長年に渡る議論が導き出した結論。

ドラキュラが日の光に弱い理由。神に匹敵する能力を持つドラキュラが万が一反旗を翻した時の保険――。

神は太陽の向こうにいる。俺は太陽光では止められない。

首を洗って待っている。

「必ず戻る。俺を殺せるのはお前だけだ」

約束――破り続けてきた。これが最後の約束だ。破るわけにはいかない。

もう一度アズサの寝顔を覗き込んでから、俺は灯りを消した。有線のバラードが、鎮魂歌に変わっていた。

レクイエム ―闇に二人がよく馴染む―（後書き）

最後まで読んで頂きまして、誠にありがとうございます。本来なら10月中に終わる予定が、結局11月いっぱいまでかかってしまいました。自分が『小説家になろう』において投稿した小説としては一番長くなった本作品ですが、楽しんで頂けたでしょうか？少しでも読者様の暇潰しに役立てていたらこの上なく幸福です。

自分のやりたい事全てをぶち込む、それが僕のこの作品に対する気概でした。しかし、至らない所が多々あり、結局自分の未熟さを再確認させられる結果になってしまい、完全燃焼はできませんでした。そのような状態でも読んでくれた皆様には、感謝とお詫びの気持ちでいっぱいです。

僕にとっては節目となった本作品。今回の失敗を次に生かそうと精進いたします。

なお、気付かれている方もいらっしゃると思いますが、ブ（ヴ）ラド・ツェペシとワラキアは過去実在した人物と国です。ツェペシの方はブラム・ストーカー著、『吸血鬼ドラキュラ』のモデルになった人物ですが、自分が借りてきたのは名前だけで、実在した人物、国名と一切の関連はありません。

最後にもう一度、やたらと長くなってしまったこの作品に付き合ってくださった皆様、本当にありがとうございます！また別の作品でお会いできたら、さらにさらに幸せです。

太郎鉄

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9802a/>

闇に朱色がよく似合う

2010年10月13日18時05分発行